

補足説明資料③-40

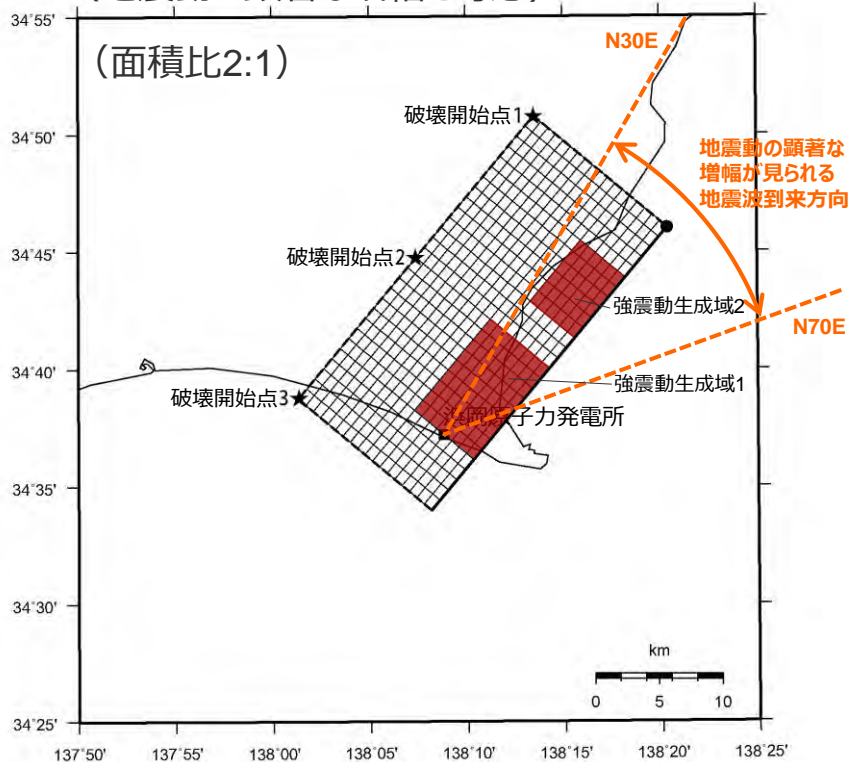
敷地下方の想定スラブ内地震の基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の設定
（補足）

<補足説明資料③-40 敷地下方の想定スラブ内地震の基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の設定（補足）>

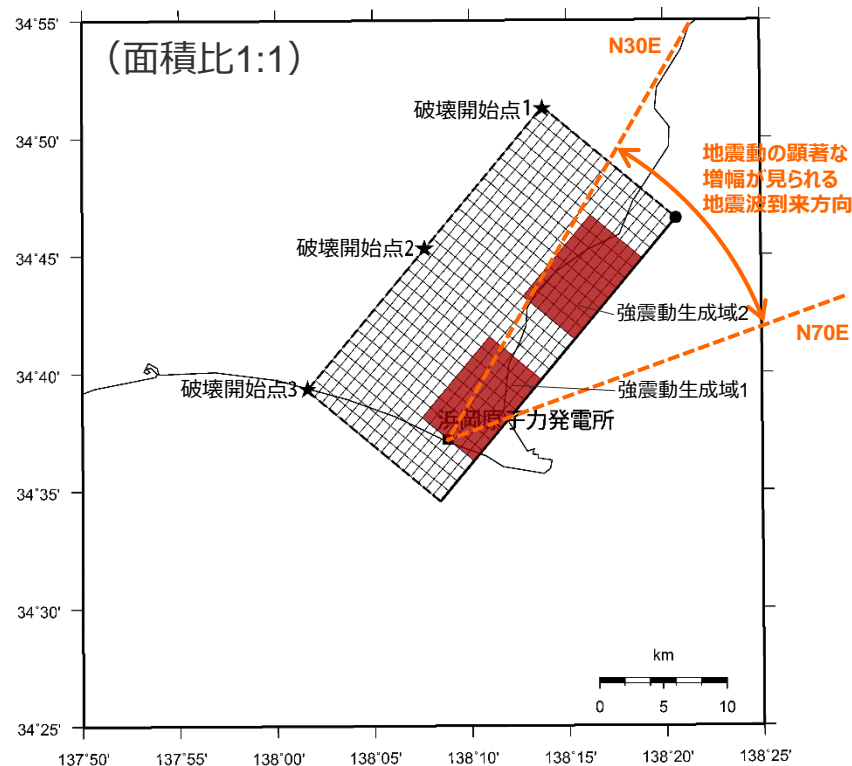
検討概要

○敷地下方の想定スラブ内地震の基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）について、2つの強震動生成域の面積比 2 : 1 の妥当性を確認するため、前述の断層位置の設定方針に基づき、面積比 1 : 1 としたパラメータスタディモデルを設定し、統計的グリーン関数法による地震動評価結果を比較する。

基本震源モデル
(地震動の顕著な増幅を考慮)



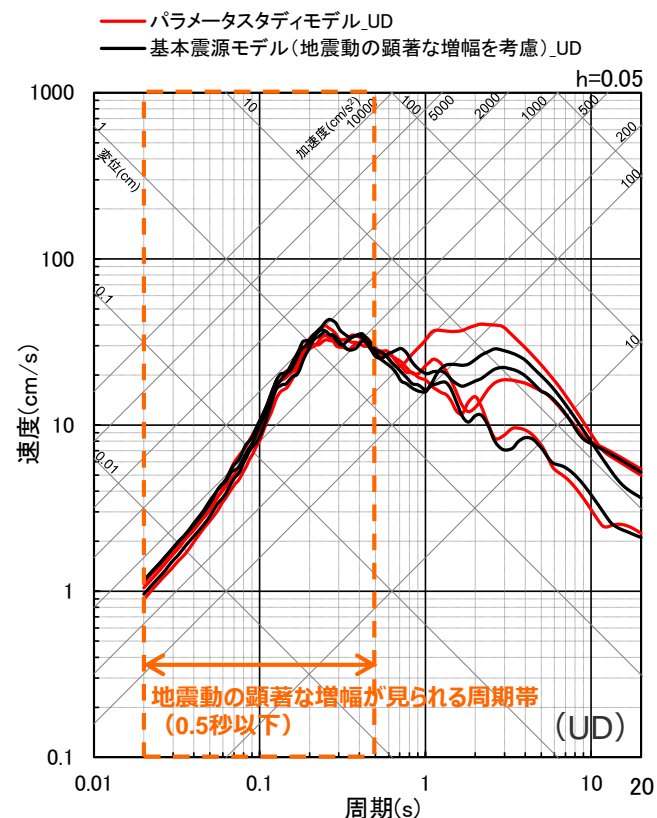
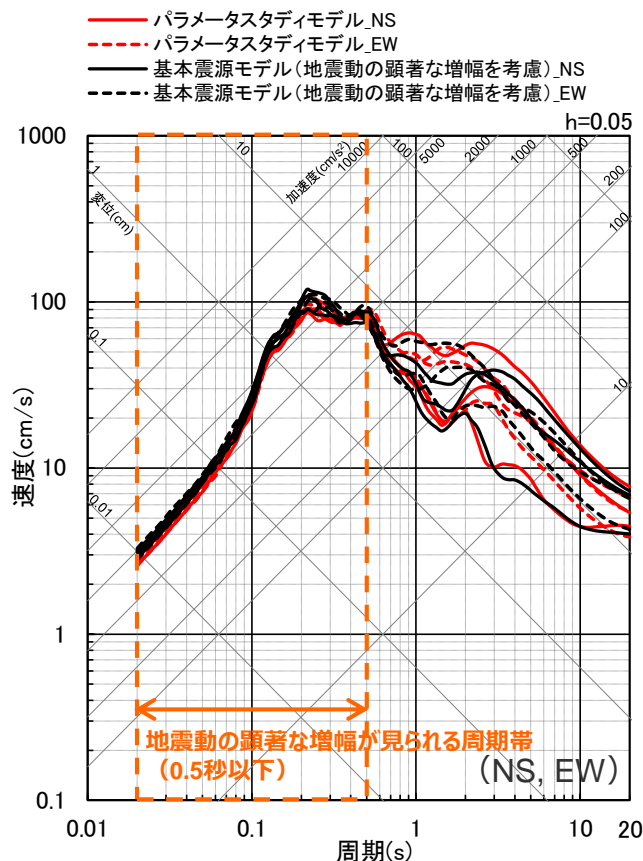
パラメータスタディモデル



<平面配置図>

<補足説明資料③-40 敷地下方の想定スラブ内地震の基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の設定（補足）>
地震動評価結果の比較

○強震動生成域の面積比 2 : 1 とした基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）と面積比 1 : 1 としたパラメータスタディモデルの地震動評価結果（擬似速度平均応答スペクトル）の比較によると、基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動レベルはパラメータスタディモデルと同程度であり、地震動の顕著な増幅が見られる周期0.02～0.5秒において、基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価結果の方が、若干大きくなっている。



<統計的グリーン関数法による地震動評価結果の比較（擬似速度平均応答スペクトル）（破壊開始点1～3）>

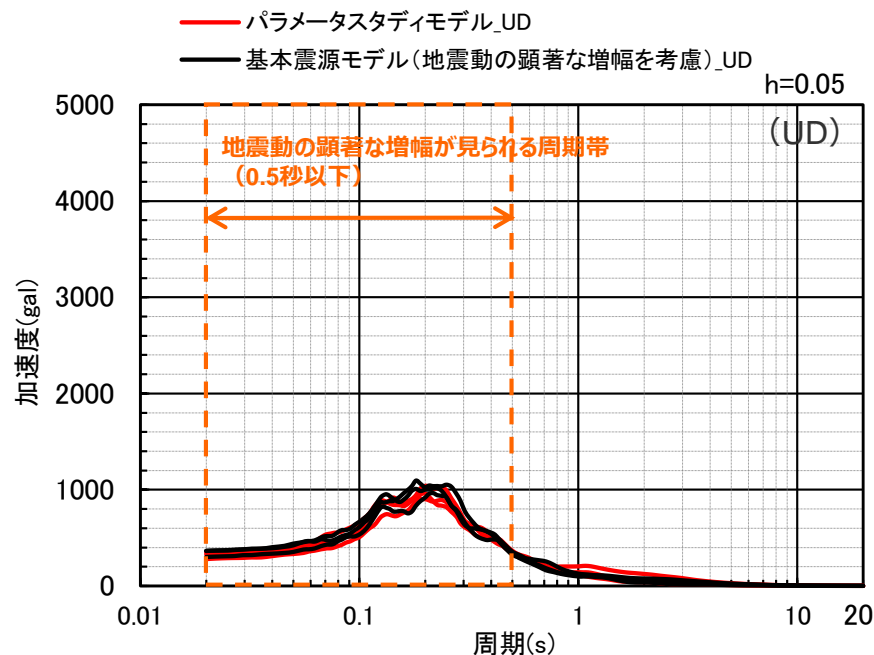
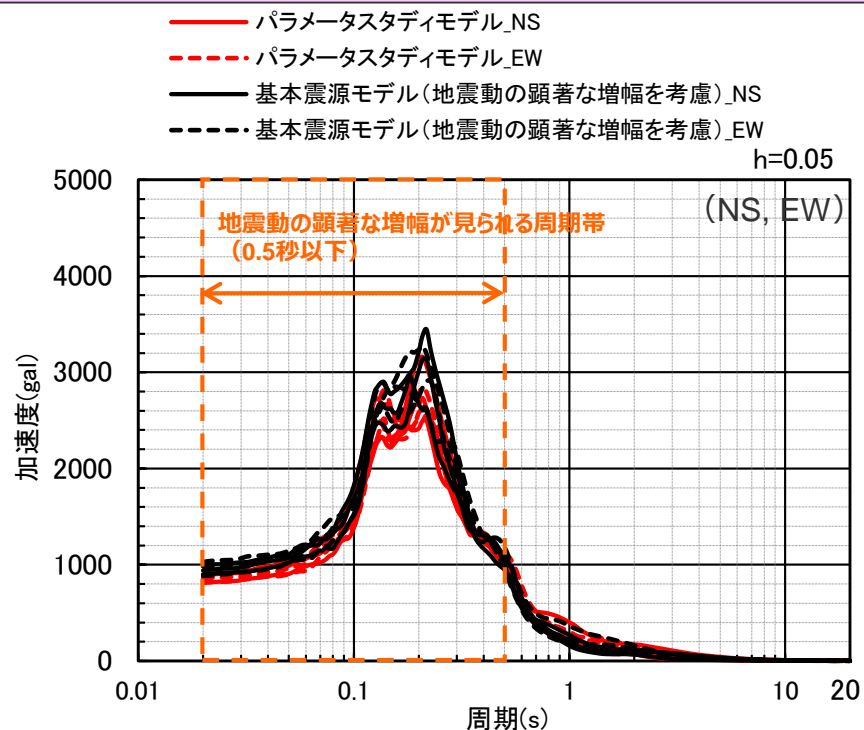
<補足説明資料③-40 敷地下方の想定スラブ内地震の基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の設定（補足）>

地震動評価結果の比較

○ 強震動生成域の面積比 2 : 1 とした基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）と面積比 1 : 1 としたパラメータスタディモデルの地震動評価結果（加速度平均応答スペクトル）の比較によると、基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動レベルはパラメータスタディモデルと同程度であり、地震動の顕著な増幅が見られた周期0.02～0.5秒において、基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価結果の方が、若干大きくなっている。

⇒ 敷地下方の想定スラブ内地震の基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）について、2つの強震動生成域の面積比 2 : 1 とする妥当性を確認した。

○ 以上の検討（断層位置、強震動生成域の面積比）を踏まえ、敷地下方の想定スラブ内地震の基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の妥当性を確認した。



<統計的グリーン関数法による地震動評価結果の比較（加速度平均応答スペクトル）（破壊開始点1～3）>

補足説明資料③-41

地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認

概要

【地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価】

- 地震観測記録の分析結果で確認された地震動の顕著な増幅の特性を的確に反映するため、この敷地固有の地盤増幅特性を詳細に考慮できる**断層モデルを用いた手法を重視し、2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討により検証した方法**（「増幅方向」に位置する強震動生成域（アスペリティ）の各小断層からの地震動（グリーン関数）に増幅係数を乗じる方法）を用いて、地震動の顕著な増幅を反映する。応答ベクトルに基づく手法は、断層モデルを用いた手法による地震動評価結果を用いて応答スペクトルに与える影響を求めて反映する。
- 各検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価は、断層モデルを用いた手法において、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲・増幅の程度を**地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定**することにより、**保守的な地震動評価**を行う。応答スペクトルに基づく手法は、断層モデルを用いた手法による保守的な地震動評価結果を反映することにより、保守的な地震動評価を行う。

項目	地震観測記録の分析結果等	2009年駿河湾の地震（本震）の再現検討	基準地震動の策定に係る保守的な評価
地震動の顕著な増幅の範囲（震源位置）	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の到来方向（N30E～N70E、「増幅方向」）の地震波のみ顕著な増幅が見られる。 ・「増幅方向」でも地震波の入射角が鉛直に近づく敷地近傍は顕著な増幅が見られない。 	<p>—</p> <p>（震源断層面が「増幅方向」の範囲内に位置するため強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数の全てに増幅係数を考慮）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）を「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲を、地震観測記録の分析結果における「増幅方向」より広くし、敷地近傍も含めて設定（保守的な評価）
地震動の顕著な増幅の程度（特性）	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の短周期の周期帯（フーリエスペクトルの周期0.2～0.5秒）で地震動の顕著な増幅が見られる。 ・「増幅方向」でも増幅の程度は一様でなく、2009年駿河湾の地震（本震）は最も大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に周期0.2～0.5秒のみ増幅させる増幅係数を乗じる方法を採用 ・増幅係数における増幅の程度は、その程度が最も大きい2009年駿河湾の地震（本震）を対象に、増幅を考慮するグリーン関数の波形合成結果の5号炉観測記録の再現性を確認して設定 	<ul style="list-style-type: none"> ・左記と同じ強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法（背景領域に増幅係数は考慮せず）を採用 ・増幅係数は、左記と同じ増幅の程度が最も大きい2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現性を確認したものを地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに一律適用（保守的な評価）

【地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認】

【① 地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析】

- 検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価の結果について、まず、「**2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討と同じ増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の小断層のみによる地震動（波形合成結果）**」の影響を確認する。また、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層の影響を確認する。
- その上で、上記の「増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の小断層のみによる地震動（波形合成結果）」について、**2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討で確認した地震動の顕著な増幅と同じ特性が反映されていることを確認する。**

【② 地震動評価結果に考慮された保守性の確認】

- 各検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価及び応答スペクトルに基づく地震動評価について、**敷地近傍は地震動の顕著な増幅が見られないなどの地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価結果との比較を行い、地震観測記録の分析結果に対し地震動の顕著な増幅が保守的に考慮された地震動評価結果となっていることを確認する。**

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(検討概要)

【2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討】

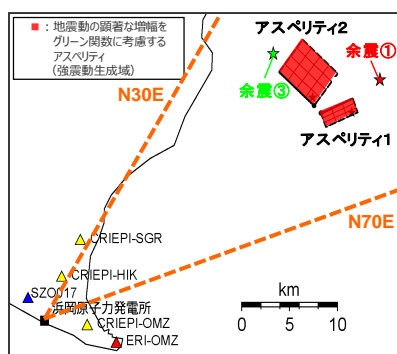
- 2009年駿河湾の地震（本震）を対象として、強震動生成域のみの震源モデルに基づき、強震動生成域（アスペリティ）の各小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法を用いて統計的グリーン関数法による地震動評価を行い、波形合成結果との比較により、地震動の顕著な増幅が見られた観測点（5G1、5RB）の観測記録の再現検討を行い、断層モデルを用いた手法における地震動の顕著な増幅の反映方法の検証を行った。

【検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価】

- 検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価は、地震観測記録に基づき確認された地震動の顕著な増幅の特性を的確に反映するため、断層モデルを用いた手法を重視することとし、2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討により検証した方法を用いて、地震動評価に地震動の顕著な増幅を反映した。応答スペクトルに基づく手法については、断層モデルを用いた手法による地震動評価結果を用いて応答スペクトルに与える影響を求めて反映した。

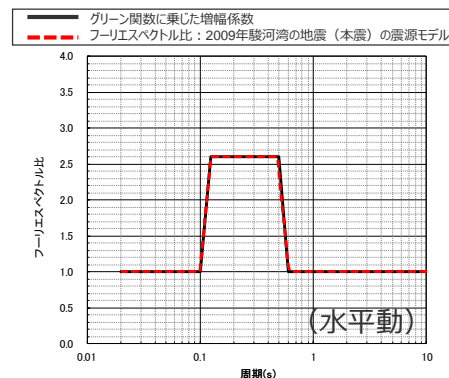
【① 地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析】

- 各地震タイプ（内陸地殻内地震、プレート間地震、海洋プレート内地震）の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価の結果について、まず、「**2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討と同じ増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の小断層のみによる地震動（波形合成結果）**」の影響を確認する。また、「増幅方向」に背景領域が位置するプレート間地震及び海洋プレート内地震の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）について、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層のグリーン関数にも増幅係数を乗じた場合の影響を確認する。
- その上で、上記の「2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討と同じ増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の小断層のみによる地震動（波形合成結果）」について、フーリエスペクトル比（地震動の顕著な増幅を考慮する場合／地震動の顕著な増幅を考慮しない場合）を算出し、**2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討で確認した地震動の顕著な増幅と同じ特性が反映されていることを確認する。**また、第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いについても分析する。

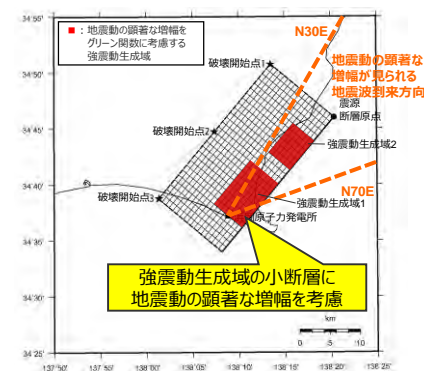


(震源モデル)

<2009年駿河湾の地震（本震）の震源モデルとフーリエスペクトル比>



(フーリエスペクトル比)



<検討用地震の震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）の例（海洋プレート内地震の基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮））>

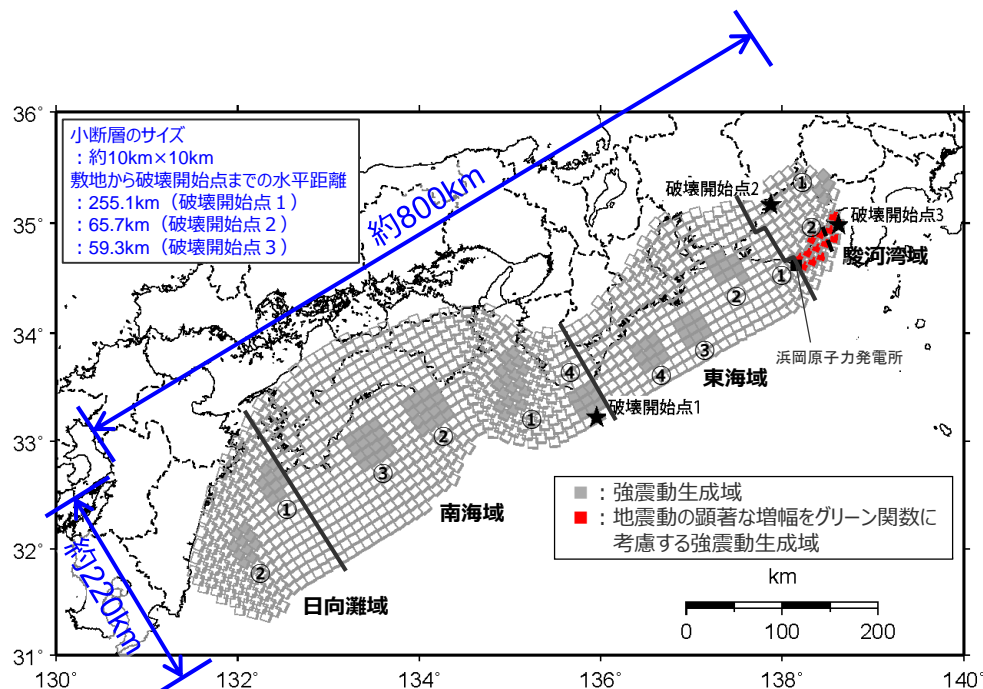
①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))

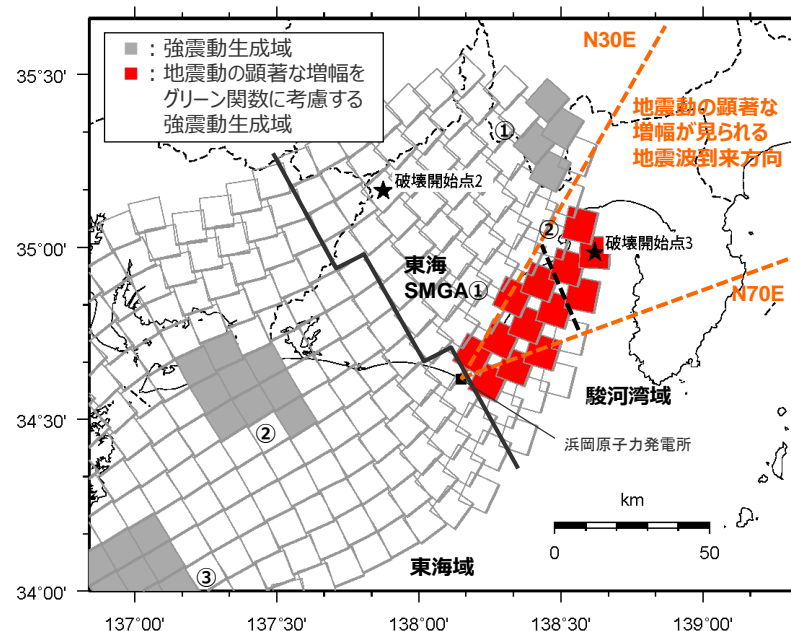
【プレート間地震の検討用地震 (地震動の顕著な増幅を考慮) の地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析】

○プレート間地震では、不確かさの組合せを考慮するベースモデルである強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) として、敷地近傍を含めて地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向 (N30E~N70E) に強震動生成域が位置するよう震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を新たに設定したうえで、地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向 (N30E~N70E) にある強震動生成域の小断層のグリーン関数に、2009年駿河湾の地震 (本震) の観測記録の再現検討で検証した増幅係数を乗じることで地震動の顕著な増幅を考慮する断層モデルを用いた手法による地震動評価を実施している。

⇒プレート間地震について、強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を代表として、増幅係数を乗じる強震動生成域の小断層のみによる地震動 (波形合成結果) を求め、地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析を行う。



(全体)



(敷地周辺)

<プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) >

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))

<プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の震源断層パラメータ>

	全体				背景領域				
	面積(km ²)	110150			セグメント名	日向灘域	南海域	東海域	駿河湾域
	平均応力降下量(MPa)	2.3			面積(km ²)	17017	47673	25760	7009
	平均すべり量(m)	7.6			応力パラメータ(MPa)	3.7	3.7	3.7	3.7
	地震モーメント(Nm)	3.4E+22			平均すべり量(m)	4.9	8.1	5.9	3.1
	Mw	9.0			地震モーメント(Nm)	3.4E+21	1.6E+22	6.2E+21	8.9E+20
	短周期レベル(Nm/s ²)	5.09E+20			Mw	8.3	8.7	8.5	7.9
各セグメント	セグメント名	日向灘域	南海域	東海域	駿河湾域	破壊伝播速度(km/s)			
	面積(km ²)	19053	53790	29419	7888	2.7			
	地震モーメント(Nm)	4.3E+21	2.0E+22	8.3E+21	1.1E+21	fmax(Hz)			
	Mw	8.4	8.8	8.5	8.0	4.1E+10			
	剛性率(Nm ²)								
強震動生成域 SMGA①	面積(km ²)	1014	1958	913	448	○震源断層パラメータの設定は内閣府(2012)による。設定方法は以下のとおり。			
	応力パラメータ(MPa)	34.6	46.4	45.4	33.9	<各セグメントの地震モーメントM ₀ >			
	平均すべり量(m)	11.0	20.5	13.7	7.2	: M ₀ =16/(7π ^{3/2})・Δσ・S ^{3/2}			
	地震モーメント(Nm)	4.6E+20	1.6E+21	5.1E+20	1.3E+20	(Δσ : 平均応力降下量(4MPa), S : 震源断層面積)			
	Mw	7.7	8.1	7.7	7.3	<平均変位量D>			
強震動生成域 SMGA②	面積(km ²)	1023	1616	915	431	: M ₀ =μDS			
	応力パラメータ(MPa)	34.6	46.4	45.4	33.9	(μ : 剛性率(pVs ²), ρ : 密度(2.8g/cm ³), Vs (β) : S波速度(3.82km/s)			
	平均すべり量(m)	11.1	18.7	13.7	7.0	(内閣府(2012)による))			
	地震モーメント(Nm)	4.7E+20	1.2E+21	5.2E+20	1.2E+20	<強震動生成域の面積Saと個数>			
	Mw	7.7	8.0	7.7	7.3	: 強震動生成域は各セグメントの震源断層面積の10%程度とし、セグメント内の地形的な構造単位に2個配置する。			
強震動生成域 SMGA③	面積(km ²)		1612	913		<強震動生成域全体の地震モーメントM _{0a} >			
	応力パラメータ(MPa)		46.4	45.4		: M _{0a} =μDaSa			
	平均すべり量(m)		18.6	13.7		(Da = 2D)			
	地震モーメント(Nm)		1.2E+21	5.1E+20		<各強震動生成域の地震モーメントM _{0ai} , 変位量Dai, 応力降下量Δσai>			
	Mw		8.0	7.7		: M _{0ai} =M _{0a} ・Sai ^{3/2} / (ΣSai ^{3/2}) (i : i番目の強震動生成域を表す)			
強震動生成域 SMGA④	面積(km ²)		932	918		: Δσai=(7π ^{3/2})/16・M _{0ai} /Sai ^{3/2}			
	応力パラメータ(MPa)		46.4	45.4		: Dai=M _{0ai} /(μSai)			
	平均すべり量(m)		14.2	13.8		<破壊伝播速度>			
	地震モーメント(Nm)		5.4E+20	5.2E+20		: Vr=0.72Vs			
	Mw		7.8	7.7					

・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 (A=4πr_aΔσ_aβ²) に基づく。

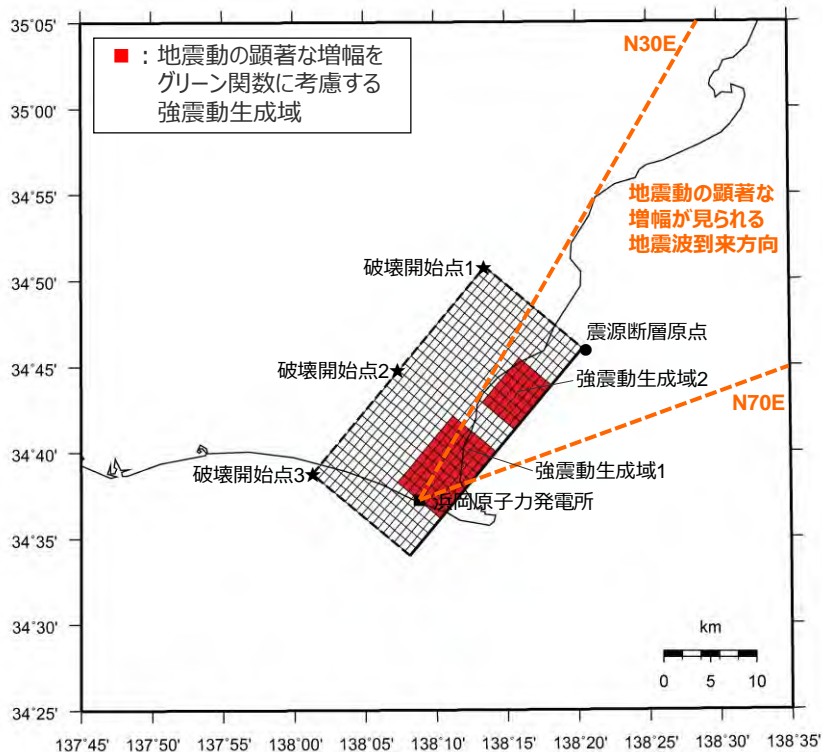
①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))

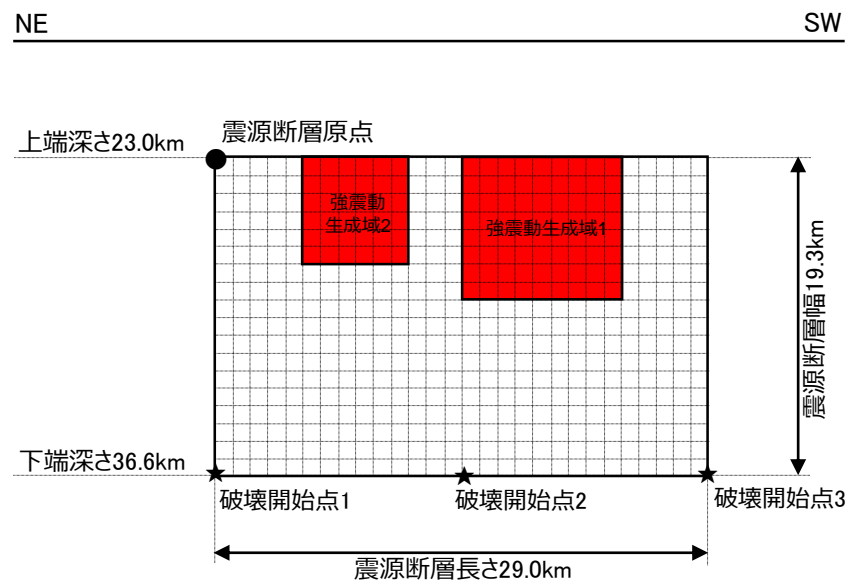
【海洋プレート内地震の検討用地震 (地震動の顕著な増幅を考慮) の地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析】

○ 海洋プレート内地震の検討用地震 (地震動の顕著な増幅を考慮) の地震動評価では、震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮しない) の震源断層を移動させて、敷地近傍を含めて地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向 (N30E~N70E) に強震動生成域が位置するよう震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を新たに設定したうえで、地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向 (N30E~N70E) にある強震動生成域の小断層のグリーン関数に2009年駿河湾の地震 (本震) の観測記録の再現検討で検証した増幅係数を考慮して断層モデルを用いた手法による地震動評価を実施。

⇒ 海洋プレート内地震について、基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を代表として、増幅係数を乗じる強震動生成域の小断層のみによる地震動 (波形合成結果) を求め、地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析を行う。



(地表面投影図)



(展開図)

<海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震) >

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))

<海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震) の震源断層パラメータ>

震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.766785度 東経138.339557度	強震動生成域	地震モーメント	2009年駿河湾の地震の M_0 - M_{0SMGA} 関係及びスケーリング則による	1.06E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	2009年駿河湾の地震の M_0 - S_{SMGA} 関係及びスケーリング則による	114.3 km ²
傾斜角	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	45 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = M_{0SMGA} / (\mu S_{SMGA})$	2.05 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi r_{SMGA} \beta^2)$, $r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	30.71 MPa
震源断層長さ	$L = (S/6)^{0.5} \times 3$	29.0 km	強震動生成域1	面積	$S_{SMGA1} = S_{SMGA} \times (2/3)$	76.2 km ²
震源断層幅	$W = (S/6)^{0.5} \times 2$	19.3 km		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA1}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	7.85E+18 Nm
震源断層面積	$S = M_0 / (\mu D)$	559.8 km ²		平均すべり量	$D_{SMGA1} = M_{0SMGA1} / (\mu \cdot S_{SMGA1})$	2.27 m
震源断層上端深さ	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	23 km	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA1} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa	
地震モーメント	2009年駿河湾の地震(鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{18}$ Nm)の32 ^{0.5} 倍	2.60E+19 Nm	強震動生成域2	面積	$S_{SMGA2} = S_{SMGA} \times (1/3)$	38.1 km ²
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	6.9		地震モーメント	$M_{0SMGA2} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA2}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	2.78E+18 Nm
気象庁マグニチュード	M_j : フィリピン海プレート(領域1)におけるスラブ内地震の最大規模等を踏まえ設定	7.0		平均すべり量	$D_{SMGA2} = M_{0SMGA2} / (\mu \cdot S_{SMGA2})$	1.61 m
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99 km/s, ρ : 2.85 g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA2} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa
平均すべり量	$D = D_{SMGA} / \gamma_D$, $\gamma_D = 2.0$	1.02 m	背景領域	地震モーメント	$M_{0back} = M_0 \cdot M_{0SMGA}$	1.54E+19 Nm
平均応力降下量	$\Delta\sigma = (7/16) \cdot M_0 / (S/m)^{1.5}$	4.79 MPa		面積	$S_{back} = S - S_{SMGA}$	445.5 km ²
破壊伝播速度	V_r : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	0.76 m
短周期レベル	2009年駿河湾の地震の M_0 - A 関係及びスケーリング則による	3.71E+19 Nm/s ²		実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA}$ $W_{SMGA} = (\pi)^{0.5} r_{SMGA} \Sigma \gamma_i^3$, $W_{back} = W$, $\gamma_i = r_{SMGA} / r_{SMGA}$, $r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	4.66 MPa
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz	・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$) に基づく。			

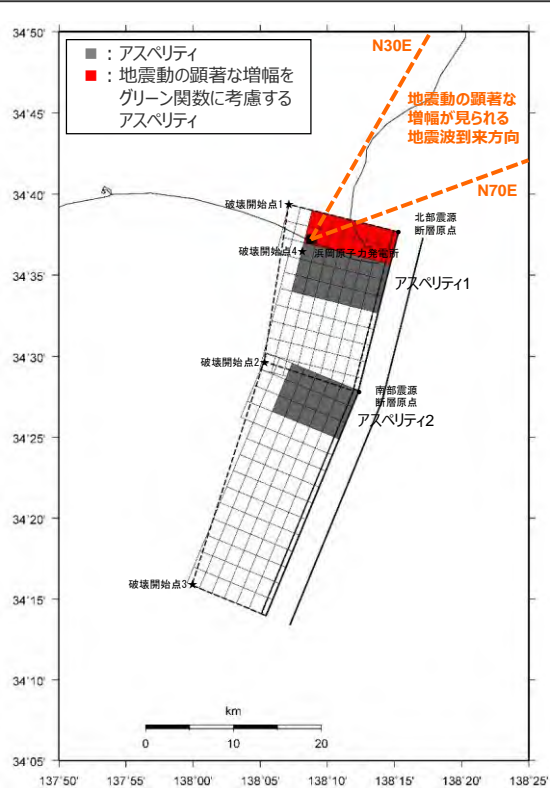
①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))

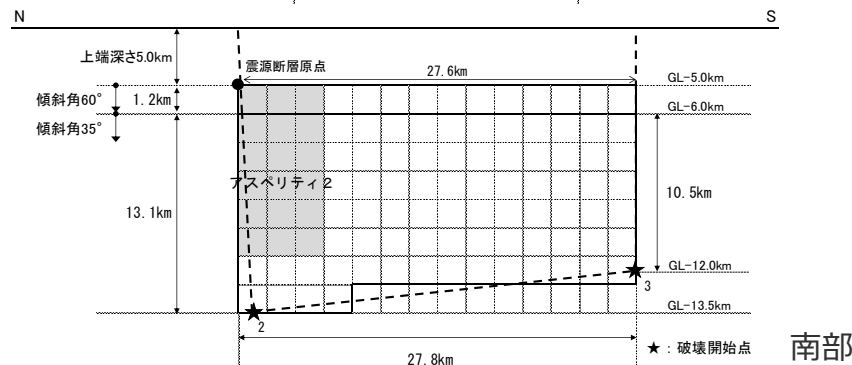
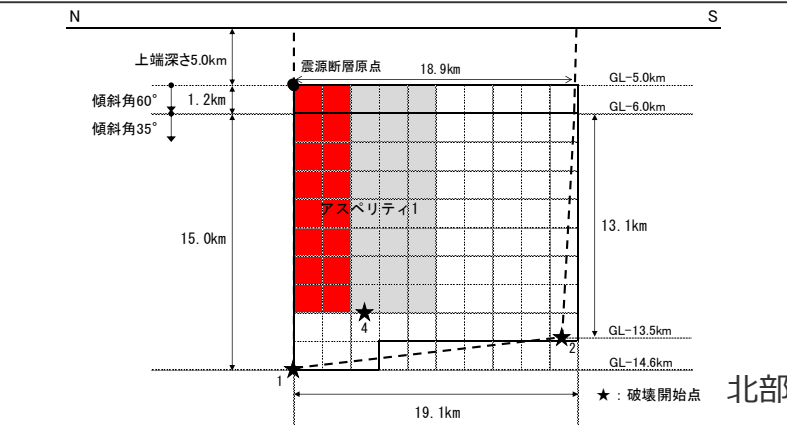
【内陸地殻内地震の検討用地震 (地震動の顕著な増幅を考慮) の地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析】

○内陸地殻内地震の検討用地震 (地震動の顕著な増幅を考慮) の地震動評価では、震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) は、震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮しない) において敷地近傍のアスぺリティが地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向 (N30E~N70E) に位置しているため、これと同じとし、地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向 (N30E~N70E) にあるアスぺリティの一部の小断層のグリーン関数に2009年駿河湾の地震 (本震) の観測記録の再現検討で検証した増幅係数を考慮して断層モデルを用いた手法による地震動評価を実施。

⇒内陸地殻内地震について、基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を代表として、増幅係数を乗じるアスぺリティの小断層のみによる地震動 (波形合成結果) を求め、地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析を行う。



(地表面投影図)



(展開図)

<内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (御前崎海脚西部の断層帯による地震) >

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))

<内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (御前崎海脚西部の断層帯による地震) の震源断層パラメータ>

震源断層パラメータ		設定方法	単位	設定値
震源断層原点 (北端)	北部	北緯(世界測地系)	-	34.62800°
		東経(世界測地系)	-	138.25486°
	南部	北緯(世界測地系)	-	34.46467°
		東経(世界測地系)	-	138.20581°
走向	北部	地質調査結果による	-	194.1°NE
	南部	同上	-	202.4°NE
断層傾斜角	GL-6km以浅	同上	°	60
	GL-6km以深	同上	°	35
ずれの種類	同上	-	-	逆断層
震源断層上端深さ	地震発生層の検討結果による	km		5.0
震源断層下端深さ	北部	同上	km	13.5~14.6
	南部	同上	km	12.0~13.5
活断層長さ	北部	$L_{0,1}$:地質調査結果による	km	19.1
	南部	$L_{0,2}$:同上	km	27.8
震源断層長さ	北部	$L_{s,1}$:地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層上端深さとの関係による	km	18.9
	南部	$L_{s,2}$:同上	km	27.6
震源断層幅	北部(GL-6km以浅)	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層上端深さとの関係による	km	1.2
	北部(GL-6km以深)	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層下端深さとの関係による	km	13.1~15.0
	南部(GL-6km以浅)	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層上端深さとの関係による	km	1.2
	南部(GL-6km以深)	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層下端深さとの関係による	km	10.5~13.1
震源断層面積	北部	S_1 :震源断層長さ及び震源断層幅による	km ²	281.51
	南部	S_2 :同上	km ²	353.63
震源断層面積	$S=S_1+S_2$	km ²		635.14
等価半径	$R=(S/\pi)^{0.5}$	km		14.22
地震モーメント	$M_0=\{S/(4.24\times 10^{-11})\}^{2.0}/10^7$ (入倉・三宅(2001))	Nm		2.24E+19

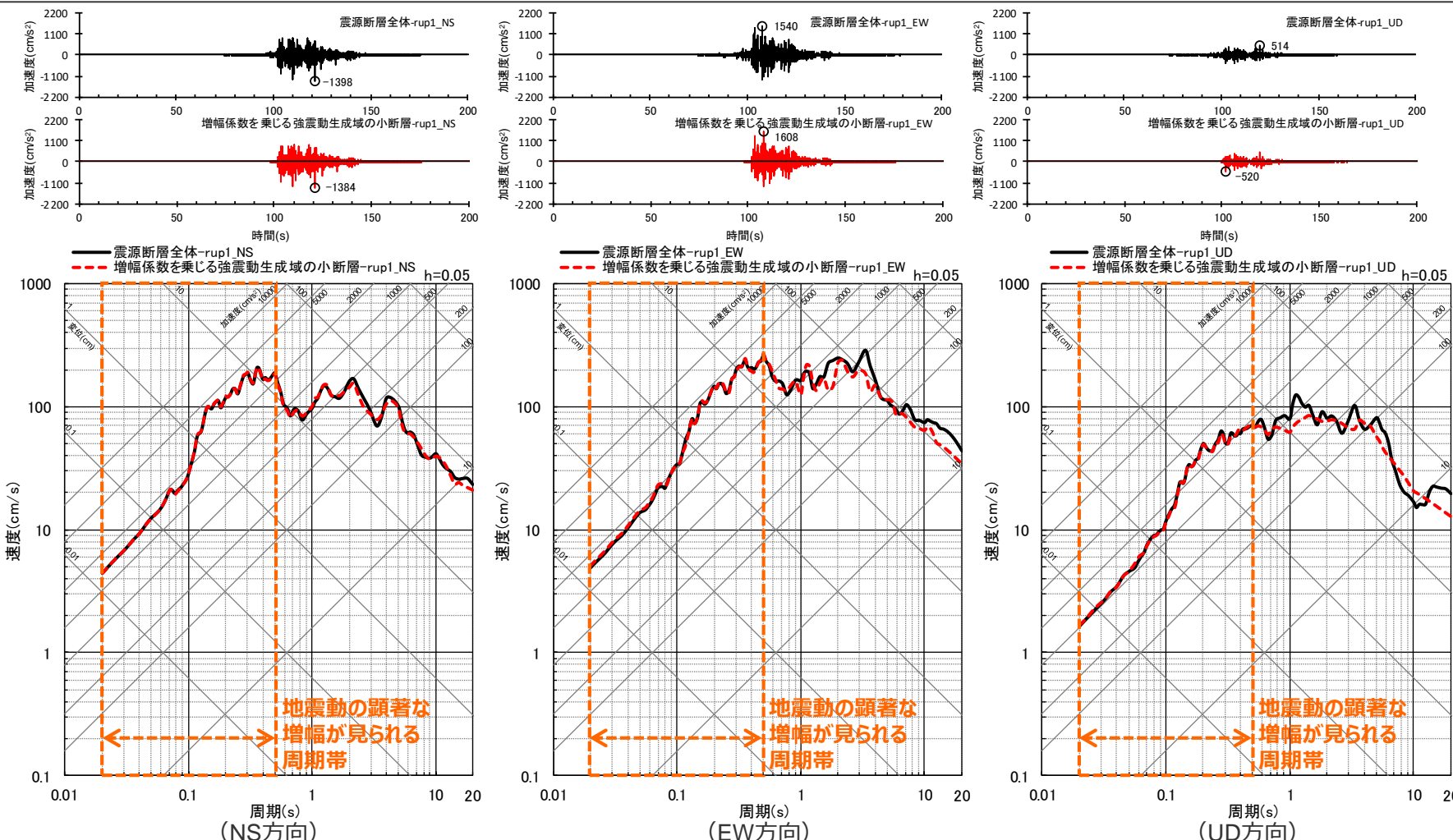
震源断層パラメータ		設定方法	単位	設定値
気象庁マグニチュード		$M_J=(\log(L_{0,1}+L_{0,2})+2.9)/0.6$ (松田(1975))	-	7.6
		$M_J=(\log M_0-10.72)/1.17$ (武村(1990))	-	7.4
モーメントマグニチュード		$M_w=(\log M_0-9.1)/1.5$ (Kanamori(1977))	-	6.8
剛性率		$\mu=\rho\beta^2\beta$: 3.54km/s, ρ : 2.76g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる)	N/m ²	3.46E+10
平均すべり量		$D=M_J/(\mu S)$	m	1.02
平均応力降下量		$\Delta\sigma=(7/16)(M_J/R^3)$	MPa	3.42
短周期レベル		$A=2.46\times 10^{10}(M_0\times 10^{17})^{1/3}$ (壇・他(2001))	Nm/s ²	1.49E+19
破壊伝播速度		$Vr=0.72\beta$ (Geller(1976))	km/s	2.55
f_{max}		中央防災会議(2004)による	Hz	6.0
アスベリティ全体	等価半径	$r_a=(7\pi M_0\beta^2)/(4AR)$	km	7.27
	面積	$S_a=\pi r_a^2$	km ²	166.20
	平均すべり量	$D_a=2D$	m	2.043
	地震モーメント	$M_{0a}=\mu S_a D_a$	Nm	1.17E+19
	応力降下量	$\Delta\sigma_a=(7/16)M_J/(r_a^2 R)$	MPa	13.05
アスベリティ1	面積	$S_{a1}=(2/3)\times S_a$	km ²	110.80
	地震モーメント	$M_{0a1}=M_{0a}\times S_{a1}^{1.5}/(S_{a1}^{1.5}+S_{a2}^{1.5})$	Nm	8.68E+18
	平均すべり量	$D_{a1}=M_{0a1}/(\mu S_{a1})$	m	2.264
	応力降下量	$\Delta\sigma_{a1}=\Delta\sigma_a$	MPa	13.05
アスベリティ2	面積	$S_{a2}=(1/3)\times S_a$	km ²	55.40
	地震モーメント	$M_{0a2}=M_{0a}\times S_{a2}^{1.5}/(S_{a1}^{1.5}+S_{a2}^{1.5})$	Nm	3.07E+18
	平均すべり量	$D_{a2}=M_{0a2}/(\mu S_{a2})$	m	1.601
	応力降下量	$\Delta\sigma_{a2}=\Delta\sigma_a$	MPa	13.05
背景領域	面積	$S_b=S-S_a$	km ²	468.94
	地震モーメント	$M_{0b}=M_0-M_{0a}$	Nm	1.07E+19
	平均すべり量	$D_b=M_{0b}/(\mu S_b)$	m	0.659
	実効応力	$\sigma_b=0.2\Delta\sigma_a$	MPa	2.61

・アスベリティの短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A=4\pi r_a \Delta\sigma_a \beta^2$) に基づく。

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域の小断層による影響 (プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

- プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、増幅係数を乗じる強震動生成域 (駿河湾SMGA②と東海SMGA①) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において、震源断層全体と同程度である。

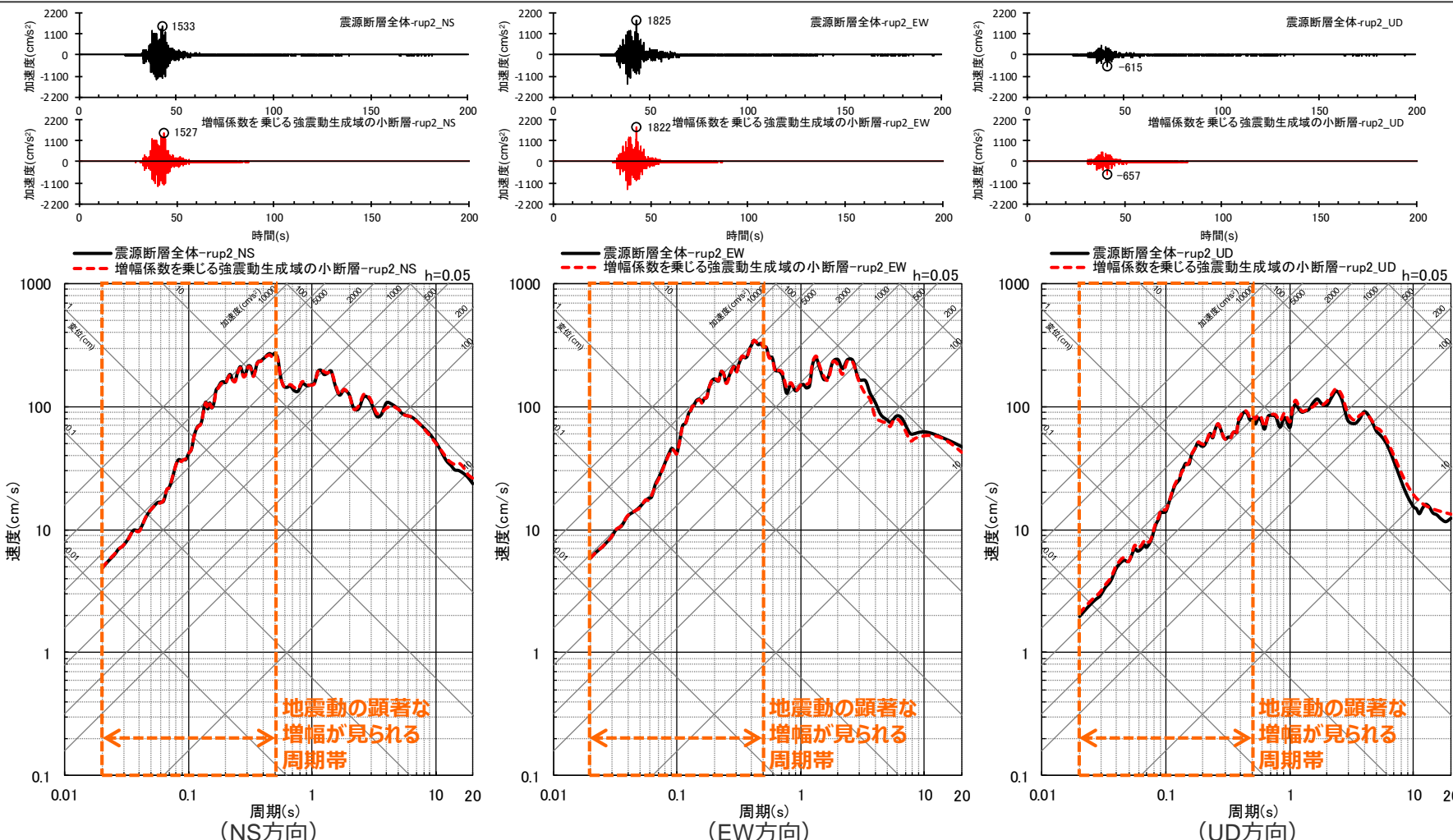


<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段: 加速度時刻歴波形, 下段: 応答スペクトル) >
(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点1))

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域の小断層による影響 (プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

- プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、増幅係数を乗じる強震動生成域 (駿河湾SMGA②と東海SMGA①) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において、震源断層全体と同程度である。

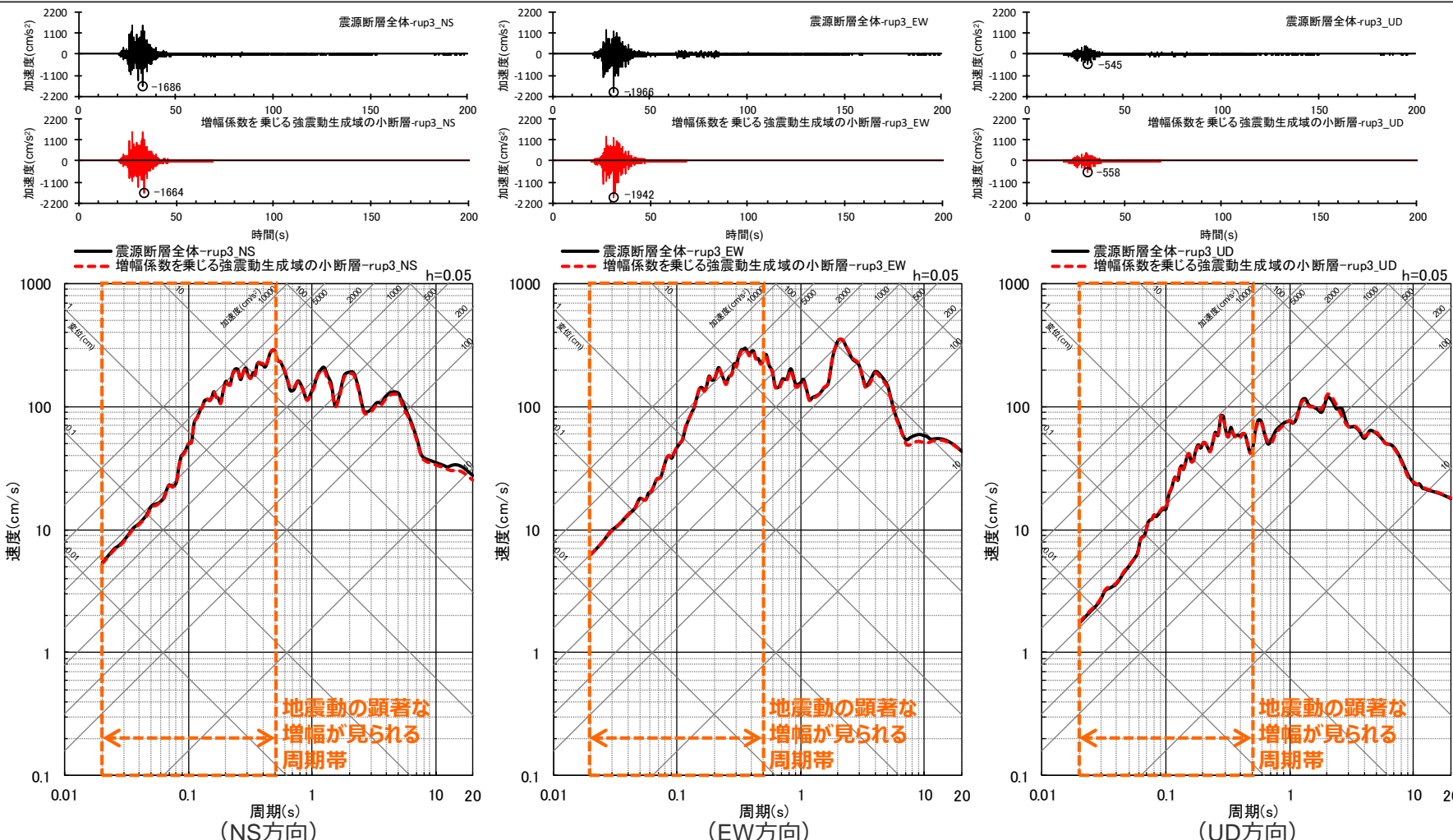


<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段: 加速度時刻歴波形, 下段: 応答スペクトル) >
(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点2))

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域の小断層による影響 (プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

- プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、増幅係数を乗じる強震動生成域 (駿河湾SMGA②と東海SMGA①) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において、震源断層全体と同程度である。



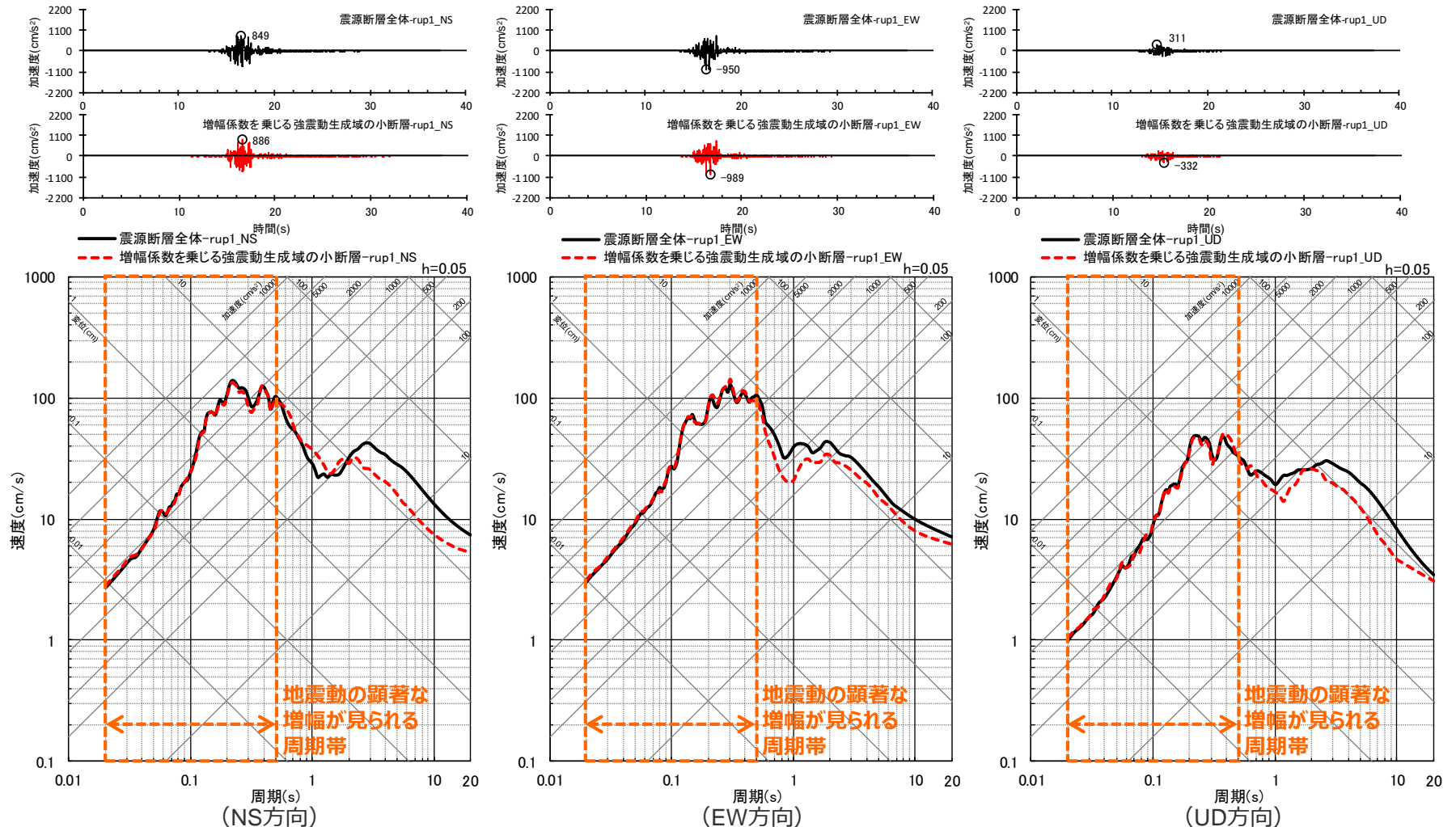
＜断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段：加速度時刻歴波形、下段：応答スペクトル) >
(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点3))

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域の小断層による影響 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○ 海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、増幅係数を乗じる強震動生成域 (SMGA1とSMGA2) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において震源断層全体と同程度である。



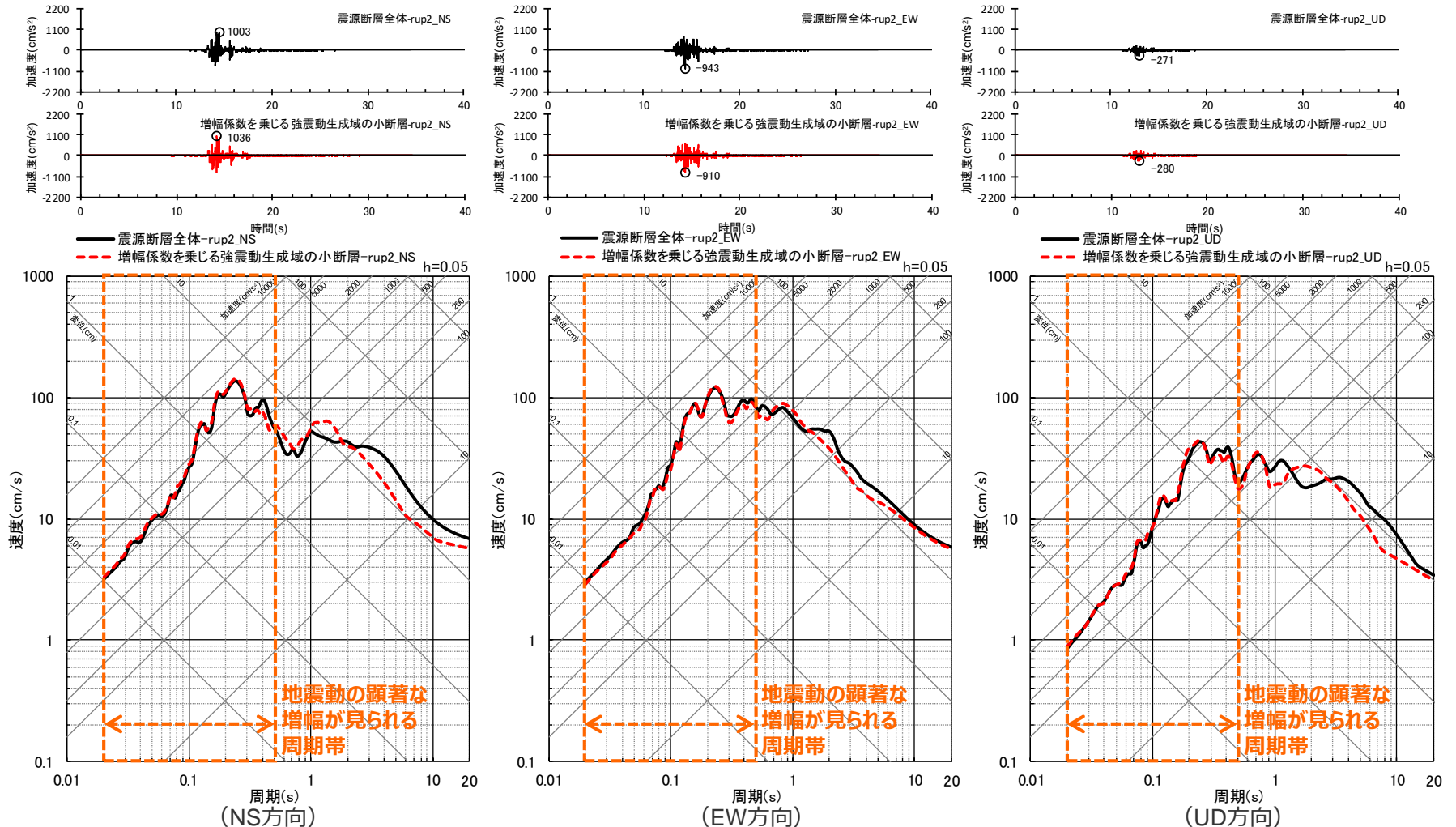
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段: 加速度時刻歴波形、下段: 応答スペクトル) >
 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点1))

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域の小断層による影響 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○ 海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、増幅係数を乗じる強震動生成域 (SMGA1とSMGA2) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において震源断層全体と同程度である。



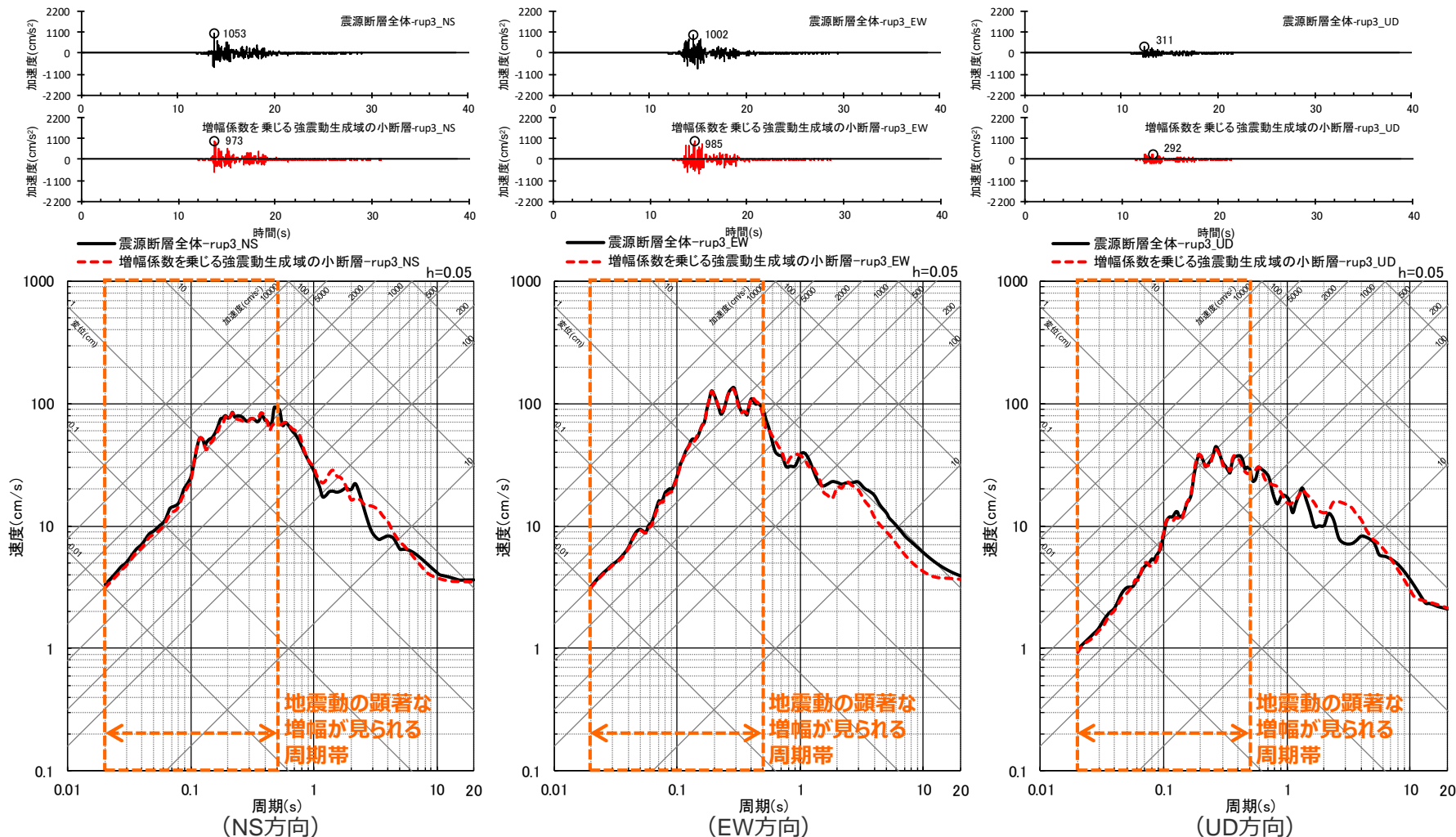
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段: 加速度時刻歴波形、下段: 応答スペクトル) >
(海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点2))

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域の小断層による影響 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、増幅係数を乗じる強震動生成域 (SMGA1とSMGA2) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において震源断層全体と同程度である。



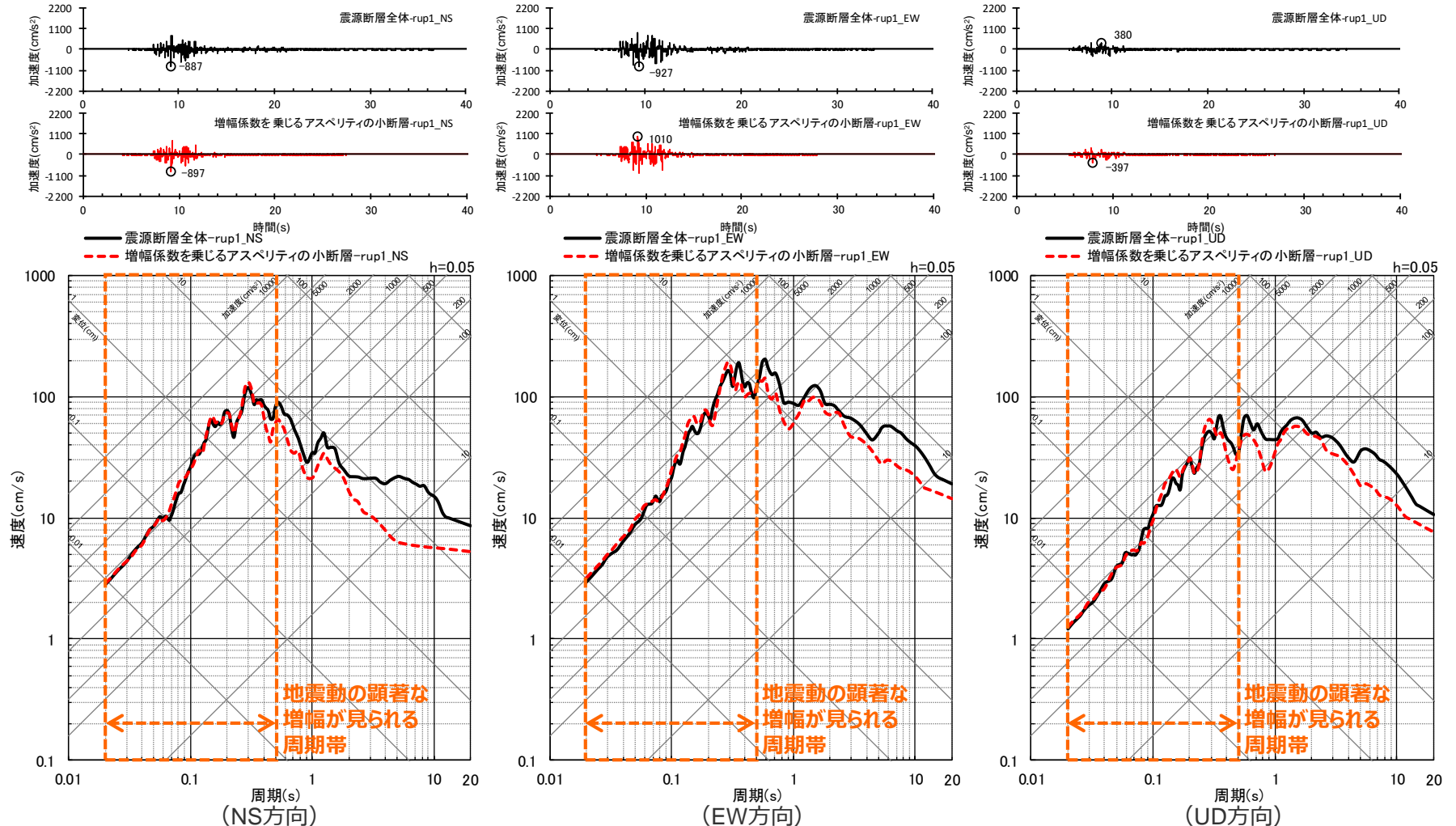
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段: 加速度時刻歴波形、下段: 応答スペクトル) >
(海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点3))

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮するアスペリティの小断層による影響 (内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○ 内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点1) について、増幅係数を乗じるアスペリティ (アスペリティ 1 の一部) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において震源断層全体と同程度である。



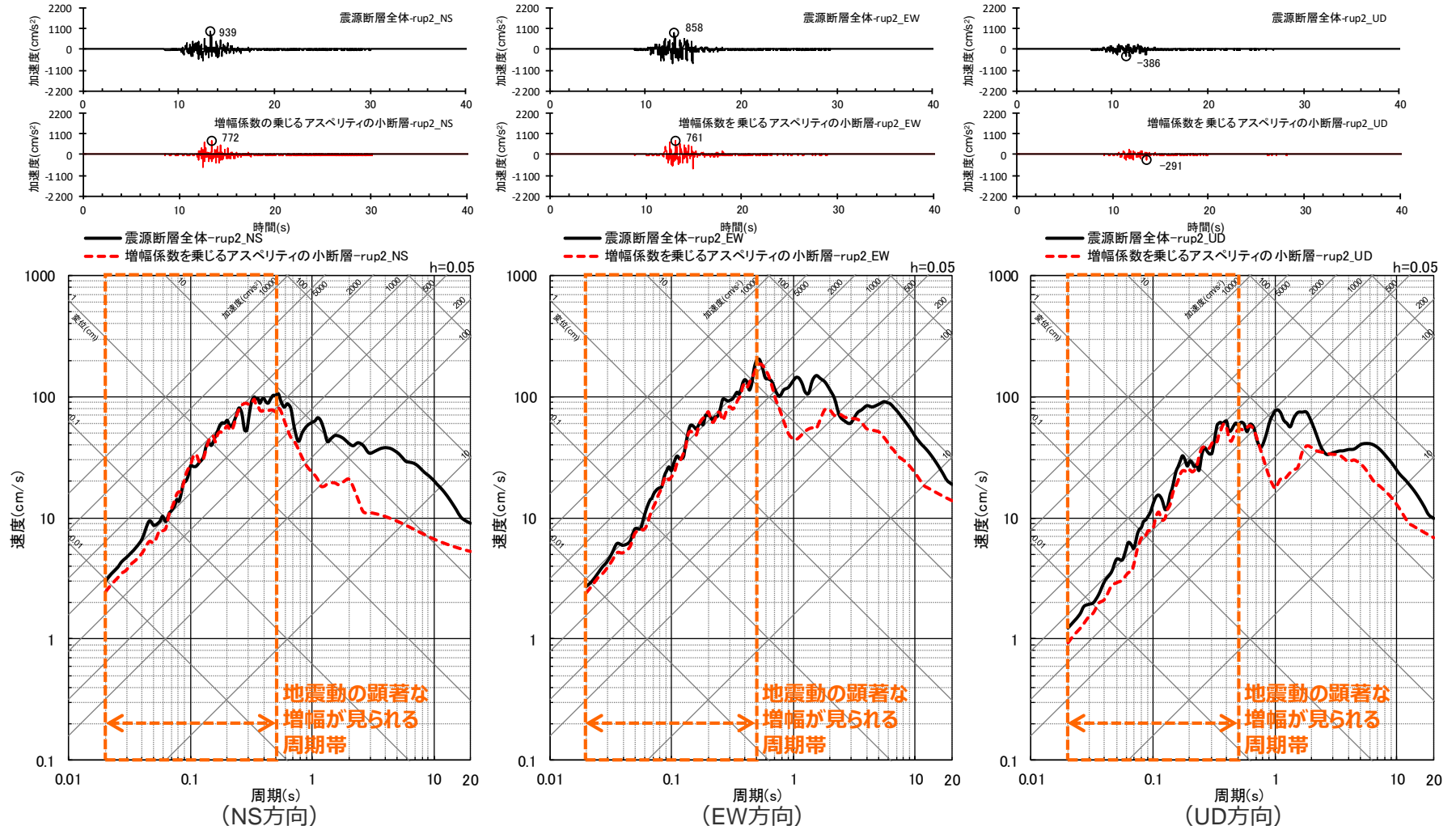
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段: 加速度時刻歴波形、下段: 応答スペクトル) >
(内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点1))

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮するアスペリティの小断層による影響 (内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点2) について、増幅係数を乗じるアスペリティ (アスペリティ 1 の一部) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において震源断層全体と比べやや小さい。



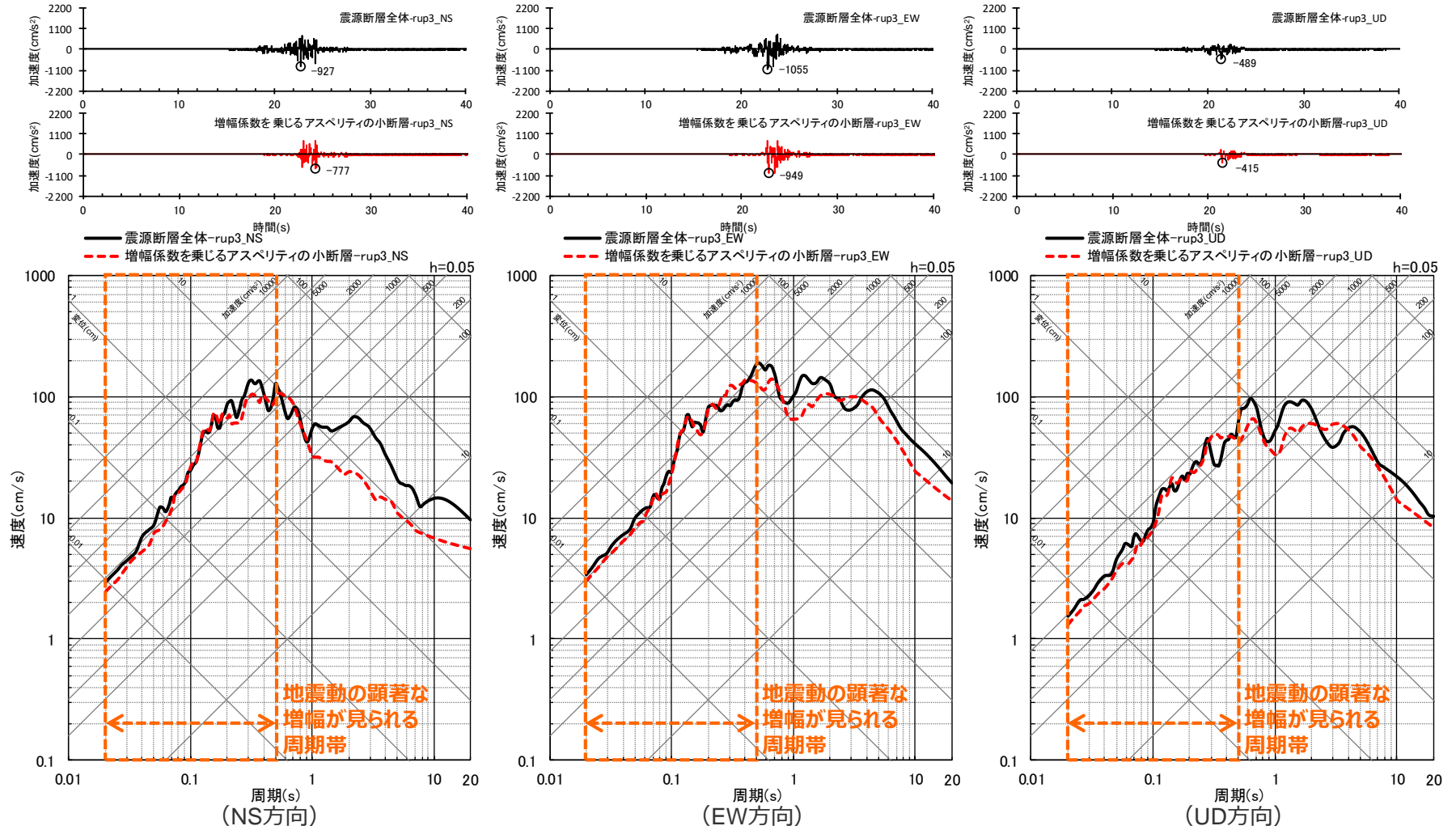
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段: 加速度時刻歴波形、下段: 応答スペクトル) >
(内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点2))

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮するアスペリティの小断層による影響 (内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○ 内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点3) について、増幅係数を乗じるアスペリティ (アスペリティ 1 の一部) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において震源断層全体と比べやや小さい。



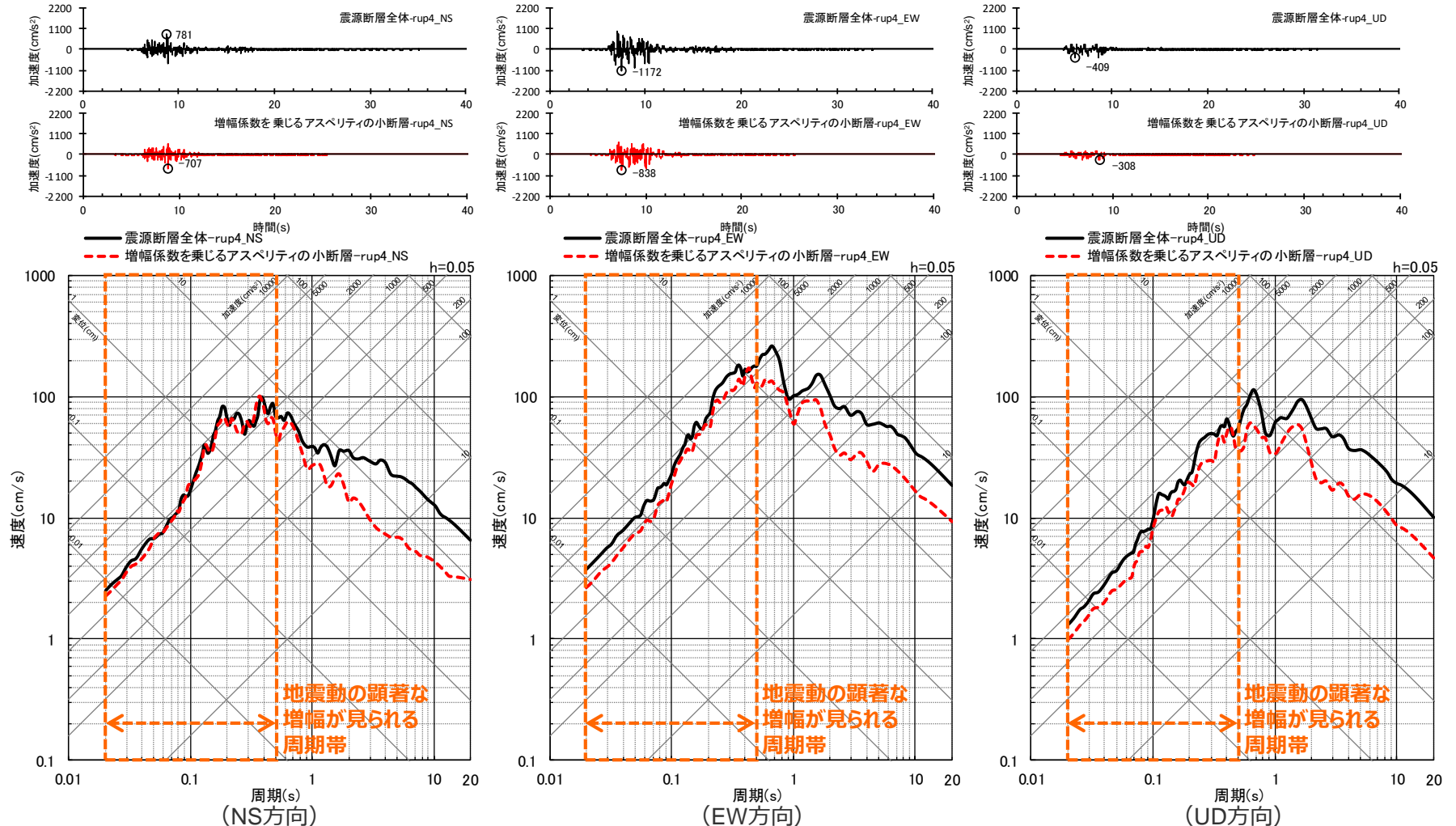
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段: 加速度時刻歴波形、下段: 応答スペクトル) >
(内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点3))

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮するアスペリティの小断層による影響 (内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点4) について、増幅係数を乗じるアスペリティ (アスペリティ1の一部) の小断層による地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒程度以下) において震源断層全体と比べやや小さい。



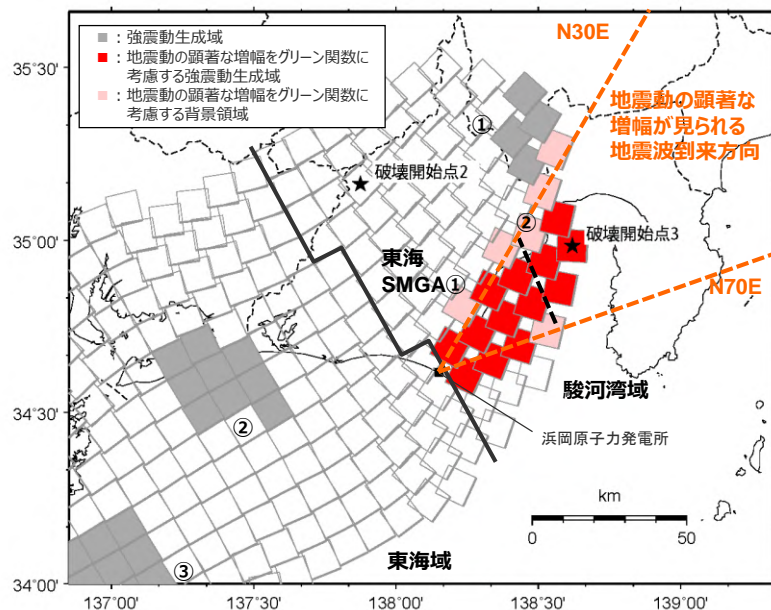
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (上段：加速度時刻歴波形、下段：応答スペクトル) >
(内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (破壊開始点4))

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

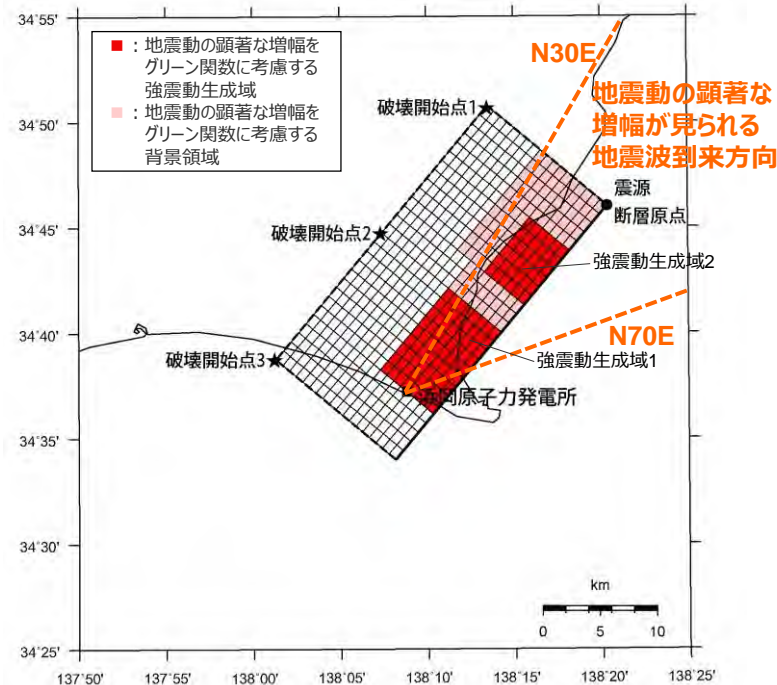
(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認 (検討概要))

【「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認】

- 特性化震源モデルを用いた地震動評価は、背景領域からの地震動の短周期への影響は強震動生成域（アスペリティ）に比べて小さいとして検討し、震源断層全体の短周期の地震動レベルを強震動生成域（アスペリティ）からの地震動のみで評価する考え方により行われていることを踏まえ、断層モデルを用いた手法による地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価では、地震動の顕著な増幅が見られた短周期の地震動に及ぼす影響が支配的な強震動生成域（アスペリティ）に着目し、短周期の地震動評価に一般的に用いられる統計的グリーン関数法において、**「増幅方向」の敷地近傍に強震動生成域（アスペリティ）を保守的に配置したうえで、「増幅方向」に位置する強震動生成域（アスペリティ）からの地震動のみに顕著な増幅を反映する方法**（強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法）を用いている。
- 増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）を保守的に「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで評価を行うため、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層は敷地から離れることとなり、その影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域（アスペリティ）による影響が支配的であると考えられるが、ここでは、「増幅方向」に背景領域の小断層が位置するプレート間地震及び海洋プレート内地震の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）を対象に、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層のグリーン関数にも増幅係数を乗じた場合の影響確認を行う。



<プレート間地震>



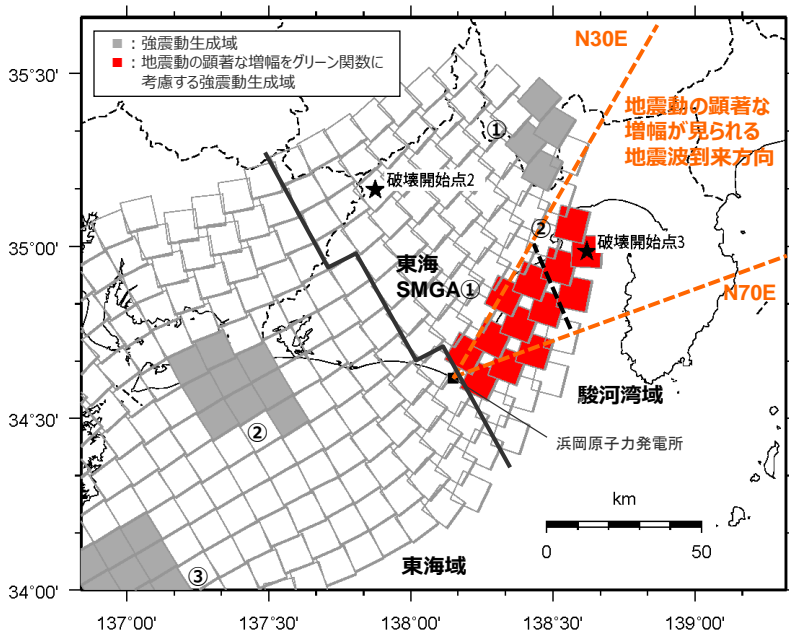
<海洋プレート内地震>

・黒字の丸数字はプレート間地震の強震動生成域のNo.を表す。
 ・-----: 東海SMGA①と駿河湾SMGA②の境界を表す。

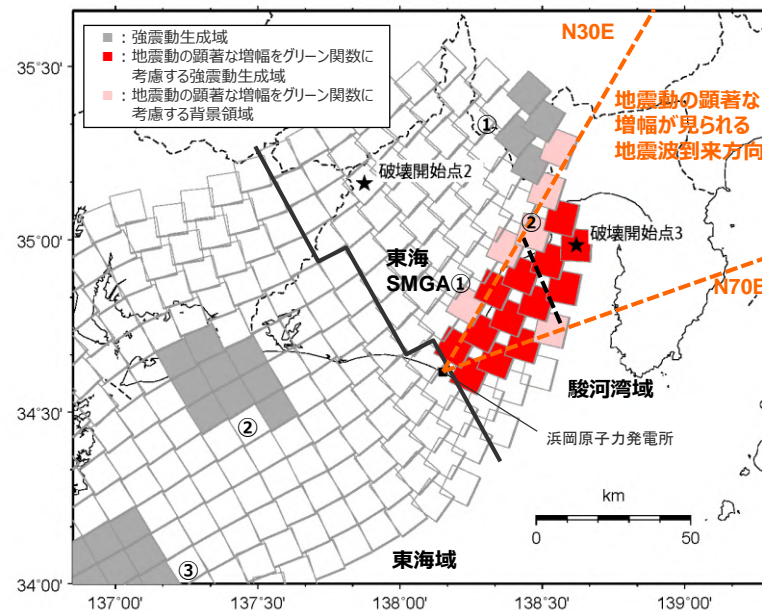
①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)))

○プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)について、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響を確認するため、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域(駿河湾SMGA②及び東海SMGA①)に加え、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の統計的グリーン法による地震動評価を行い、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合との比較を行う。



<「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合の地震動評価>



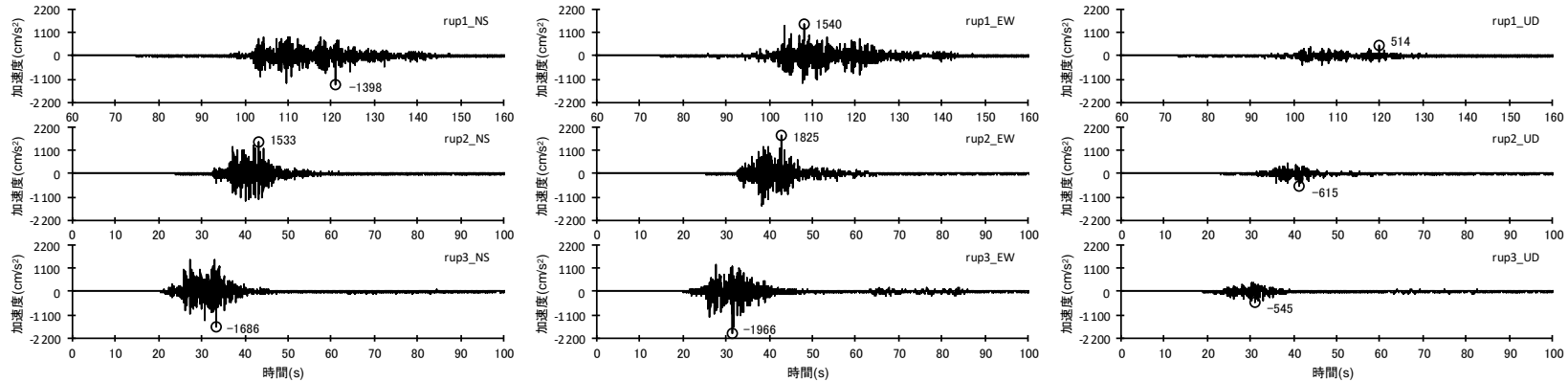
<「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動評価>

・黒字の丸数字はプレート間地震の強震動生成域のNo.を表す。
・---: 東海SMGA①と駿河湾SMGA②の境界を表す。

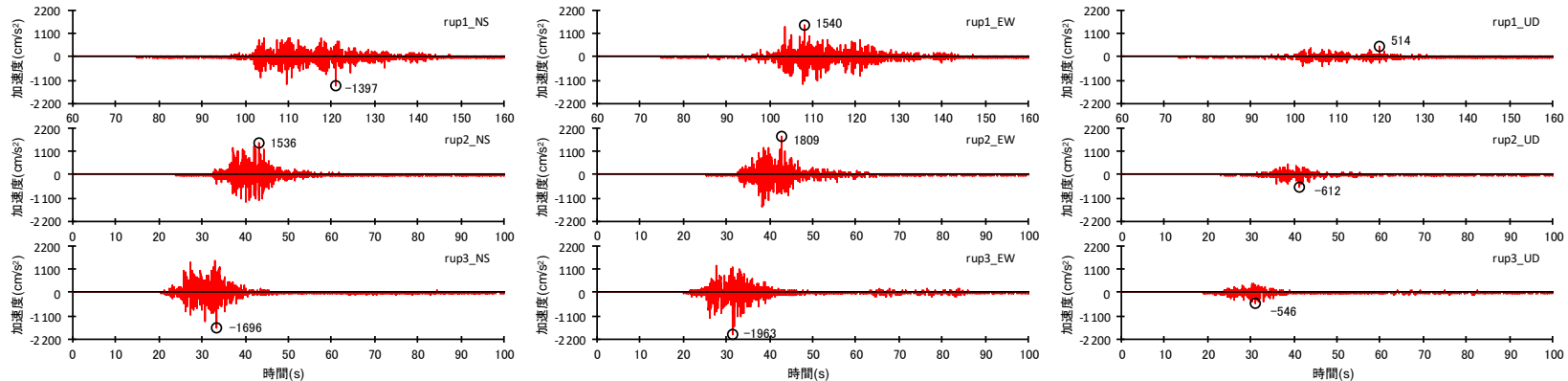
<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)))



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合の地震動評価)



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動評価)

<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較(加速度時刻歴波形)(破壊開始点1~3)>

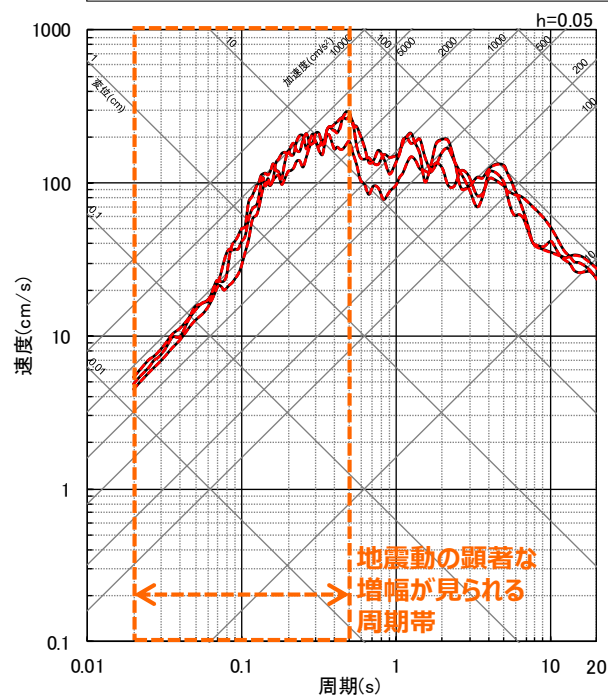
・統計的グリーン関数法による。

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

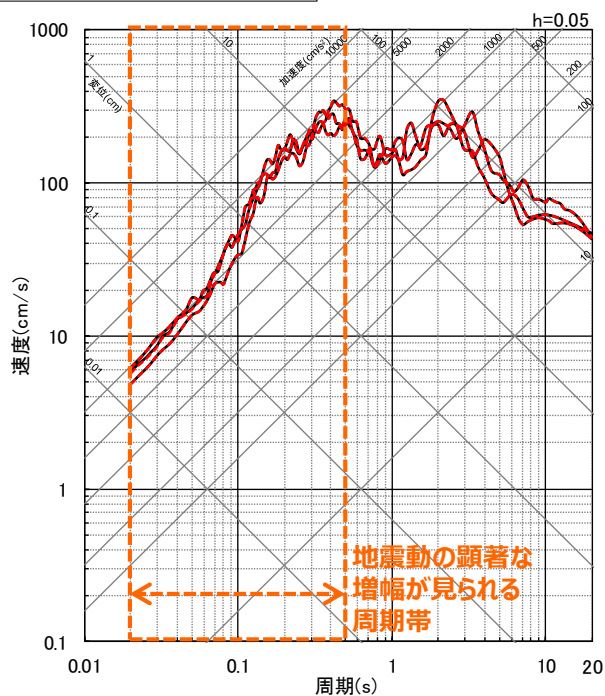
(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認 (プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域 (駿河湾SMGA①及び東海SMGA①) に加え、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と同程度であり、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域 (駿河湾SMGA①及び東海SMGA①) による影響が支配的であることを確認した。

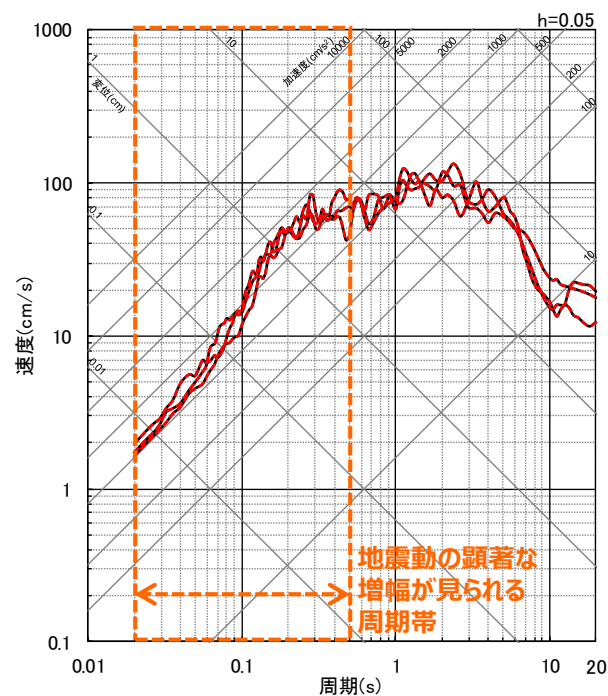
— 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合の地震動評価
- - - 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動評価



(NS方向)



(EW方向)



(UD方向)

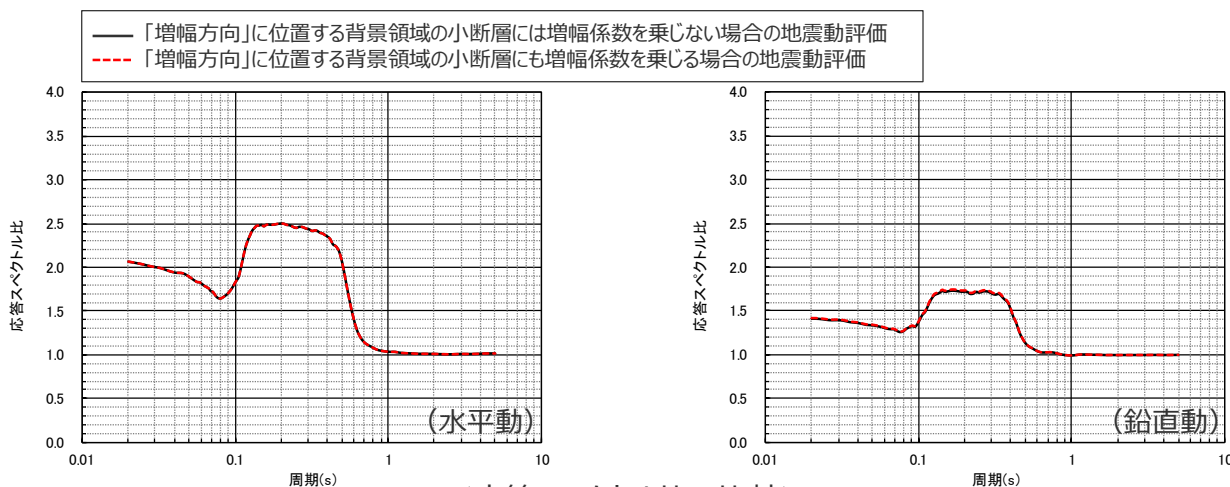
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (応答スペクトル) (破壊開始点1~3) >

・統計的グリーン関数法による。

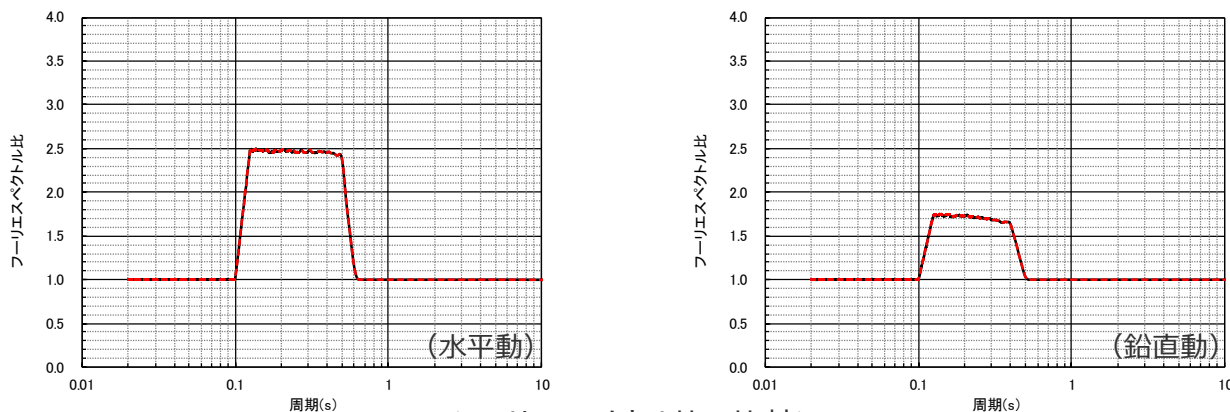
①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認 (プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○ 前述のとおり、プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域 (駿河湾SMGA①及び東海SMGA①) に加え、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と同程度であり、その結果に基づく応答スペクトル比も同程度となっている。また、フーリエスペクトル比も同程度となっている。



<応答スペクトル比の比較>



<フーリエスペクトル比の比較>

※ 水平動はNS方向とEW方向の平均。

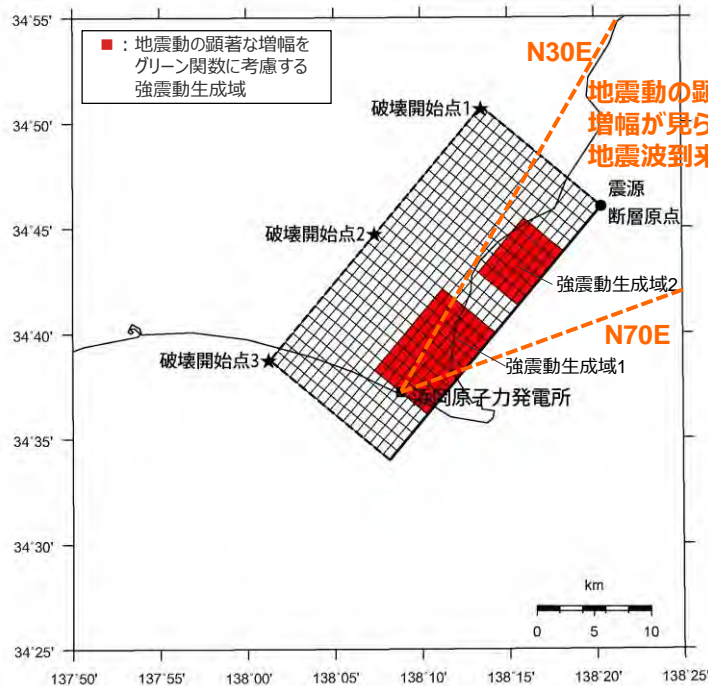
- ・ 統計的グリーン関数法による。
- ・ 破壊開始点1~3の平均。

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

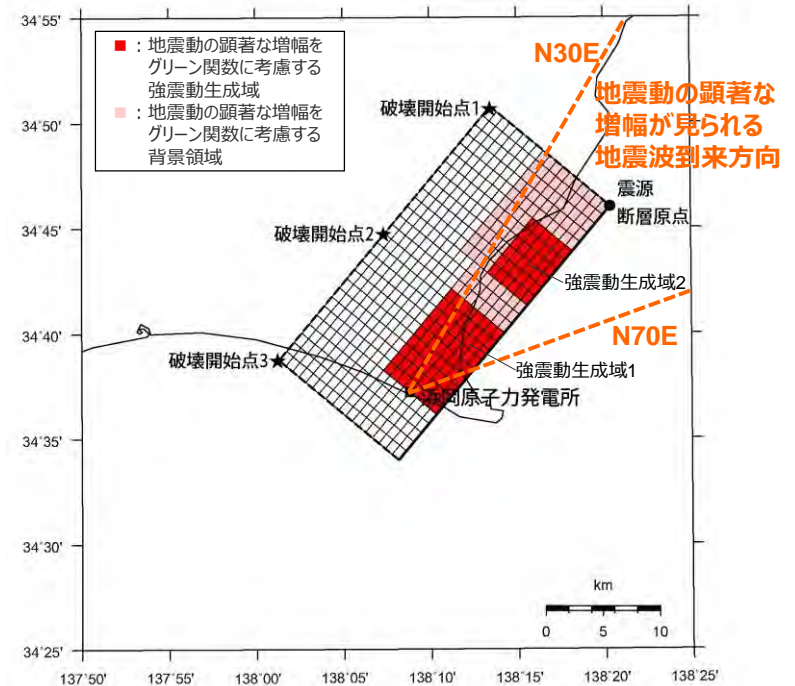
①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響を確認するため、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域に加え、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の統計的グリーン法による地震動評価を行い、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合との比較を行う。



<「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合の地震動評価>

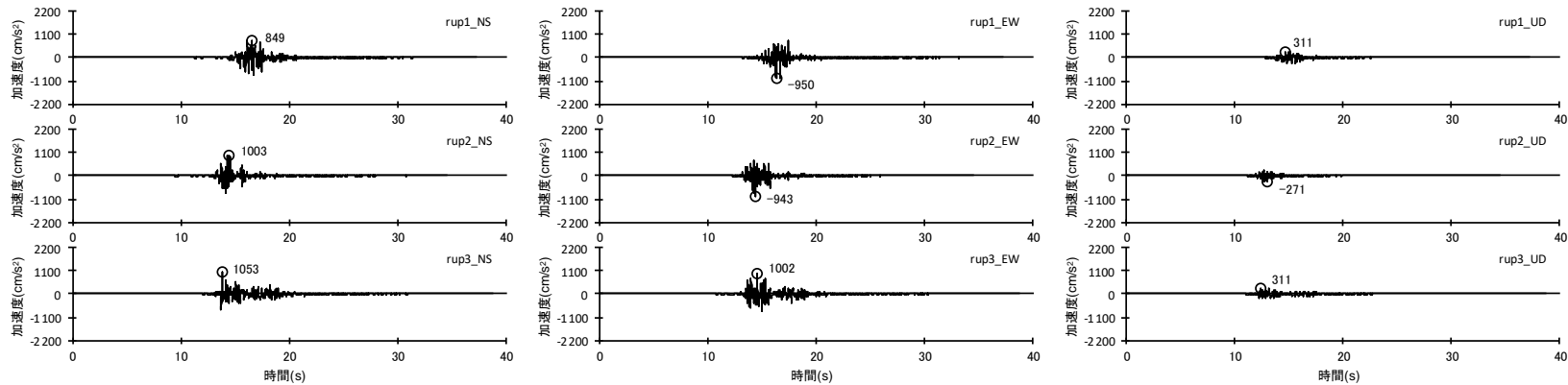


<「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動評価>

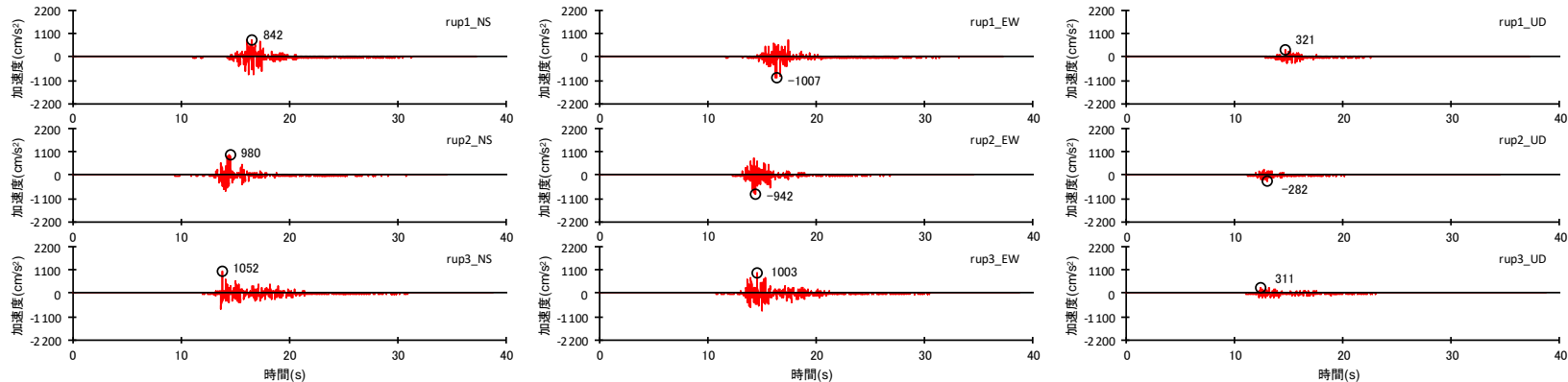
<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合の地震動評価)



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動評価)

<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (加速度時刻歴波形) (破壊開始点1~3) >

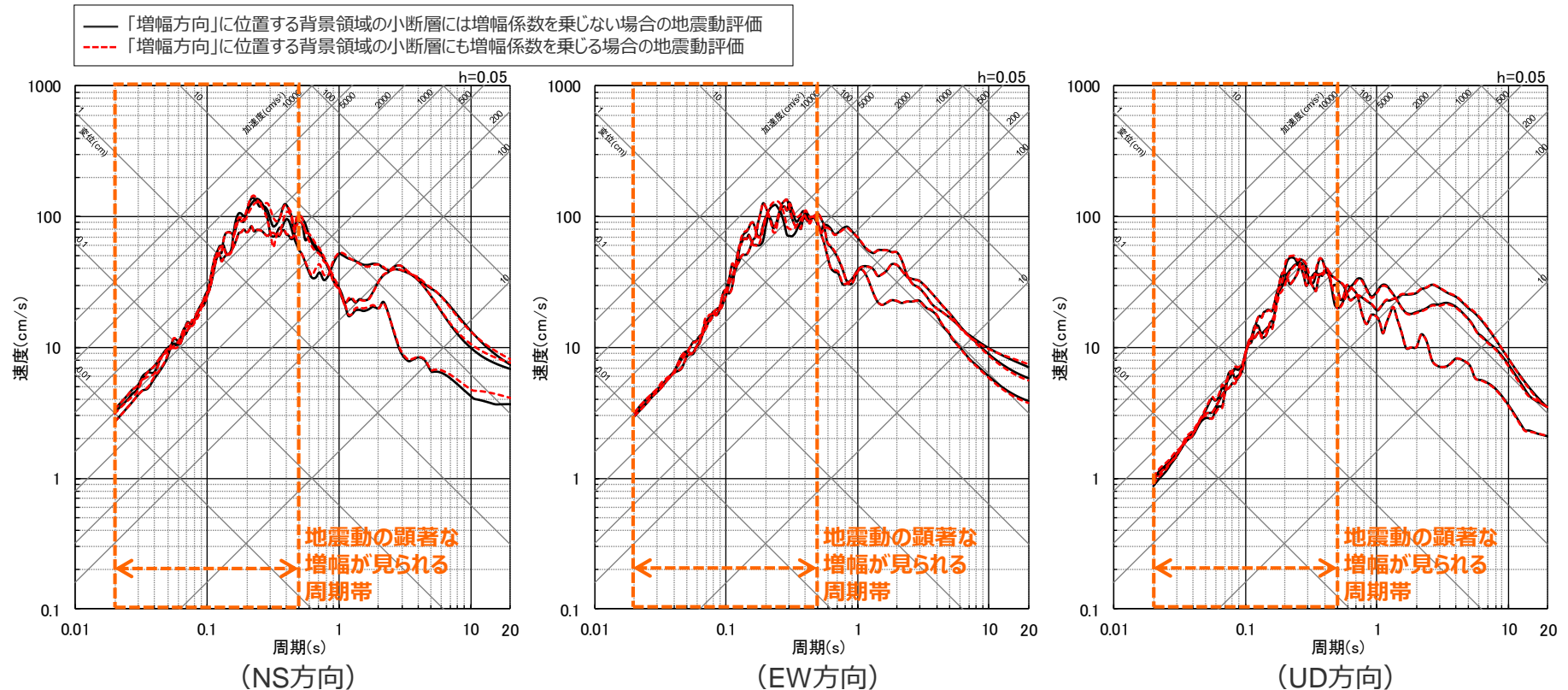
・統計的グリーン関数法による。

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

○海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域 (SMGA1及びSMGA2) に加え、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と同程度であり、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域 (SMGA1及びSMGA2) による影響が支配的であることを確認した。



<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (応答スペクトル) (破壊開始点1~3) >

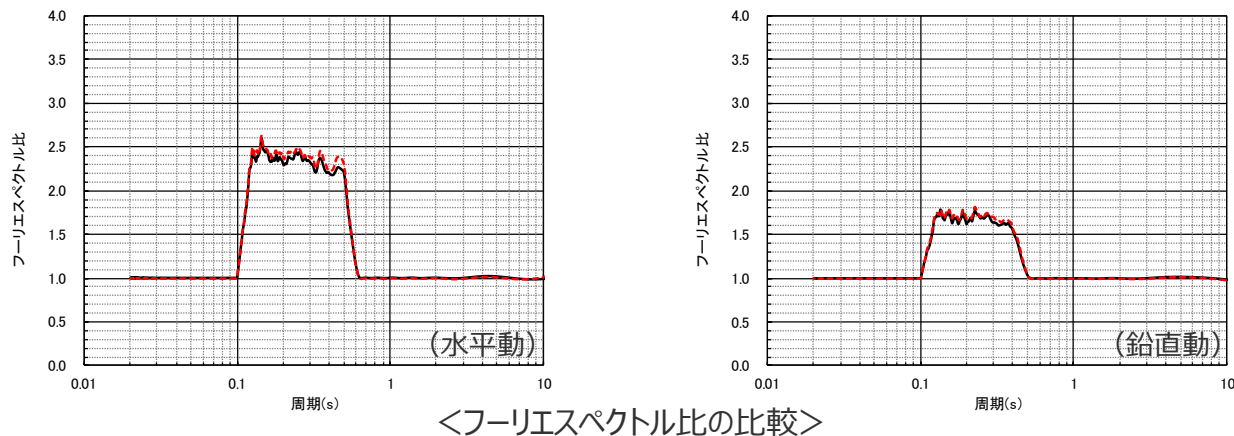
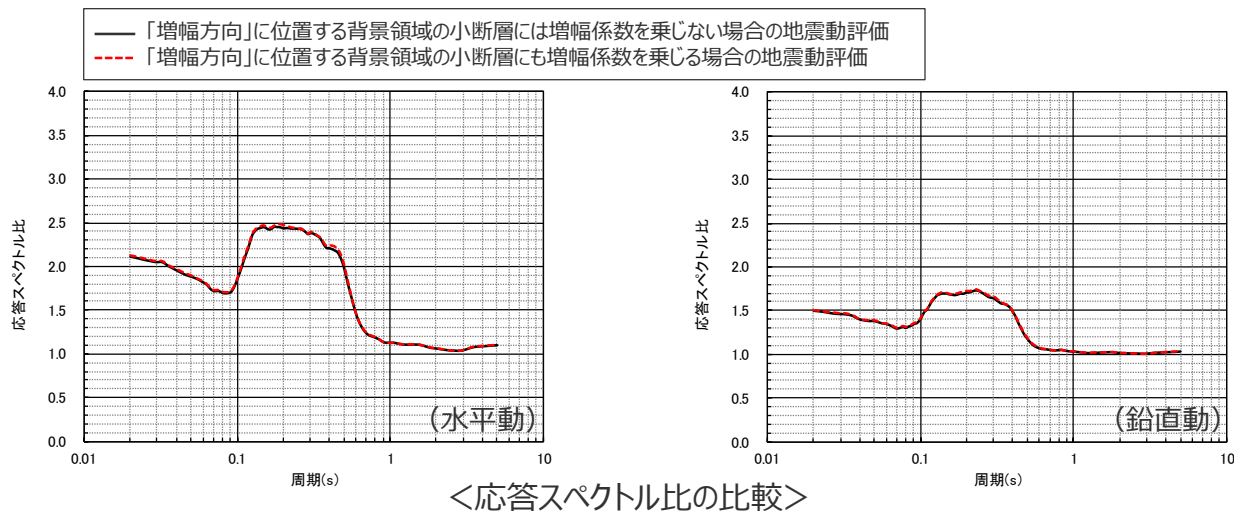
・統計的グリーン関数法による。

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認 (海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)))

- 前述のとおり、海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) について、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域 (SMGA1及びSMGA2) に加え、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の地震動レベルは、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と同程度であり、その結果に基づく応答スペクトル比も同程度となっている。また、フーリエスペクトル比も同程度となっている。



※ 水平動はNS方向とEW方向の平均。

- ・ 統計的グリーン関数法による。
- ・ 破壊開始点1~3の平均。

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析 (「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認(小括))

【「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認】

- 特性化震源モデルを用いた地震動評価では、背景領域からの地震動の短周期への影響は強震動生成域(アスペリティ)に比べて小さいとして検討し、震源断層全体の**短周期の地震動レベルを強震動生成域(アスペリティ)からの地震動のみで評価する考え方**により行われていることを踏まえ、断層モデルを用いた手法による地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価では、地震動の顕著な増幅が見られた短周期の地震動に及ぼす影響が支配的な強震動生成域(アスペリティ)に着目し、短周期の地震動評価に一般的に用いられる統計的グリーン関数法において、**「増幅方向」の敷地近傍に強震動生成域(アスペリティ)を保守的に配置したうえで、「増幅方向」に位置する強震動生成域(アスペリティ)からの地震動にのみ顕著な増幅を反映する方法**(強震動生成域(アスペリティ)の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法)を用いている。
- 増幅係数を乗じる強震動生成域(アスペリティ)を保守的に「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで評価を行うため、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層は敷地から離れることとなり、その影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域(アスペリティ)による影響が支配的であると考えられるが、ここでは、**「増幅方向」に背景領域の小断層が位置するプレート間地震及び海洋プレート内地震の検討用地震(地震動の顕著な増幅を考慮)**を対象に、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層のグリーン関数にも増幅係数を乗じた場合の影響確認を行う。

- プレート間地震及び海洋プレート内地震の検討用地震(地震動の顕著な増幅を考慮)の地震動の顕著な増幅が見られる周期帯(周期0.5秒程度以下)の地震動評価結果について、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域による影響が支配的であることを確認した。

- 上記のとおり、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層に増幅係数を乗じるか乗じないかの地震動レベルへの影響は、ごくわずかであり、地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価では、**地震動の顕著な増幅が見られた短周期の地震動への影響が支配的な強震動生成域(アスペリティ)に着目した保守的な評価**を行っていることから、**検討用地震(地震動の顕著な増幅を考慮)の地震動評価結果は、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層に増幅係数を乗じる乗じないにかかわらず、十分保守的な評価結果と考えられる。**

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

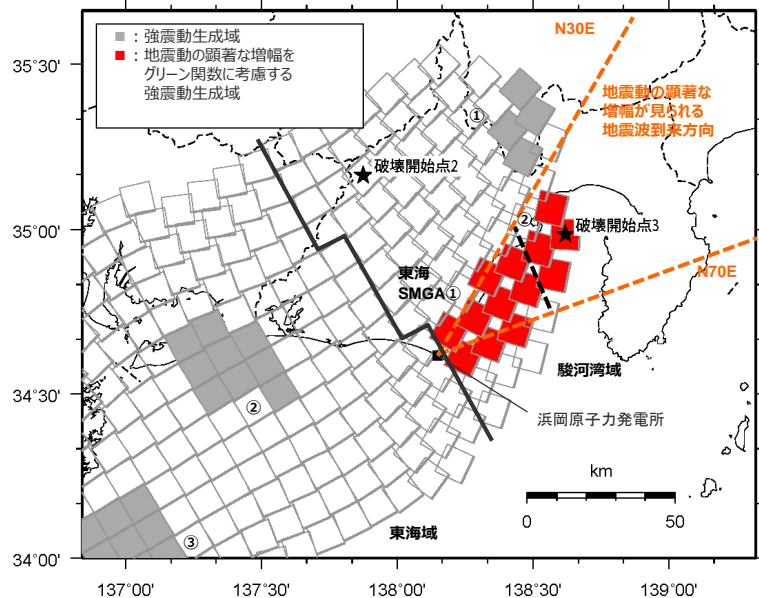
①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域 (アスペリティ) の小断層による波形のフーリエスペクトル比 (検討概要))

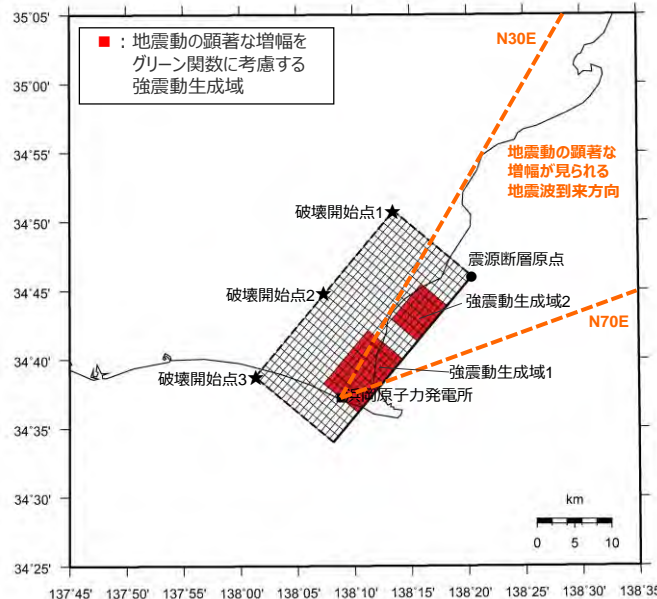
○ 各地震タイプ (内陸地殻内地震、プレート間地震、海洋プレート内地震) の検討用地震 (地震動の顕著な増幅を考慮) の断層モデルを用いた手法による地震動評価について、『2009年駿河湾の地震 (本震) の観測記録の再現検討と同じ増幅係数を乗じる強震動生成域 (アスペリティ) の小断層のみによる地震動 (波形合成結果) のフーリエスペクトル比 (地震動の顕著な増幅を考慮する場合 / 地震動の顕著な増幅を考慮しない場合)』を算出することで地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅を分析し、**2009年駿河湾の地震 (本震) の観測記録の再現検討で確認した地震動の顕著な増幅と同じ特性が反映されていることを確認する。**また、第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いについても分析する。

フーリエスペクトル比を算出

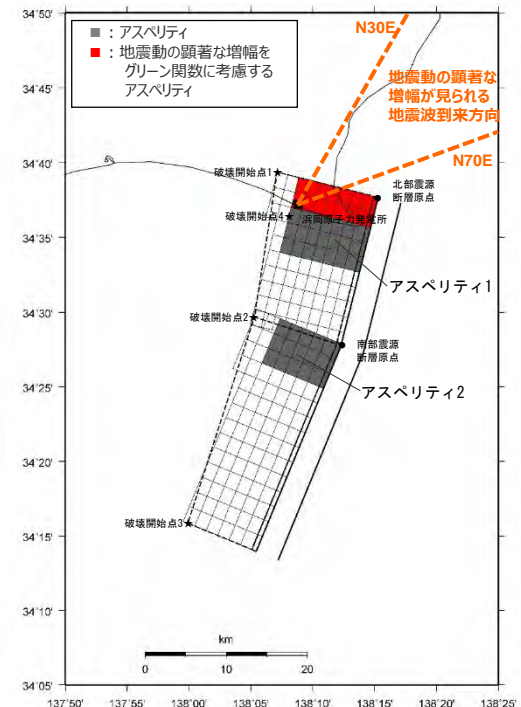
増幅係数を乗じる強震動生成域 (アスペリティ) のフーリエスペクトル※
 増幅係数を乗じる強震動生成域 (アスペリティ) の増幅係数を乗じない場合のフーリエスペクトル※



(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))



(海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))



(内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮))

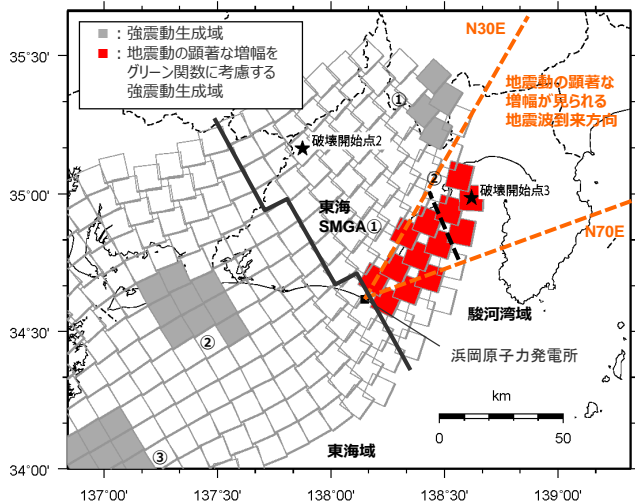
※ 水平動はNS方向とEW方向の平均。

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

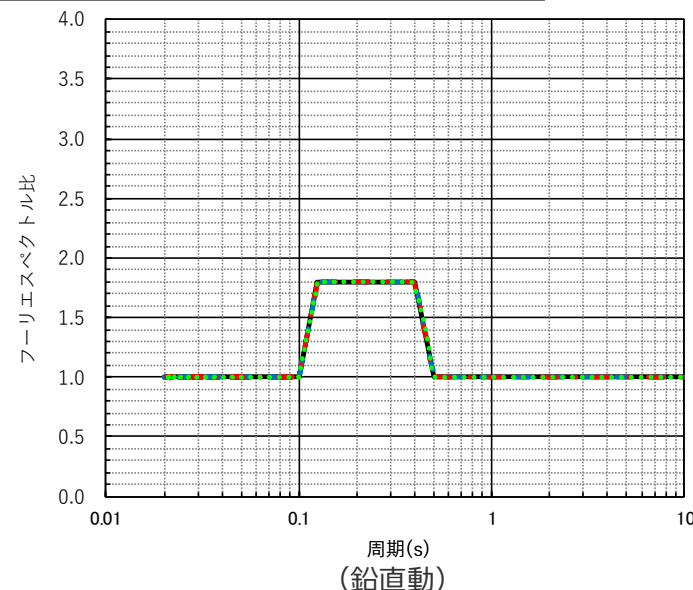
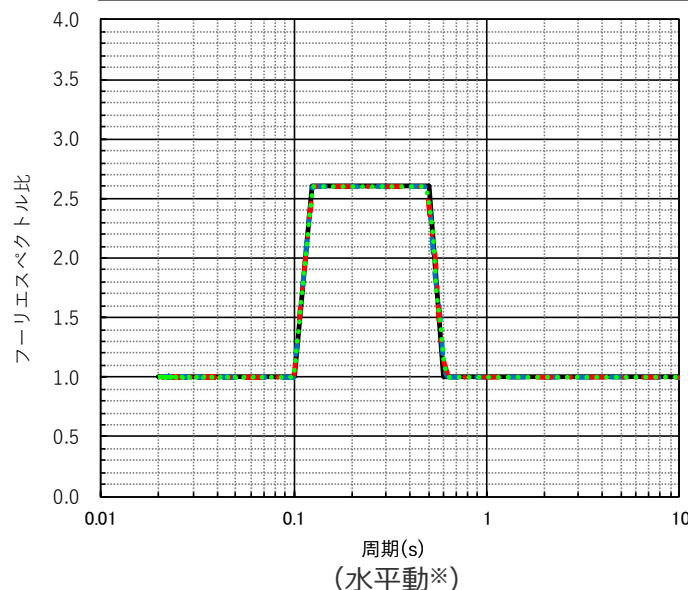
(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域(アスペリティ)の小断層による波形のフーリエスペクトル比(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)))

○プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)について、増幅係数を乗じる強震動生成域(駿河湾SMGA②と東海SMGA①)の小断層のみによる地震動(波形合成結果)のフーリエスペクトル比(地震動の顕著な増幅を考慮する場合/地震動の顕著な増幅を考慮しない場合)を算出した結果は、2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比と同じ(グリーン関数に乗じる増幅係数と同じ)となっている。

— 2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比(グリーン関数に乗じる増幅係数)
 - - フーリエスペクトル比: 増幅係数を乗じる強震動生成域(駿河湾SMGA②と東海SMGA①)の小断層-rup1
 - . - . フーリエスペクトル比: 増幅係数を乗じる強震動生成域(駿河湾SMGA②と東海SMGA①)の小断層-rup2
 - フーリエスペクトル比: 増幅係数を乗じる強震動生成域(駿河湾SMGA②と東海SMGA①)の小断層-rup3



(敷地周辺)



<「2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比(グリーン関数に乗じる増幅係数)」と「増幅係数を乗じる強震動生成域の小断層による地震動(波形合成結果)のフーリエスペクトル比」の比較>
(プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮))

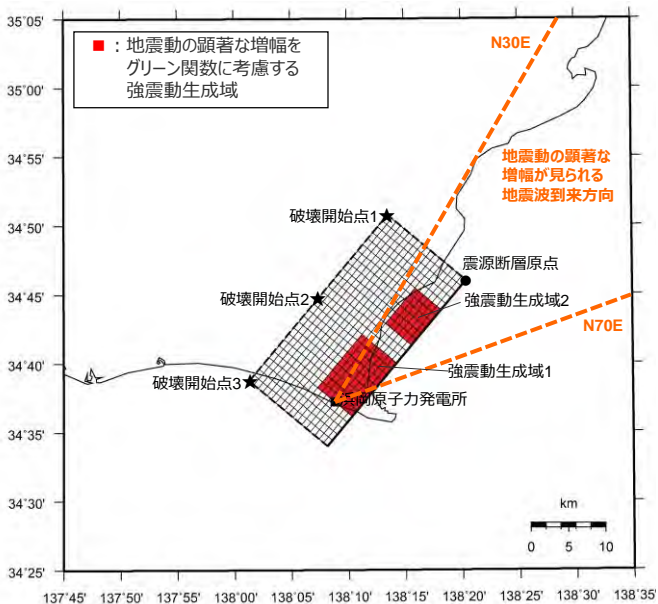
※ 水平動はNS方向とEW方向の平均。

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

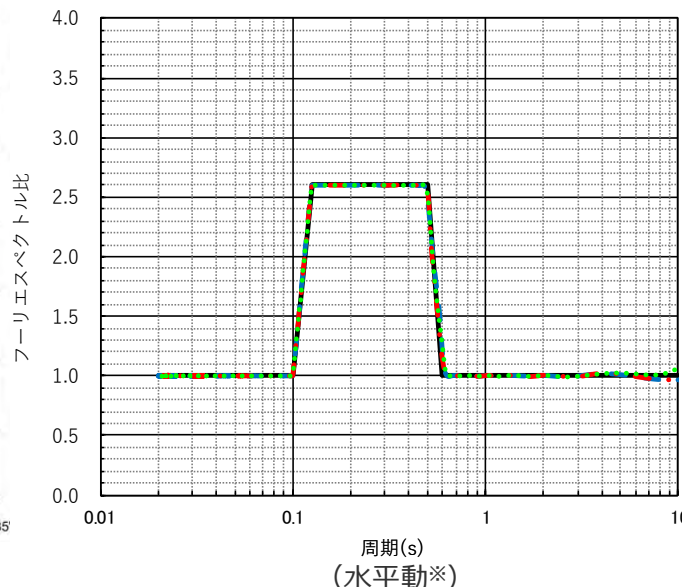
(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域(アスペリティ)の小断層による波形のフーリエスペクトル比
(海洋プレート内地震の基本震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)))

○海洋プレート内地震の基本震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)について、増幅係数を乗じる強震動生成域(SMGA1とSMGA2)の小断層のみによる地震動(波形合成結果)のフーリエスペクトル比(地震動の顕著な増幅を考慮する場合/地震動の顕著な増幅を考慮しない場合)を算出した結果は、2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比と同じ(グリーン関数に乗じる増幅係数と同じ)となっている。

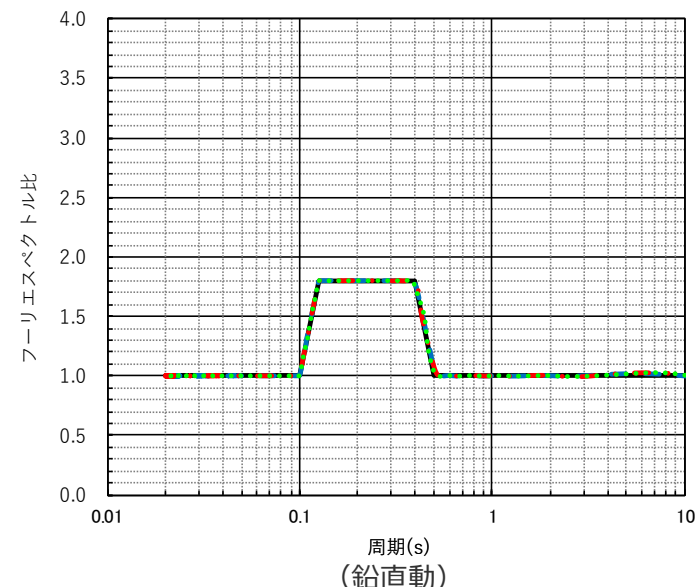
— 2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比(グリーン関数に乗じる増幅係数)
 - - フーリエスペクトル比:増幅係数を乗じる強震動生成域(SMGA1とSMGA2)の小断層-rup1
 - . - . フーリエスペクトル比:増幅係数を乗じる強震動生成域(SMGA1とSMGA2)の小断層-rup2
 - フーリエスペクトル比:増幅係数を乗じる強震動生成域(SMGA1とSMGA2)の小断層-rup3



(地表面投影図)



周期(s)
(水平動※)



周期(s)
(鉛直動)

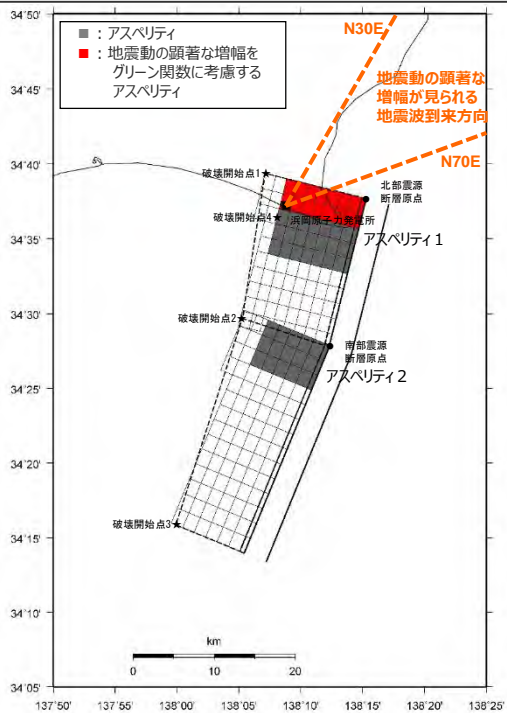
<「2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比(グリーン関数に乗じる増幅係数)」と「増幅係数を乗じる強震動生成域の小断層による地震動(波形合成結果)のフーリエスペクトル比」の比較>
(海洋プレート内地震の基本震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮))

※ 水平動はNS方向とEW方向の平均。

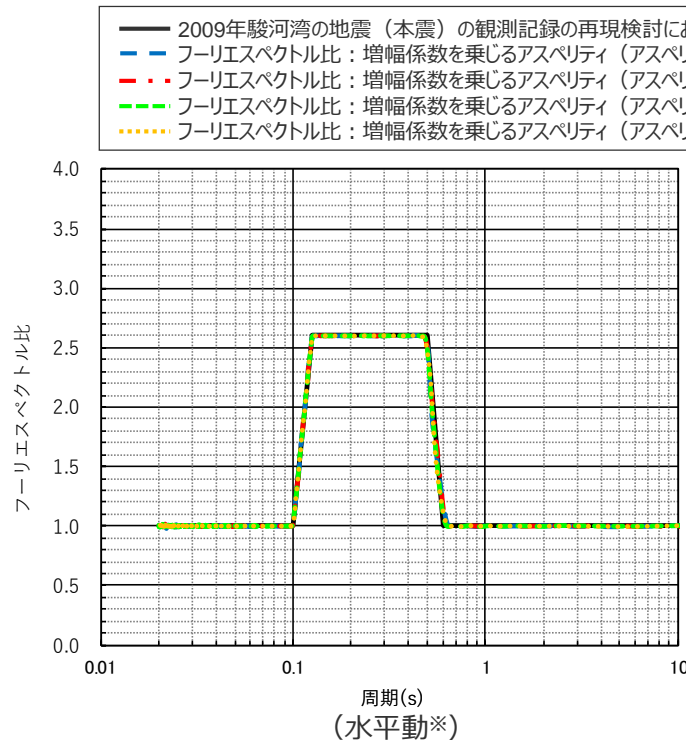
①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域(アスペリティ)の小断層による波形のフーリエスペクトル比(内陸地殻内地震の基本震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)))

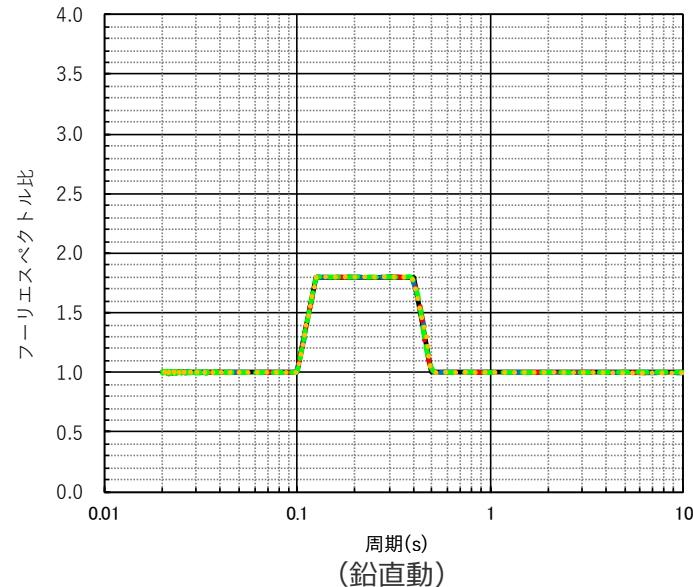
- 内陸地殻内地震の基本震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮)について、増幅係数を乗じるアスペリティ(アスペリティ1の一部)の小断層のみによる地震動(波形合成結果)のフーリエスペクトル比(地震動の顕著な増幅を考慮する場合/地震動の顕著な増幅を考慮しない場合)を算出した結果は、2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比と同じ(グリーン関数に乗じる増幅係数と同じ)となっている。



(地表面投影図)



(水平動*)



(鉛直動)

<「2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比(グリーン関数に乗じる増幅係数)」と「増幅係数を乗じるアスペリティの小断層による地震動(波形合成結果)のフーリエスペクトル比」の比較>
(内陸地殻内地震の基本震源モデル(地震動の顕著な増幅を考慮))

- 以上より、各地震タイプ(内陸地殻内地震、プレート間地震、海洋プレート内地震)の検討用地震(地震動の顕著な増幅を考慮)の地震動評価結果について、増幅係数を乗じる強震動生成域(アスペリティ)の小断層のみによる地震動(波形合成結果)を分析し、2009年駿河湾の地震(本震)の観測記録の再現検討で確認した地震動の顕著な増幅と同じ特性が反映されていることを確認した。

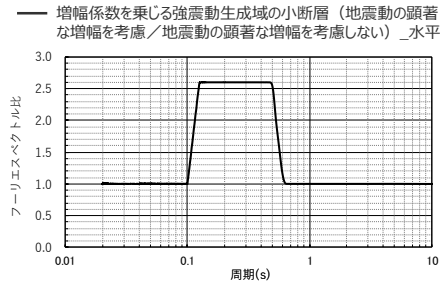
* 水平動はNS方向とEW方向の平均。

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いの分析)

【第940回審査会合で提示したフーリエスペクトル比】

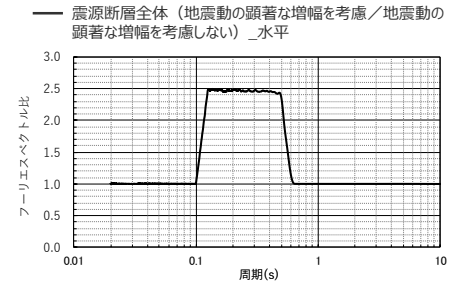
- 第940回審査会合で提示したフーリエスペクトル比（地震動の顕著な増幅を考慮する場合／地震動の顕著な増幅を考慮しない場合）は、「増幅方向」に位置し増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の地震動（波形合成結果）のフーリエスペクトル比であり、それが2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比と同じ（グリーン関数に乗じる増幅係数と同じ）となっていることを示した。



<フーリエスペクトル比（プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル（水平動）の例）>

【第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比】

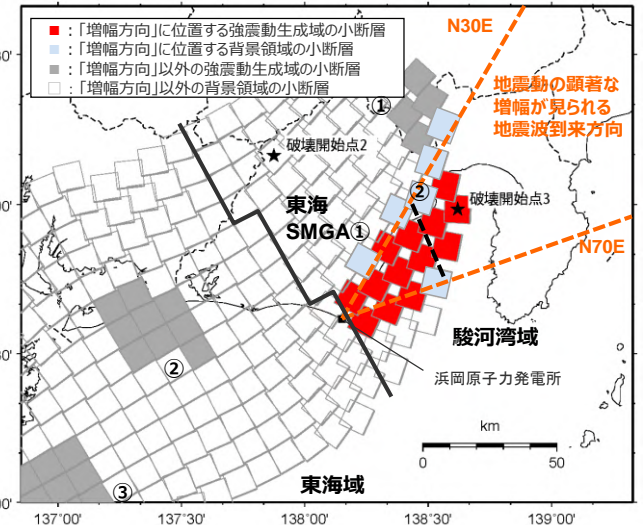
- 第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比（地震動の顕著な増幅を考慮する場合／地震動の顕著な増幅を考慮しない場合）は、震源断層全体の地震動（波形合成結果）のフーリエスペクトル比を示したものである。
- 震源断層全体の地震動（波形合成結果）は、「増幅方向」に位置し増幅係数を乗じた強震動生成域（アスペリティ）の地震動（波形合成結果）に加え、それ以外の増幅係数を乗じない領域（増幅係数を乗じない「増幅方向」に位置する背景領域、増幅係数を乗じない「増幅方向」以外の強震動生成域（アスペリティ）及び背景領域）の地震動（波形合成結果）を足し合わせたものである。



<フーリエスペクトル比（プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル（水平動）の例）>

【第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いの分析】

- 第882回審査会合で提示した震源断層全体のフーリエスペクトル比が、強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に乗じる増幅係数よりやや小さいことは、**増幅係数を乗じない領域（増幅係数を乗じない「増幅方向」に位置する背景領域、増幅係数を乗じない「増幅方向」以外の強震動生成域（アスペリティ）及び背景領域）の地震動による影響**である。
- 増幅係数を乗じない領域のうち「増幅方向」に位置する背景領域の小断層については、増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）を「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで保守的な評価を行うことから、当該小断層は敷地から離れることとなり、前述のとおり地震動評価結果に及ぼす影響は小さい。
- また、増幅係数を乗じない領域のうち「増幅方向」以外の強震動生成域（アスペリティ）及び背景領域の小断層については、地震観測記録の分析結果を踏まえ、増幅係数をそのグリーン関数に乗じない。
- 更に、震源断層全体の地震動について、増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の地震動に、上記の増幅係数を乗じない領域の地震動が付加されることによってフーリエスペクトルが大きくなっていることを確認している（後述参照）。
- 以上より、第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比を踏まえても、**本反映方法により地震観測記録の分析結果に基づき地震動の顕著な増幅が地震動評価に適切に反映されている。**

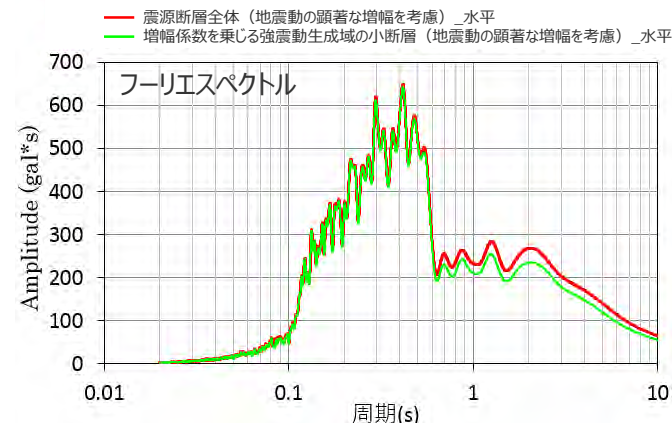
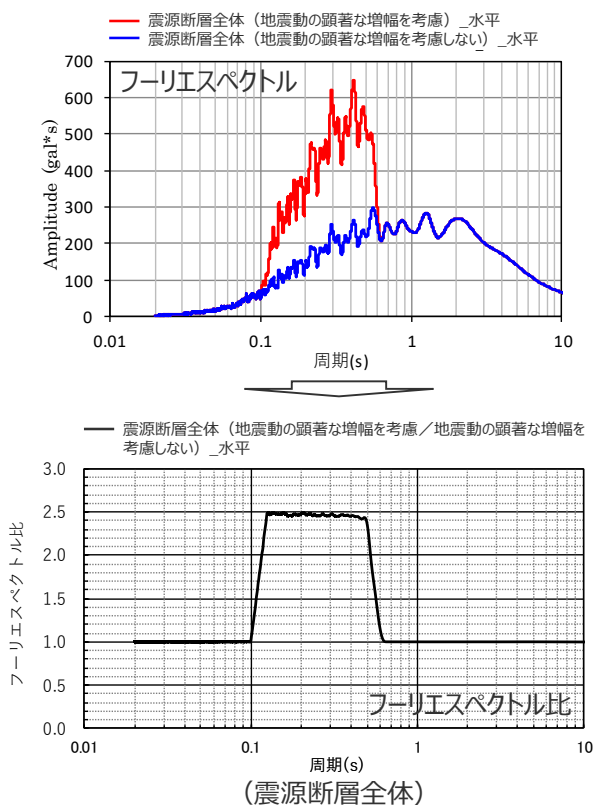


<検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の震源モデル（プレート間地震の例）>

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いの分析 (プレート間地震))

- 第882回審査会合で提示した震源断層全体の地震動のフーリエスペクトル比 (地震動の顕著な増幅を考慮する場合 / 地震動の顕著な増幅を考慮しない場合) が、グリーン関数に乗じる増幅係数よりやや小さいことは、**増幅係数に乗じない領域による影響**であり、増幅係数に乗じる強震動生成域の地震動 (波形合成結果) のフーリエスペクトル比が2009年駿河湾の地震 (本震) の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比と同じ (グリーン関数に乗じる増幅係数と同じ) となっていることを確認している。
- なお、震源断層全体の地震動のフーリエスペクトルは、増幅係数に乗じる強震動生成域の地震動に対し、増幅係数に乗じない領域の地震動が付加されることによって大きくなっていることも確認した。



<震源断層全体の地震動と増幅係数に乗じる強震動生成域の地震動のフーリエスペクトル* >
(地震動の顕著な増幅を考慮する場合)

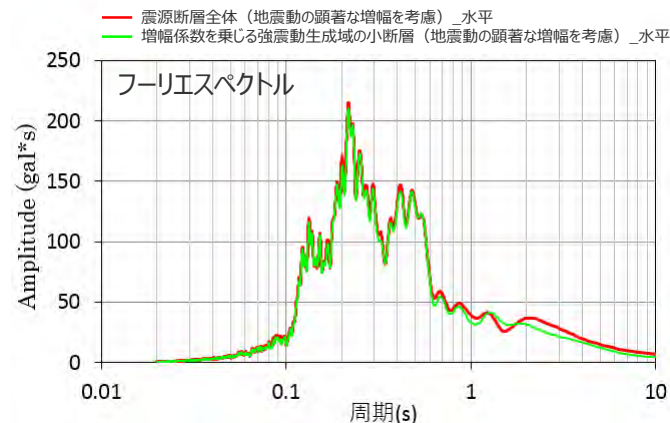
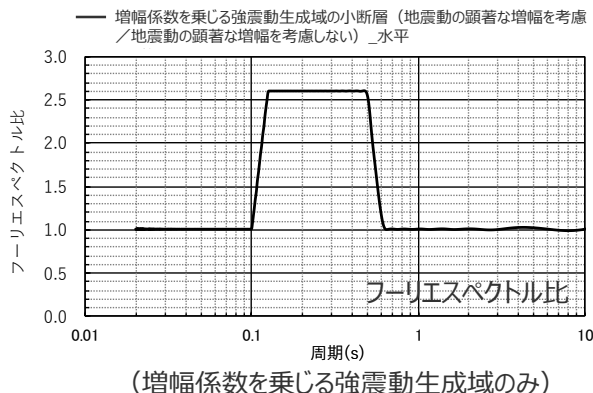
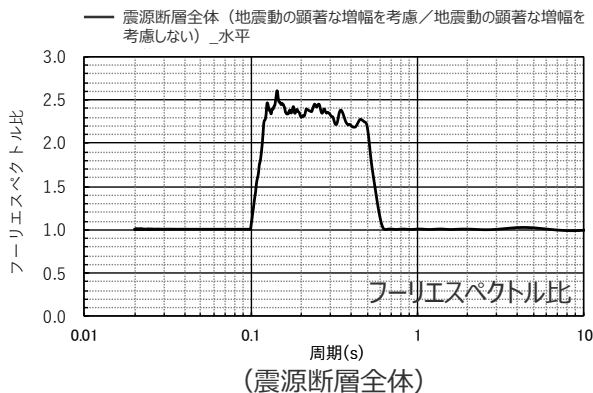
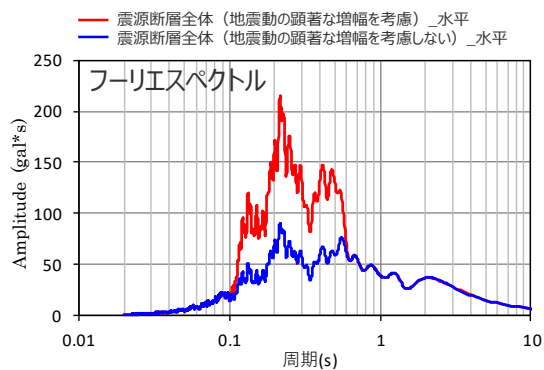
<地震動の顕著な増幅を考慮する場合と考慮しない場合のフーリエスペクトル及びフーリエスペクトル比* >

*プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)、水平動の例

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いの分析 (海洋プレート内地震))

- 第882回審査会合で提示した震源断層全体の地震動のフーリエスペクトル比 (地震動の顕著な増幅を考慮する場合 / 地震動の顕著な増幅を考慮しない場合) が、グリーン関数に乗じる増幅係数よりやや小さいことは、**増幅係数に乗じない領域による影響**であり、増幅係数に乗じる強震動生成域の地震動 (波形合成結果) のフーリエスペクトル比が2009年駿河湾の地震 (本震) の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比と同じ (グリーン関数に乗じる増幅係数と同じ) となっていることを確認している。
- なお、震源断層全体の地震動のフーリエスペクトルは、増幅係数に乗じる強震動生成域の地震動に対し、増幅係数に乗じない領域の地震動が付加されることによって大きくなっていることも確認した。



<震源断層全体の地震動と増幅係数に乗じる強震動生成域の地震動のフーリエスペクトル※>
(地震動の顕著な増幅を考慮する場合)

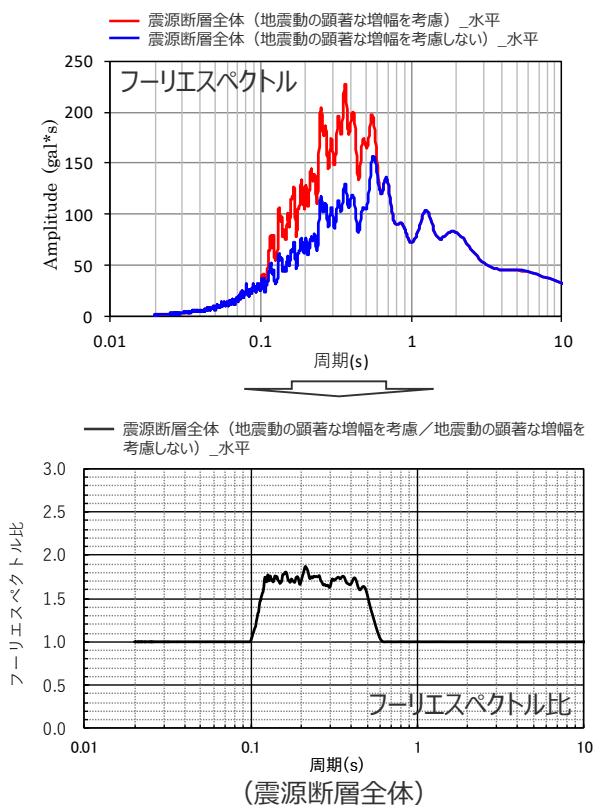
<地震動の顕著な増幅を考慮する場合と考慮しない場合のフーリエスペクトル及びフーリエスペクトル比※>

※海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)、水平動の例

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いの分析 (内陸地殻内地震))

- 第882回審査会合で提示した震源断層全体の地震動のフーリエスペクトル比 (地震動の顕著な増幅を考慮する場合 / 地震動の顕著な増幅を考慮しない場合) が、グリーン関数に乗じる増幅係数よりやや小さいことは、**増幅係数に乗じない領域による影響**であり、増幅係数に乗じるアスペリティの地震動 (波形合成結果) のフーリエスペクトル比が2009年駿河湾の地震 (本震) の観測記録の再現検討におけるフーリエスペクトル比と同じ (グリーン関数に乗じる増幅係数と同じ) となっていることを確認している。
- なお、震源断層全体の地震動のフーリエスペクトルは、増幅係数に乗じるアスペリティの一部の地震動に対し、増幅係数に乗じない領域の地震動が付加されることによって大きくなっていることも確認した。



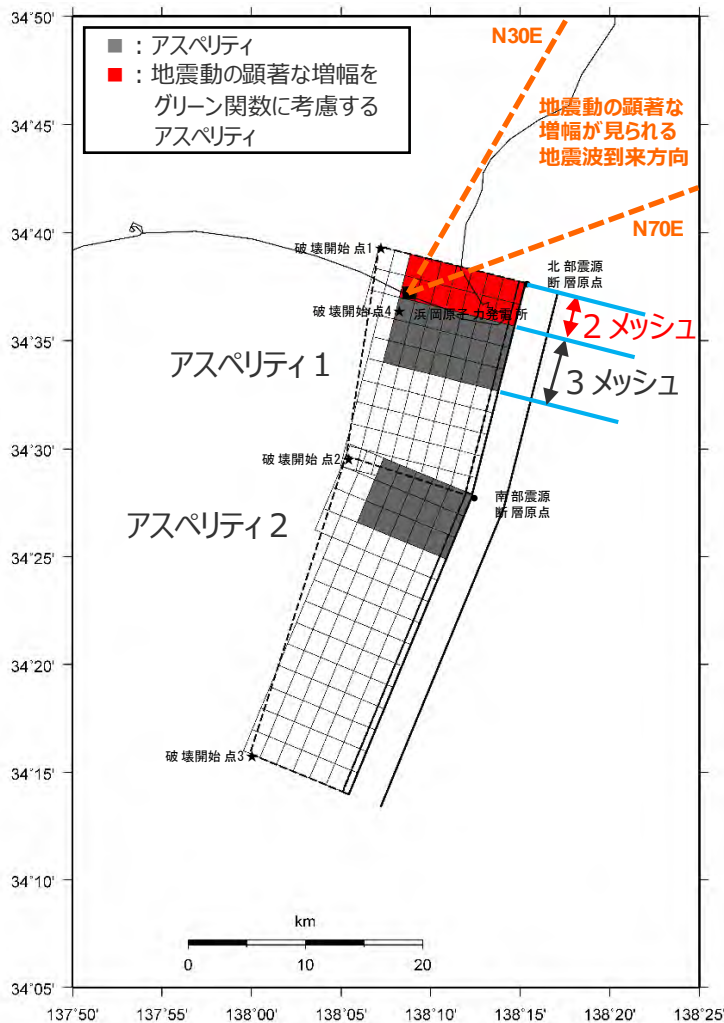
<震源断層全体の地震動と増幅係数に乗じるアスペリティの一部の地震動のフーリエスペクトル* >
(地震動の顕著な増幅を考慮する場合)

<地震動の顕著な増幅を考慮する場合と考慮しない場合のフーリエスペクトル及びフーリエスペクトル比* >

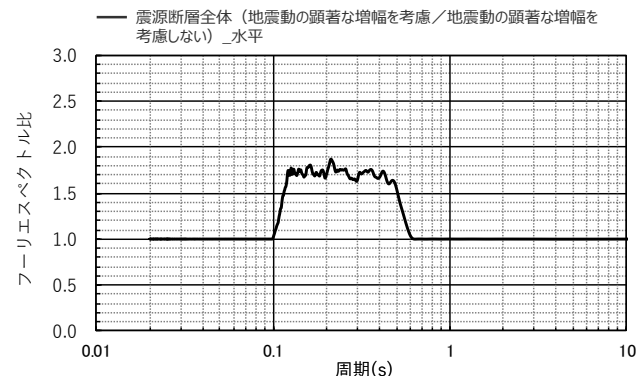
※内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)、水平動の例

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いの分析 (内陸地殻内地震))



○内陸地殻内地震 (御前崎海脚西部の断層帯による地震) の震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) では、「増幅方向」に位置し増幅係数を乗じるアスペリティの小断層が、敷地の地震動に及ぼす影響が最も大きい敷地近傍のアスペリティ1の一部であることから、震源断層全体の地震動のフーリエスペクトル比は、グリーン関数に乗じる増幅係数2.6倍 (周期0.125~0.5秒) より小さく1.8倍程度である。



○これに関し、以下の簡易な分析をした。

- ① 敷地近傍のアスペリティ1のうち、増幅係数を乗じる領域の面積は4割 (2/5メッシュ) であること、短周期の地震動レベルAはアスペリティの面積の1/2乗に比例することを踏まえると、地震動の顕著な増幅を考慮しない場合の短周期の地震動レベルは、増幅係数を乗じる領域からの地震動が「 $0.4^{1/2}$ 」の時、増幅係数を乗じない領域からの地震動は「 $0.6^{1/2}$ 」と考えられる。
- ② 以下では、簡単のため、敷地近傍のアスペリティ1以外の領域からの地震動の影響は無視できる程度に小さいと考えられることから、「アスペリティ1の増幅係数を乗じる領域からの地震動」のレベルが $A_1 = 「0.4^{1/2}」$ の時、それ以外の領域の地震動レベルが $A_2 = 「0.6^{1/2}」$ と仮定して検討する。
- ③ 「アスペリティ1の増幅係数を乗じる領域の地震動」とそれ以外の地震動を時刻歴波形で足し合わせると、ランダム波形の足し合わせとなり、短周期の地震動のレベルは2乗和平方根で計算されることから、地震動の顕著な増幅を考慮しない場合、地震動の顕著な増幅を考慮する場合 (「アスペリティ1の増幅係数を乗じる領域の地震動」のみ2.6倍した場合) について、全体の短周期の地震動レベルは次のとおりとなる。

$$\text{地震動の顕著な増幅を考慮しない場合} : \sqrt{((A_1)^2 + (A_2)^2)} = \sqrt{((0.4^{1/2})^2 + (0.6^{1/2})^2)} = 1.0$$

$$\text{地震動の顕著な増幅を考慮する場合} : \sqrt{((A_1 \times 2.6)^2 + (A_2)^2)} = \sqrt{((0.4^{1/2} \times 2.6)^2 + (0.6^{1/2})^2)} \doteq 1.8$$

- ④ 以上の簡易の分析の結果、短周期の地震動レベルについて、地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価結果と考慮しない地震動評価結果との比は、1.8倍程度と推定される。

<内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (御前崎海脚西部の断層帯による地震)>

○内陸地殻内地震 (御前崎海脚西部の断層帯による地震) の震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の地震動評価結果に反映されている地震動の顕著な増幅は妥当なものと分析した。

①地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析

(まとめ)

【2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討】

○2009年駿河湾の地震（本震）を対象として、強震動生成域のみの震源モデルに基づき、強震動生成域（アスペリティ）の各小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法を用いて統計的グリーン関数法による地震動評価を行い、波形合成結果との比較により、地震動の顕著な増幅が見られた観測点（5G1、5RB）の観測記録の再現検討を行い、断層モデルを用いた手法における地震動の顕著な増幅の反映方法の検証を行った。

【検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価】

○検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価は、地震観測記録に基づき確認された地震動の顕著な増幅の特性を的確に反映するため、断層モデルを用いた手法を重視することとし、2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討により検証した方法を用いて、地震動評価に地震動の顕著な増幅を反映した。応答スペクトルに基づく手法については、断層モデルを用いた手法による地震動評価結果を用いて応答スペクトルに与える影響を求めて反映した。

【① 地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析】

○各地震タイプ（内陸地殻内地震、プレート間地震、海洋プレート内地震）の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価の結果について、まず、「**2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討と同じ増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の小断層のみによる地震動（波形合成結果）**」の影響を確認する。また、「増幅方向」に背景領域が位置するプレート間地震及び海洋プレート内地震の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）について、「**増幅方向**」に位置する背景領域の小断層のグリーン関数にも増幅係数を乗じた場合の影響を確認する。

⇒地震動の顕著な増幅が見られる周期帯（周期0.5秒程度以下）の地震動評価結果について、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域による影響が支配的であることを確認した。

○その上で、上記の「2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討と同じ増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の小断層のみによる地震動（波形合成結果）」について、フーリエスペクトル比（地震動の顕著な増幅を考慮する場合／地震動の顕著な増幅を考慮しない場合）を算出し、**2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討で確認した地震動の顕著な増幅と同じ特性が反映されていることを確認する。**また、第882回審査会合で提示したフーリエスペクトル比との違いについても分析する。

⇒2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討で確認した地震動の顕著な増幅と同じ特性が反映されていることを確認した。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(検討概要)

【検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価】

- 各検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価は、断層モデルを用いた手法において、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲・増幅の程度を**地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定**することにより、**保守的な地震動評価**を行う。応答スペクトルに基づく手法は、断層モデルを用いた手法による保守的な地震動評価結果を反映することにより、保守的な地震動評価を行う。

【② 地震動評価結果に考慮された保守性の確認】

- 各地震タイプ（内陸地殻内地震、プレート間地震、海洋プレート内地震）の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価及び応答スペクトルに基づく地震動評価について、**敷地近傍は地震動の顕著な増幅が見られないなどの地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価を行い、地震観測記録の分析結果に対し保守的に行った地震動評価の結果に考慮された保守性を分析する**。なお、比較のため、増幅の程度は保守的な評価と同じ設定したケースについても地震動評価を行った。

ケース①：地震動の顕著な増幅の範囲・増幅の程度を地震観測記録の分析結果に沿って設定

ケース②：地震動の顕著な増幅の範囲を地震観測記録の分析結果に沿って設定し、増幅の程度は保守的な評価と同じ設定

項目	地震観測記録の分析結果等	地震観測記録の分析結果に沿った評価（ケース①）	地震観測記録の分析結果に沿った評価（ケース②）	比較	基準地震動の策定に係る保守的な評価
地震動の顕著な増幅の範囲（震源位置）	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の到来方向（N30E～N70E、「増幅方向」）の地震波のみ顕著な増幅が見られる。 ・「増幅方向」でも地震波の入射角が鉛直に近づく敷地近傍は顕著な増幅が見られない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）を「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲を、地震観測記録の分析結果における「増幅方向と同程度とし、敷地近傍を含めずに設定（地震観測記録の分析結果に沿った評価） 	<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）を「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲を、地震観測記録の分析結果における「増幅方向と同程度とし、敷地近傍を含めずに設定（地震観測記録の分析結果に沿った評価） 		
地震動の顕著な増幅の程度（特性）	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の短周期の周期帯（フーリエスペクトルの周期0.2～0.5秒）で地震動の顕著な増幅が見られる。 ・「増幅方向」でも増幅の程度は一樣でなく、2009年駿河湾の地震（本震）は最も大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法を採用（背景領域に増幅係数は考慮せず） ・増幅係数は、増幅の程度を「増幅方向」の地震の観測記録の平均値にして地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに適用（地震観測記録の分析結果に沿った評価） 	<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法を採用（背景領域に増幅係数は考慮せず） ・増幅係数は、増幅の程度が最も大きい2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現性を確認したものを地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに適用（保守的な評価） 		<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法を採用（背景領域に増幅係数は考慮せず） ・増幅係数は、増幅の程度が最も大きい2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現性を確認したものを地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに適用（保守的な評価）

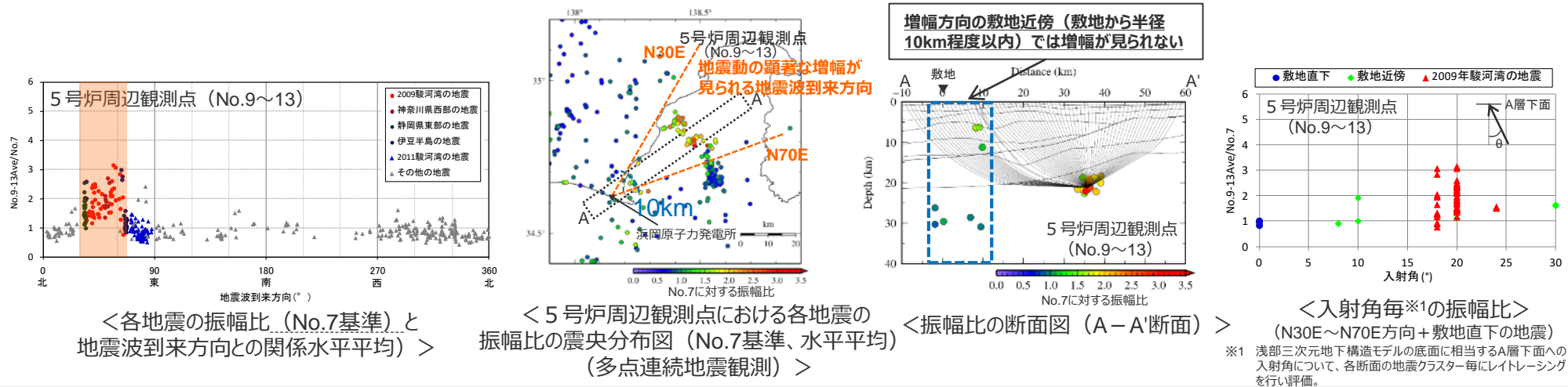
<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価の設定)

地震観測記録の分析結果

- 5号炉周辺観測点において、地震動の顕著な増幅は、2009年駿河湾の地震の到来方向（N30E～N70E）の地震波のみに見られ、その他の地震波到来方向では見られない。
- 地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向（N30E～N70E）の地震波でも、増幅の程度は一樣ではなく、地震波の入射角が鉛直に近づく敷地近傍の地震ほど顕著な増幅は見られない傾向がある。このうち、2009年駿河湾の地震（本震）は増幅の程度が最も大きく信頼性が高い記録が得られた地震である。



【地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価の設定】

- 地震観測記録の分析結果に沿った設定方法（地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の範囲及び増幅の程度）は以下のとおり。
- この地震観測記録の分析結果に沿った設定に関し、敷地への影響が最も大きいプレート間地震の地震動評価を対象に、地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果と前述のS波低速度層を含む三次元地下構造モデルを用いた差分法による地震動評価結果を比較する。

地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスぺリティ）の小断層の範囲

- 地震動の顕著な増幅は、敷地における地震観測記録の分析結果において地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向（N30E～N70E）に位置する強震動生成域（アスぺリティ）の小断層のみに考慮し、地震動の顕著な増幅が見られない敷地近傍（敷地から半径10km以内）の小断層には考慮しない。

地震動の顕著な増幅を考慮する増幅の程度（次ページ参照）

- 地震観測記録の分析結果に沿った平均的な増幅係数は、多点連続地震観測の分析結果である5号炉周辺観測点の振幅比（No.7基準）に基づき、地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向（N30E～N70E）で発生した地震（敷地から半径100km程度までの範囲の地震を対象（敷地近傍（敷地から半径10kmまで）の地震を除く）の平均値（振幅比1.5）※2を参考として設定する。

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

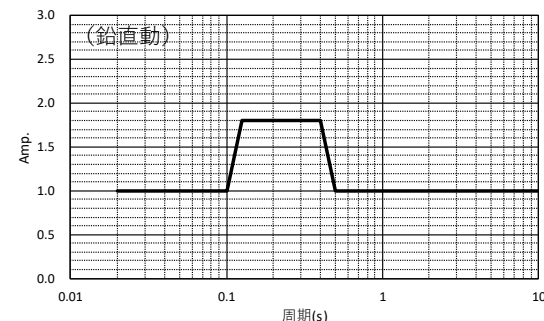
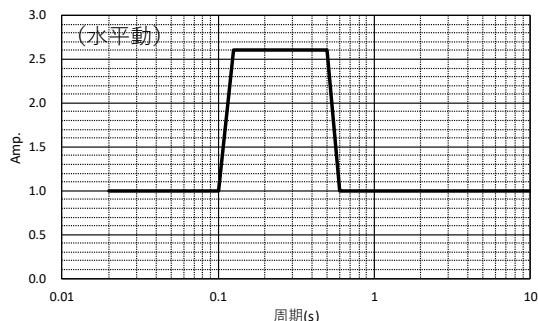
(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価の設定 (グリーン関数に乗じる増幅係数))

グリーン関数に乗じる増幅係数

○地震観測記録の分析結果に沿った平均的な増幅係数は、多点連続地震観測の分析結果である5号炉周辺観測点の振幅比 (No.7基準) に基づき、地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向 (N30E~N70E) で発生した地震 (敷地から半径100km程度までの範囲の地震を対象 (敷地近傍 (敷地から半径10kmまで) の地震を除く)) の平均値 (振幅比1.5) ※を参考として下図表のとおり設定する。

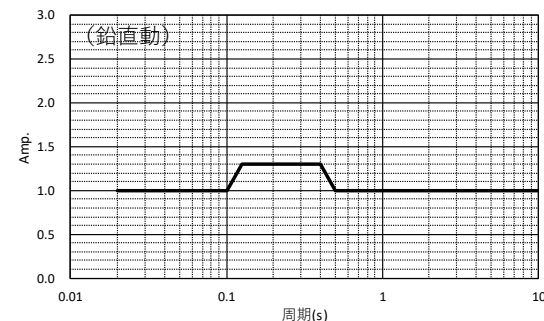
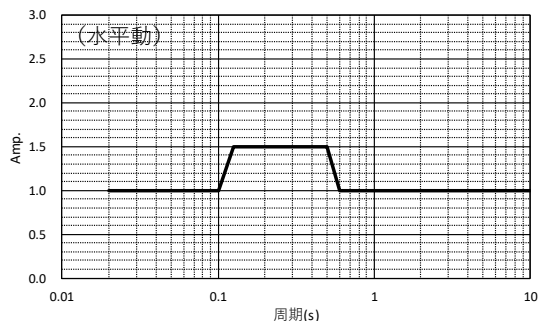
・鉛直動の増幅係数は、前述のとおり地震観測記録の分析結果を踏まえた保守的な地震動評価に用いる増幅係数の水平・鉛直比から設定する。

周期(s)	水平動	周期(s)	鉛直動
0.02	1	0.02	1
0.1	1	0.1	1
0.125	2.6	0.125	1.8
0.5	2.6	0.4	1.8
0.6	1	0.5	1
10	1	10	1



(地震観測記録の分析結果を踏まえた保守的な地震動評価に用いる増幅係数 (地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに乗じる))

周期(s)	水平動	周期(s)	鉛直動
0.02	1	0.02	1
0.1	1	0.1	1
0.125	1.5	0.125	1.3
0.5	1.5	0.4	1.3
0.6	1	0.5	1
10	1	10	1



(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価に用いる増幅係数 (地震動の顕著な増幅が見られる地震波到来方向 (N30E~N70E) に位置する敷地から10km以遠の地震動の顕著な増幅を考慮する小断層に乗じる))

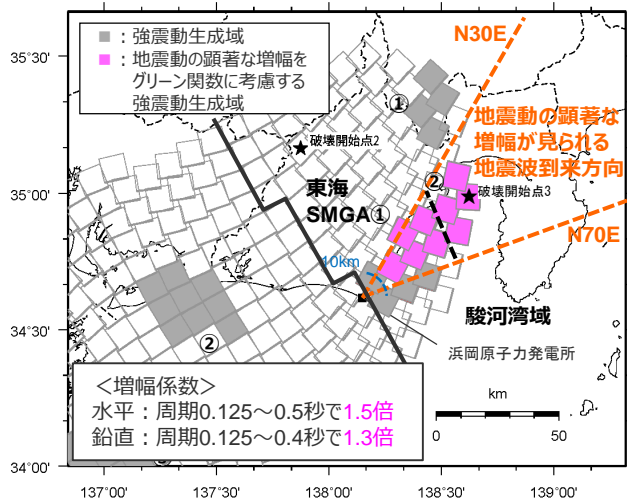
<グリーン関数に乗じる増幅係数の比較>

※ 本編p.420参照。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

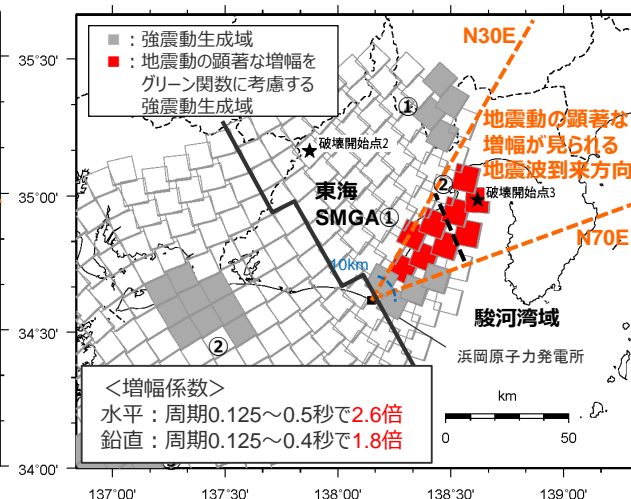
(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (プレート間地震))

- プレート間地震について、強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を代表に、地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価として、ケース① (増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に沿って設定) 及びケース② (増幅の範囲のみ地震観測記録の分析結果に沿って設定し、増幅の程度は地震観測記録の分析結果を踏まえて保守的に設定) の地震動評価を行い、地震観測記録の分析結果に対し保守的に行った地震動評価の結果に考慮された保守性を確認する。
- また、プレート間地震は敷地への影響が最も大きい検討用地震であることから、強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を代表に、地震動の顕著な増幅の要因であるS波低速度層を含む三次元地下構造モデルを用いた差分法による地震動評価を行い【第194回審査会合報告内容を再掲】、地震観測記録の分析結果に対し保守的に行った地震動評価の結果に考慮された保守性を確認する。
- なお、地震動の顕著な増幅の要因であるS波低速度層を含む三次元地下構造モデルは地震観測記録の特徴を概ね再現可能な解析モデルであり、当該モデルを用いた差分法による地震動評価結果には、S波低速度層による三次元的な影響がそのまま反映されていることから、この差分法による地震動評価結果と地震観測記録の分析結果に沿って設定した上記ケース①の地震動評価結果が同程度となることを確認する。



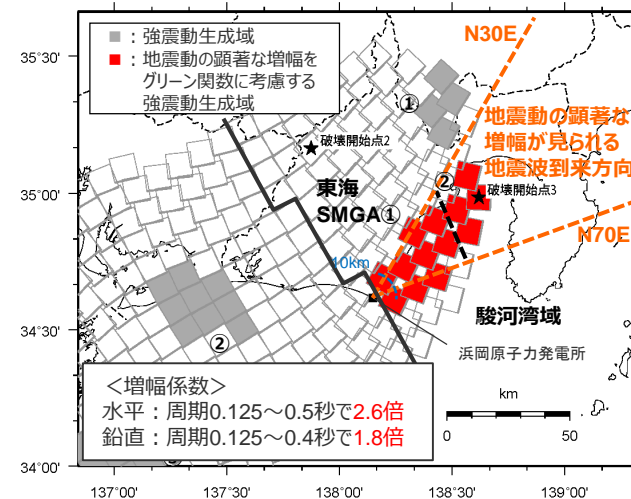
(敷地周辺)

<地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①)>



(敷地周辺)

<地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース②)>



(敷地周辺)

<強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価)>

・黒字の丸数字はプレート間地震の強震動生成域のNo.を表す。
・-----: 東海SMGA①と駿河湾SMGA②の境界を表す。

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (プレート間地震))

<プレート間地震の強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価) の震源断層パラメータ>

	震源断層パラメータ				背景領域					その他				
	面積(km ²)	平均応力降下量(MPa)	平均すべり量(m)	地震モーメント(Nm)	Mw	短周期レベル(Nm/s ²)	セグメント名	日向灘域	南海域	東海域	駿河湾域	破壊伝播速度(km/s)	fmax(Hz)	剛性率(Nm ²)
全体	110150	2.3	7.6	3.4E+22	9.0	5.09E+20		17017	47673	25760	7009			
各セグメント	セグメント名	日向灘域	南海域	東海域	駿河湾域									
	面積(km ²)	19053	53790	29419	7888									
	地震モーメント(Nm)	4.3E+21	2.0E+22	8.3E+21	1.1E+21									
	Mw	8.4	8.8	8.5	8.0									
強震動生成域 SMGA①	面積(km ²)	1014	1958	913	448									
	応力パラメータ(MPa)	34.6	46.4	45.4	33.9									
	平均すべり量(m)	11.0	20.5	13.7	7.2									
	地震モーメント(Nm)	4.6E+20	1.6E+21	5.1E+20	1.3E+20									
強震動生成域 SMGA②	面積(km ²)	1023	1616	915	431									
	応力パラメータ(MPa)	34.6	46.4	45.4	33.9									
	平均すべり量(m)	11.1	18.7	13.7	7.0									
	地震モーメント(Nm)	4.7E+20	1.2E+21	5.2E+20	1.2E+20									
強震動生成域 SMGA③	面積(km ²)		1612	913										
	応力パラメータ(MPa)		46.4	45.4										
	平均すべり量(m)		18.6	13.7										
	地震モーメント(Nm)		1.2E+21	5.1E+20										
強震動生成域 SMGA④	面積(km ²)		932	918										
	応力パラメータ(MPa)		46.4	45.4										
	平均すべり量(m)		14.2	13.8										
	地震モーメント(Nm)		5.4E+20	5.2E+20										
	Mw		7.8	7.7										

○震源断層パラメータの設定は内閣府(2012)による。設定方法は以下のとおり。

<各セグメントの地震モーメントM₀>
 $M_0 = 16 / (7\pi^{3/2}) \cdot \Delta\sigma \cdot S^{3/2}$
 (Δσ : 平均応力降下量(4MPa), S : 震源断層面積)

<平均変位量D>
 $M_0 = \mu DS$
 (μ : 剛性率(pVs²), p : 密度(2.8g/cm³), Vs (β) : S波速度(3.82km/s) (内閣府(2012)による))

<強震動生成域の面積Saと個数>
 : 強震動生成域は各セグメントの震源断層面積の10%程度とし、セグメント内の地形的な構造単位に2個配置する。

<強震動生成域全体の地震モーメントM_{0a}>
 $M_{0a} = \mu DaSa$
 (Da = 2D)

<各強震動生成域の地震モーメントM_{0ai}、変位量Dai、応力降下量Δσai>
 $M_{0ai} = M_{0a} \cdot Sai^{3/2} / (\sum Sai^{3/2})$ (i : i番目の強震動生成域を表す)
 $\Delta\sigma ai = (7\pi^{3/2}) / 16 \cdot M_{0ai} / Sai^{3/2}$
 $Dai = M_{0ai} / (\mu Sai)$

<破壊伝播速度>
 $Vr = 0.72Vs$

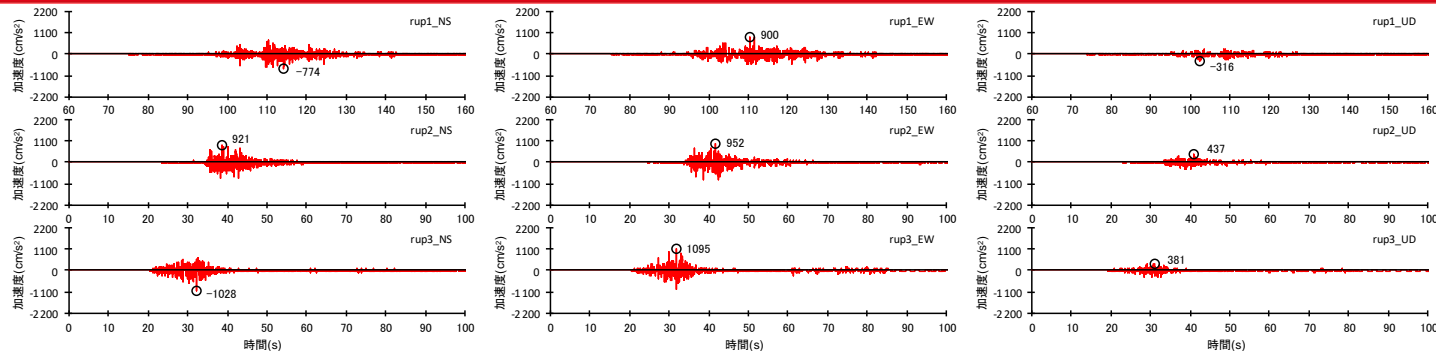
・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 (A=4πr_aΔσ_aβ²) に基づく。

・ケース①及びケース②の震源断層パラメータは、強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) と同じである。

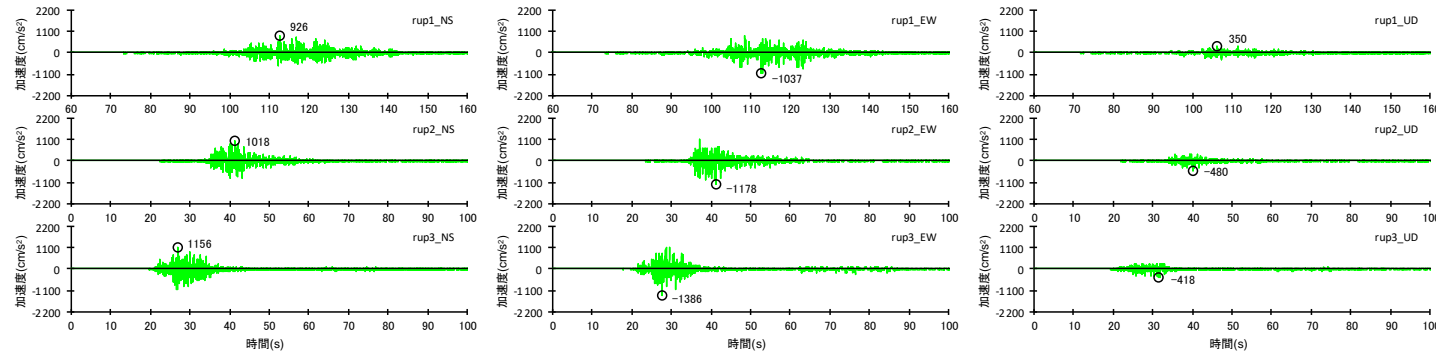
<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

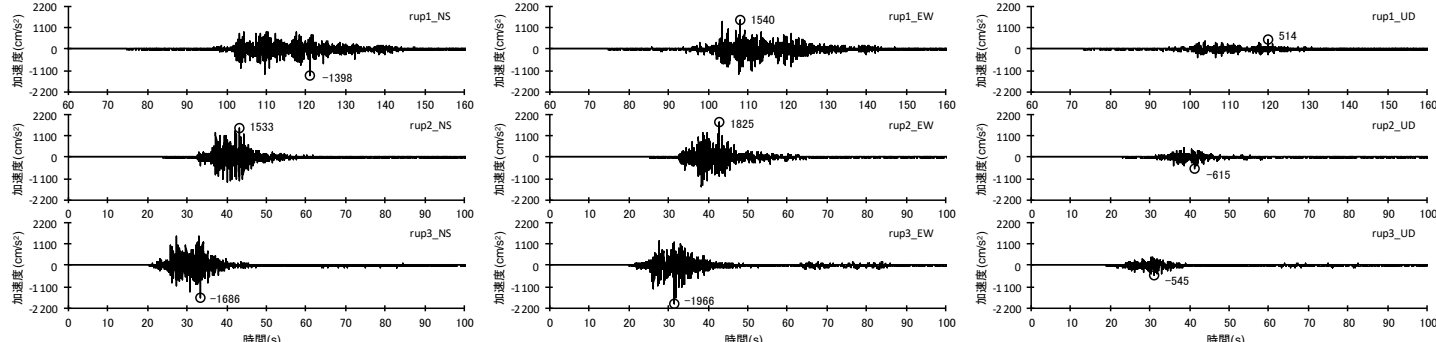
(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (断層モデルを用いた手法による地震動評価結果 (プレート間地震)))



(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①))



(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース②))



(強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価))

<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (加速度時刻歴波形) (破壊開始点1~3)>

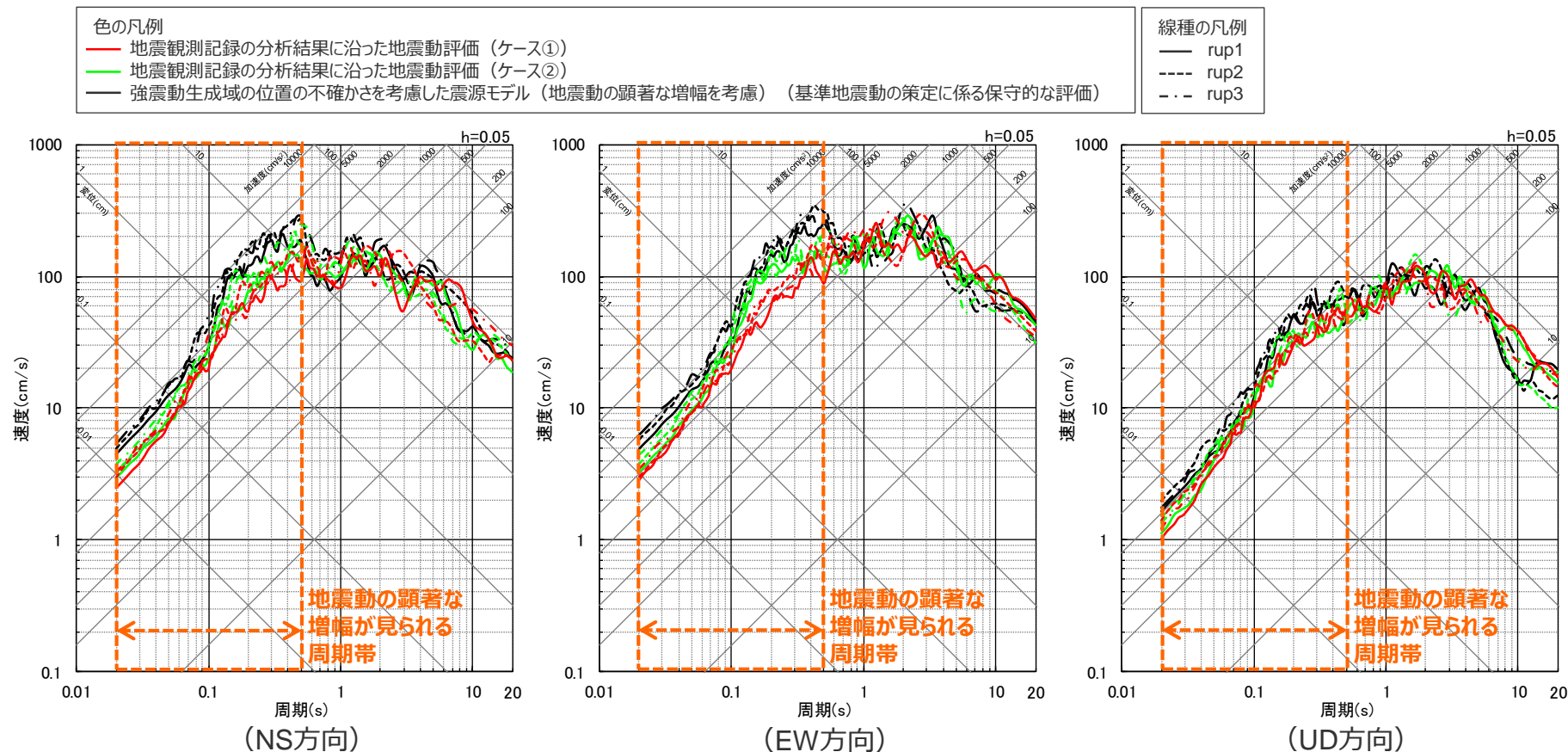
・統計的グリーン関数法による。

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (断層モデルを用いた手法による地震動評価結果 (プレート間地震)))

○プレート間地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録を踏まえて保守的に設定している強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の断層モデルを用いた手法による地震動評価結果は、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) よりも大きく保守的なものとなっている。



<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (応答スペクトル) (破壊開始点1~3) >

・統計的グリーン関数法による。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (三次元差分法による地震動評価結果との比較))

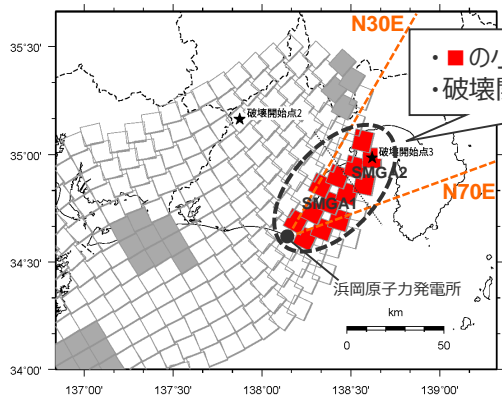
【浅部三次元地下構造モデルを用いた地震動評価結果との比較検討 (第194回審査会合で説明)】

○ **本反映方法 (グリーン関数に増幅係数を乗じる統計的グリーン関数法、増幅係数を保守的に一律設定)** について、敷地に及ぼす影響が大きいプレート間地震を対象に、地震動の顕著な増幅の要因であるS波低速度層を含む**三次元地下構造モデルを用いた差分法による地震動評価との比較**を行った。

対象震源 (プレート間地震)

	面積	地震モーメント	応力降下量
SMGA1	913km ²	5.1×10 ²⁰ Nm	45.4MPa
SMGA2	431km ²	1.2×10 ²⁰ Nm	33.9MPa

■ : 強震動生成域
■ : 地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域

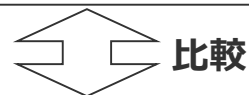


・ ■ の小断層 (13個)
・ 破壊開始点3を対象とする

<地震動の顕著な増幅を反映した震源モデル>

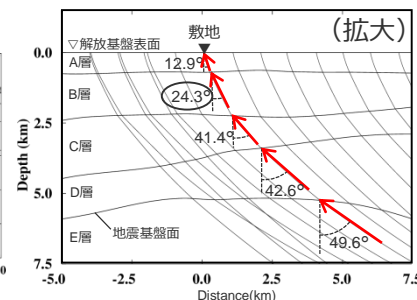
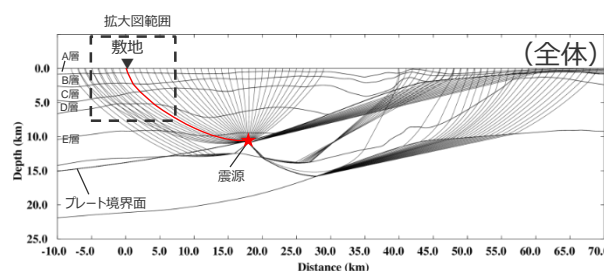
本反映方法を用いた地震動評価

統計的グリーン関数法において算定するグリーン関数 (解放基盤表面) に増幅係数を乗じることで、地震動の顕著な増幅を地震動評価へ反映。



浅部三次元地下構造モデルを用いた地震動評価

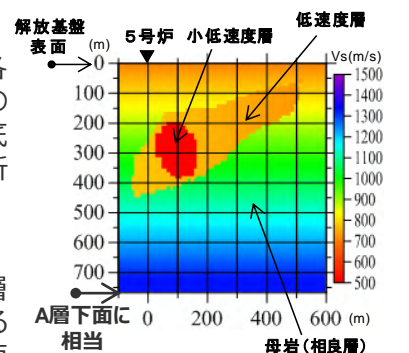
①各小断層 (13個) からA層下面 (浅部三次元地下構造モデルの底面に相当) へ到達する地震波の入射角をそれぞれ算出。



<小断層のレイトレーシング例 (左図: 全体、右図: 拡大)>

②統計的グリーン関数法を用いて、A層下面における各小断層 (13個) のグリーン関数を算出し、上記①の入射角を考慮して、浅部三次元地下構造モデルの底面へそれぞれ入射し、三次元有限差分法による解析を実施。

③このように評価した解放基盤表面における各小断層 (13個) のグリーン関数 (三次元有限差分法による各解析結果) を足し合わせることで、3~5号炉位置の地震動を評価。



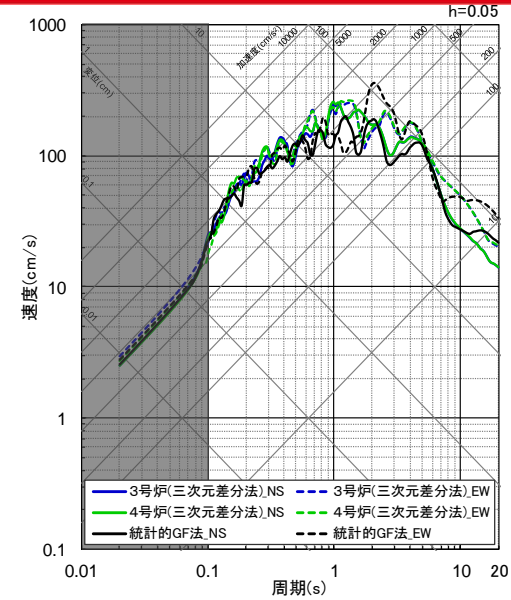
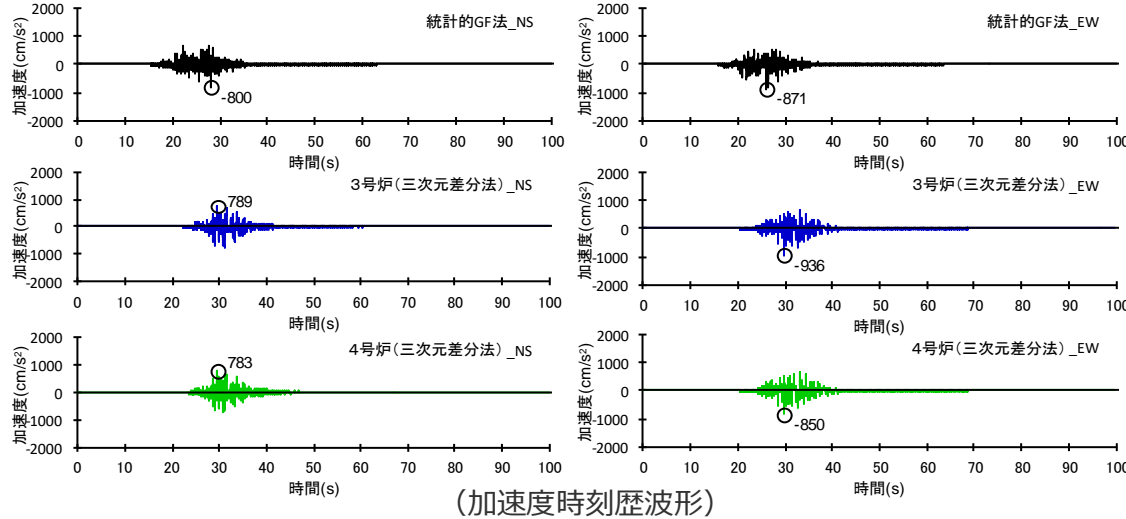
<浅部三次元地下構造モデル>

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

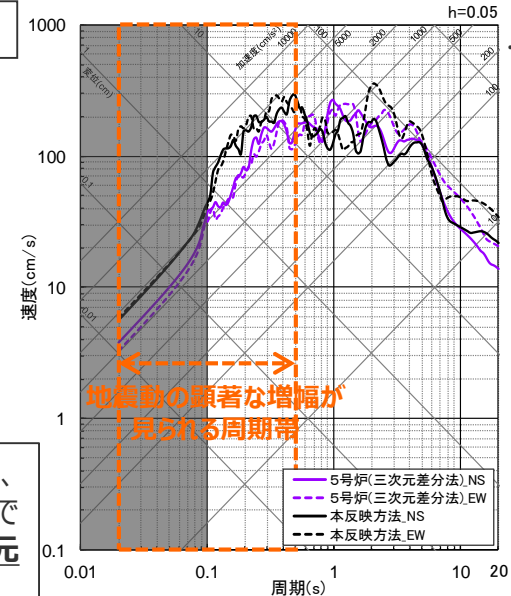
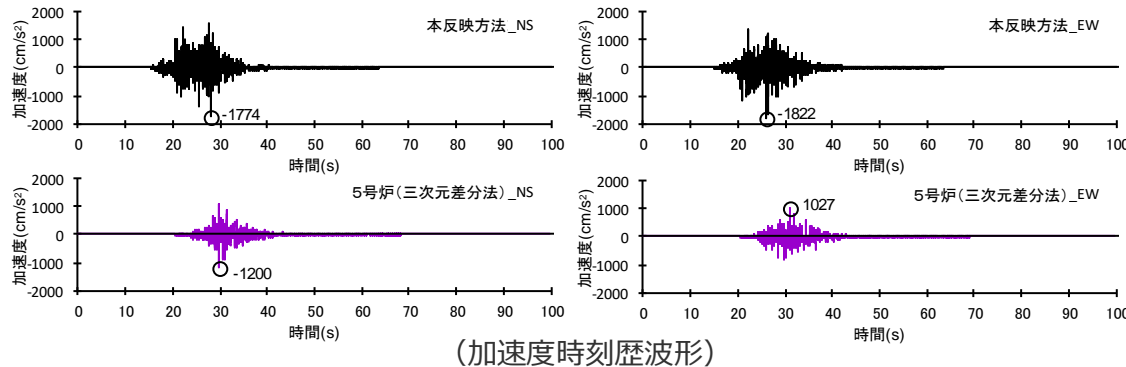
(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (三次元差分法による地震動評価結果との比較))

“統計的GF法”と“3, 4号炉 (三次元差分法)”との比較



・三次元差分法の対象周波数の上限は10Hzとし、統計的GF法及び三次元差分法の波形には10Hzハイカットフィルター(応答スペクトル図におけるグレーハッチングに相当)を施す。

“本反映方法 (グリーン関数に増幅係数を乗じる統計的GF法)”と“5号炉 (三次元差分法)”との比較



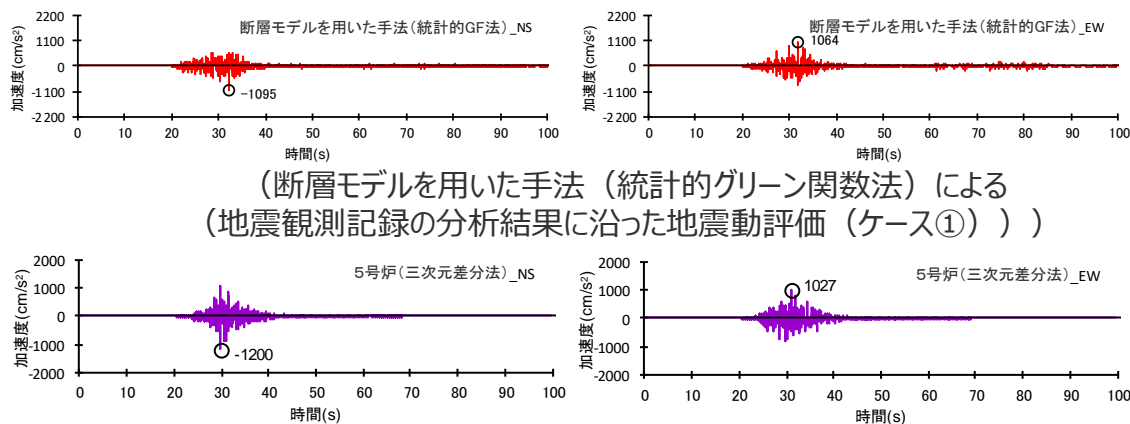
・三次元差分法の対象周波数の上限は10Hzとし、統計的GF法及び三次元差分法の波形には10Hzハイカットフィルター(応答スペクトル図におけるグレーハッチングに相当)を施す。

○本反映方法 (グリーン関数に増幅係数を乗じる統計的グリーン関数法) による地震動評価結果は、S波低速度層による影響を受けない3, 4号炉では三次元差分法による地震動評価結果と同程度であり、S波低速度層による影響を受ける5号炉では地震動の顕著な増幅が見られる周期帯で三次元差分法による地震動評価結果より大きいことを確認した。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果と三次元差分法による地震動評価結果との比較))

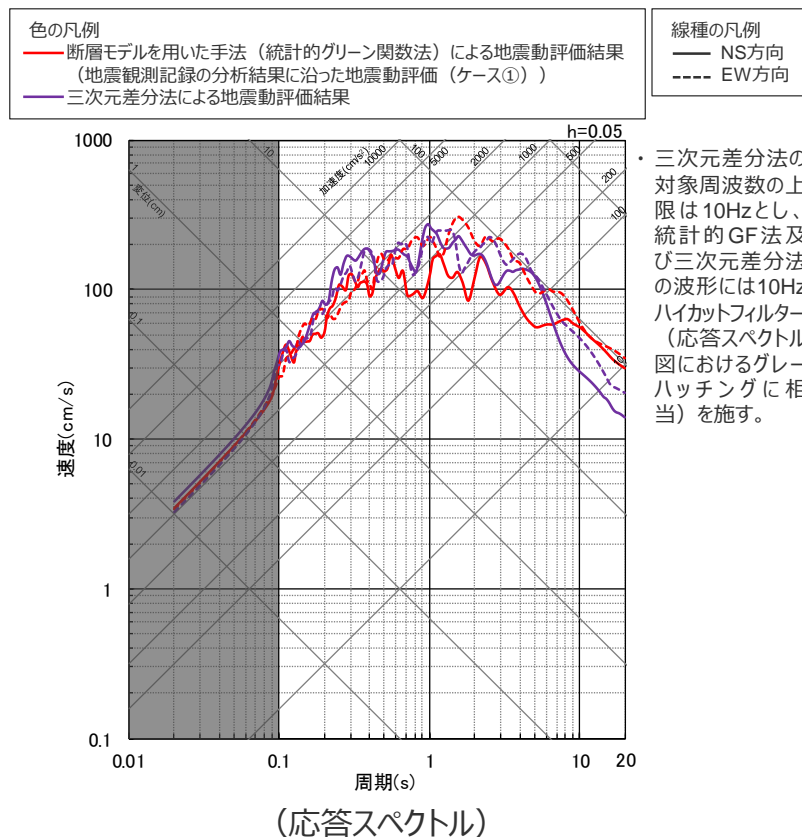
- 地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①) の断層モデルを用いた手法による地震動評価結果と前述のS波低速度層を含む三次元地下構造モデルを用いた差分法による地震動評価結果を比較した結果、両者の地震動レベルは概ね整合している。
- 地震動の顕著な増幅の要因であるS波低速度層を含む三次元地下構造モデルは観測記録の特徴を概ね再現可能な解析モデルであり、当該モデルを用いた差分法による地震動評価結果には、S波低速度層による三次元的な影響がそのまま反映されていることから、当該地震動評価結果と地震動レベルが同程度となっているケース①は地震観測記録の分析結果に沿った設定として合理的なものと考えられる。



(断層モデルを用いた手法 (統計的グリーン関数法) による
(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①)))

(三次元差分法による)

(加速度時刻歴波形)



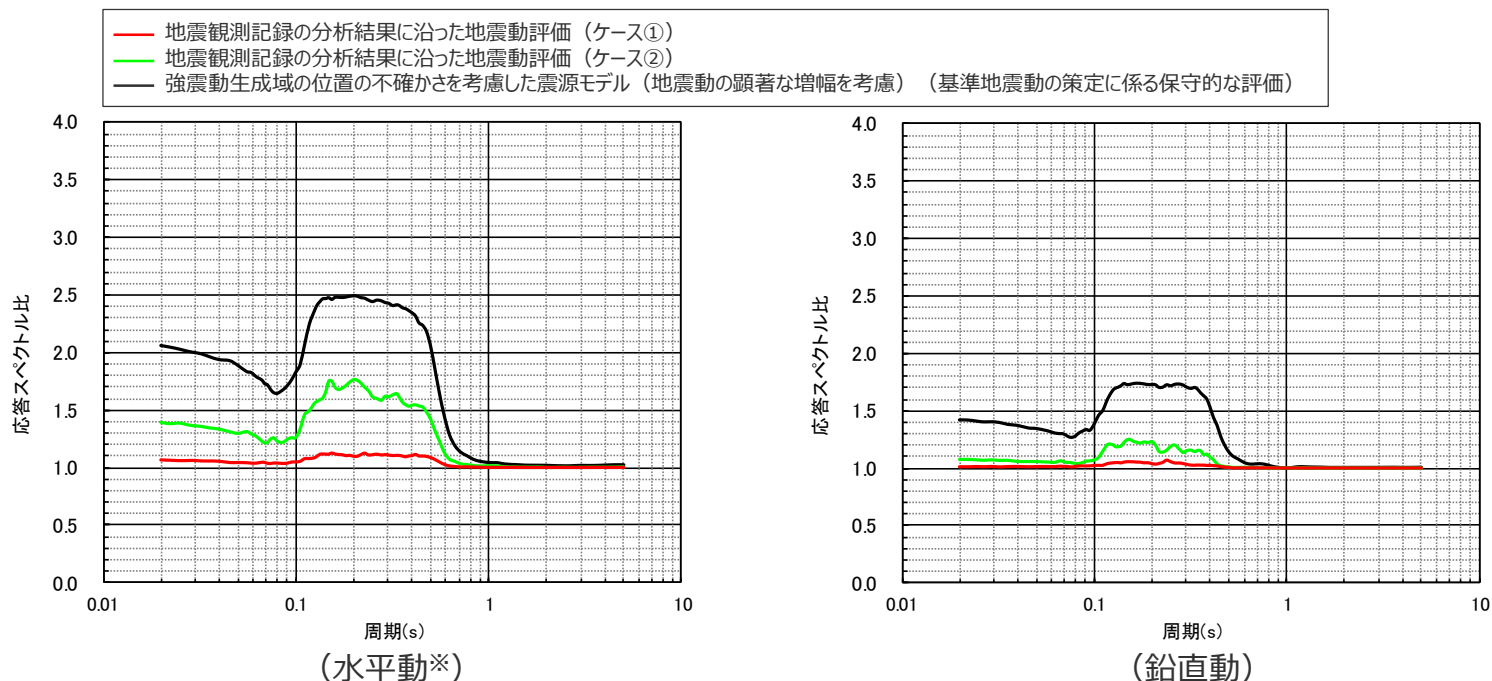
・三次元差分法の対象周波数の上限は10Hzとし、統計的GF法及び三次元差分法の波形には10Hzハイカットフィルター(応答スペクトル図におけるグレーハッチングに相当)を施す。

<断層モデルを用いた手法 (統計的グリーン関数法) による地震動評価結果と三次元差分法による地震動評価結果との比較>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (応答スペクトルに基づく地震動評価に用いる増幅係数 (応答スペクトル比) (プレート間地震)))

○プレート間地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定した強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の応答スペクトルに基づく地震動評価に用いる増幅係数 (応答スペクトル比) は、下図のとおり。



<応答スペクトルに基づく地震動評価への地震動の顕著な増幅の反映のために用いる増幅係数 (応答スペクトル比) の比較>

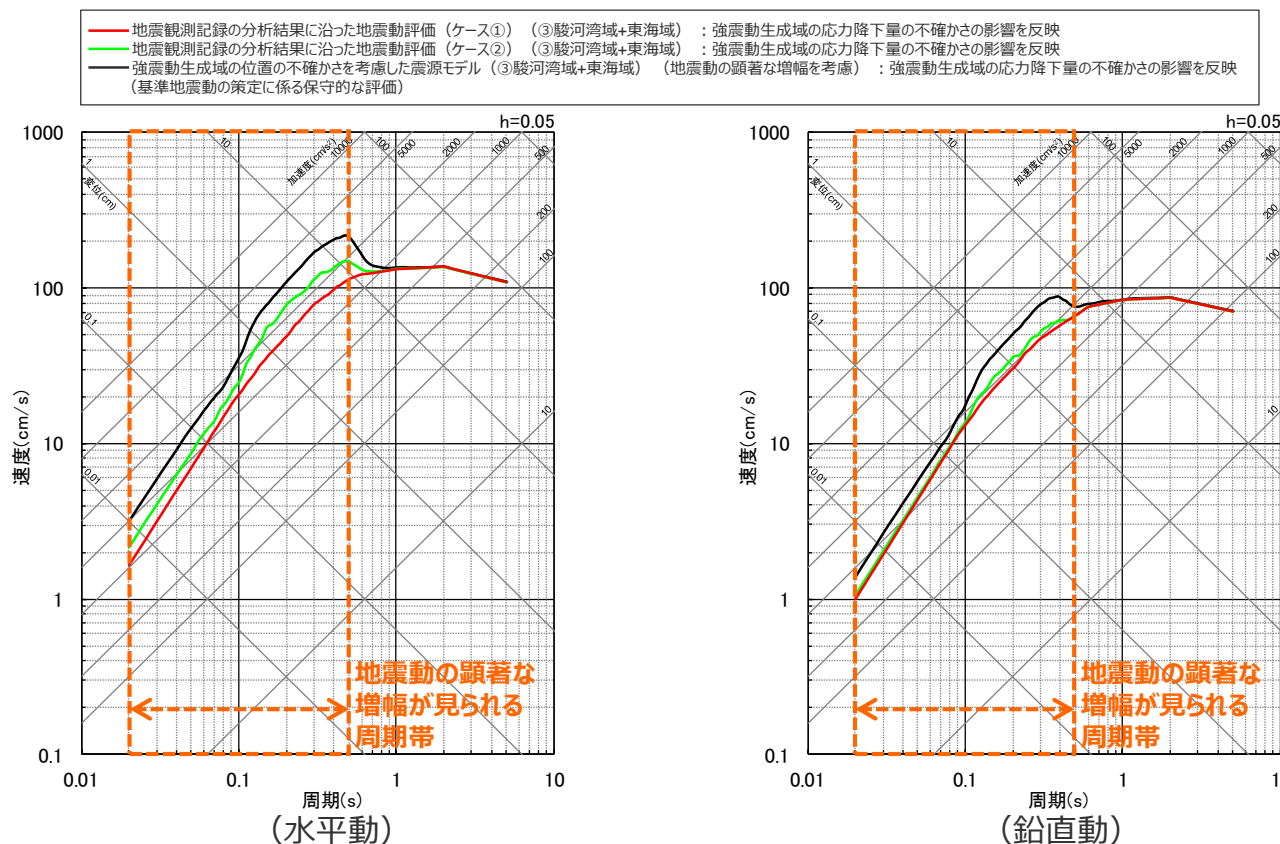
※ 水平動はNS方向とEW方向の平均。

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (応答スペクトルに基づく地震動評価 (プレート間地震)))

○プレート間地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定した強震動生成域の位置の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の応答スペクトルに基づく地震動評価結果は、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) よりも大きく保守的なものとなっている。



・各震源モデルの地震動評価結果として採用した (地震動レベルが最も大きい) 領域区分「③駿河湾域+東海域」。

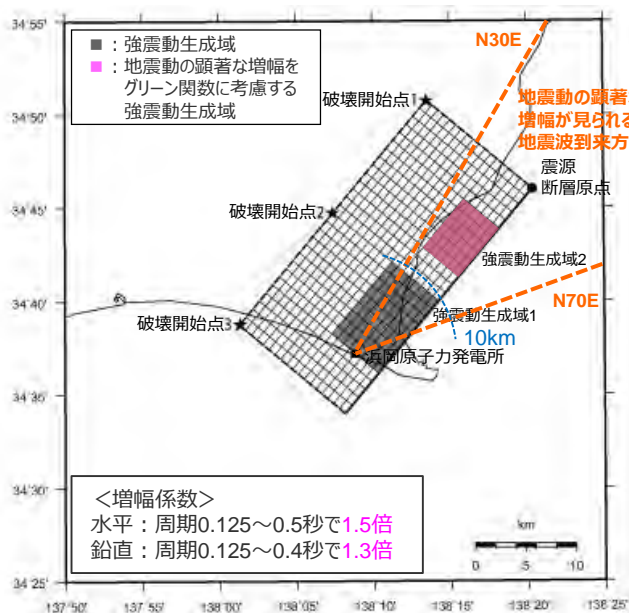
<応答スペクトルに基づく地震動評価結果の比較※>

※強震動生成域の応力降下量の不確かさの影響を反映した結果を代表で示す。

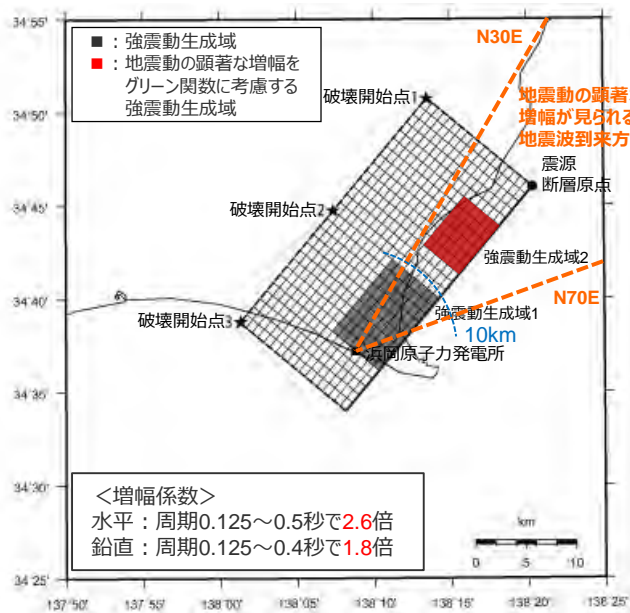
②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (海洋プレート内地震))

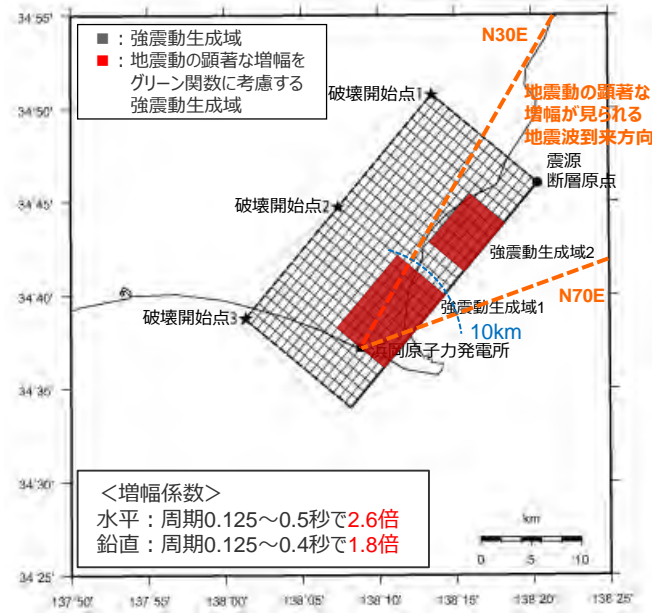
○海洋プレート内地震について、基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を代表に、地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価として、ケース① (増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に沿って設定) 及びケース② (増幅の範囲のみ地震観測記録の分析結果に沿って設定し、増幅の程度は地震観測記録の分析結果を踏まえて保守的に設定) の地震動評価を行い、地震観測記録の分析結果に対し保守的に行った地震動評価の結果に考慮された保守性を確認する。



<地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①)>



<地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース②)>



<基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価)>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (海洋プレート内地震))

<海洋プレート内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価) の震源断層パラメータ>

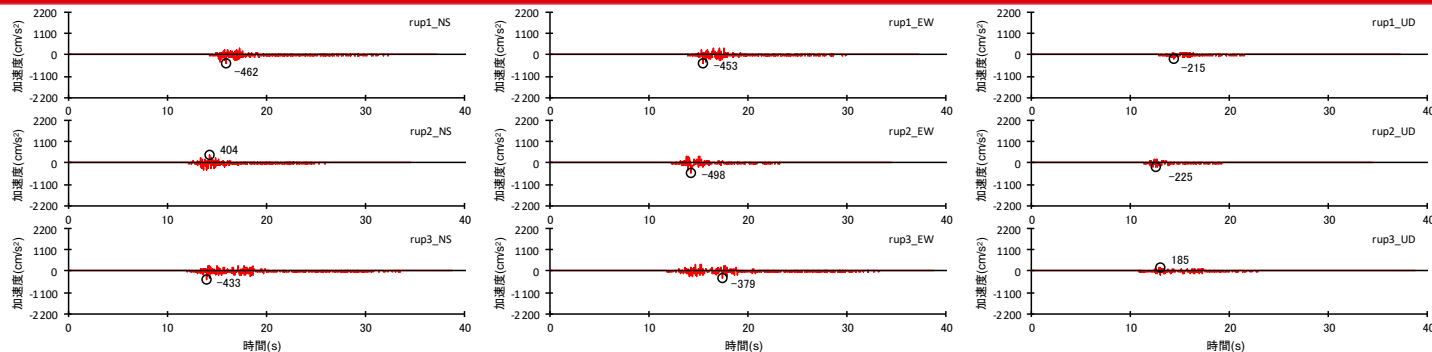
震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.766785度 東経138.33957度	強震動生成域	地震モーメント	2009年駿河湾の地震の M_0 - M_{0SMGA} 関係及びスケーリング則による	1.06E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	2009年駿河湾の地震の M_0 - S_{SMGA} 関係及びスケーリング則による	114.3 km ²
傾斜角	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	45 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = M_{0SMGA} / (\mu S_{SMGA})$	2.05 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi r_{SMGA} \beta^2)$, $r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	30.71 MPa
震源断層長さ	$L = (S/6)^{0.5} \times 3$	29.0 km	強震動生成域1	面積	$S_{SMGA1} = S_{SMGA} \times (2/3)$	76.2 km ²
震源断層幅	$W = (S/6)^{0.5} \times 2$	19.3 km		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA1}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	7.85E+18 Nm
震源断層面積	$S = M_0 / (\mu D)$	559.8 km ²		平均すべり量	$D_{SMGA1} = M_{0SMGA1} / (\mu \cdot S_{SMGA1})$	2.27 m
震源断層上端深さ	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	23 km	強震動生成域2	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA1} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa
地震モーメント	2009年駿河湾の地震 (鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{18}$ Nm) の32 ^{0.5} 倍	2.60E+19 Nm		面積	$S_{SMGA2} = S_{SMGA} \times (1/3)$	38.1 km ²
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	6.9		地震モーメント	$M_{0SMGA2} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA2}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	2.78E+18 Nm
気象庁マグニチュード	M_j : フィリピン海プレート(領域1)におけるスラブ内地震の最大規模等を踏まえ設定	7.0		平均すべり量	$D_{SMGA2} = M_{0SMGA2} / (\mu \cdot S_{SMGA2})$	1.61 m
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99 km/s, ρ : 2.85 g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²	背景領域	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA2} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa
平均すべり量	$D = D_{SMGA} / \gamma_D$, $\gamma_D = 2.0$	1.02 m		地震モーメント	$M_{0back} = M_0 \cdot M_{0SMGA}$	1.54E+19 Nm
平均応力降下量	$\Delta\sigma = (7/16) \cdot M_0 / (S/m)^{1.5}$	4.79 MPa		面積	$S_{back} = S - S_{SMGA}$	445.5 km ²
破壊伝播速度	V_f : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	0.76 m
短周期レベル	2009年駿河湾の地震の M_0 - A 関係及びスケーリング則による	3.71E+19 Nm/s ²	実効応力	実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA}$ $W_{SMGA} = (\pi)^{0.5} r_{SMGA} \Sigma \gamma_i^3$, $W_{back} = W$, $\gamma_i = r_{SMGA} / r_{SMGA}$, $r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	4.66 MPa
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz		・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$) に基づく。		

・ケース①及びケース②の震源断層パラメータは、基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) と同じである。

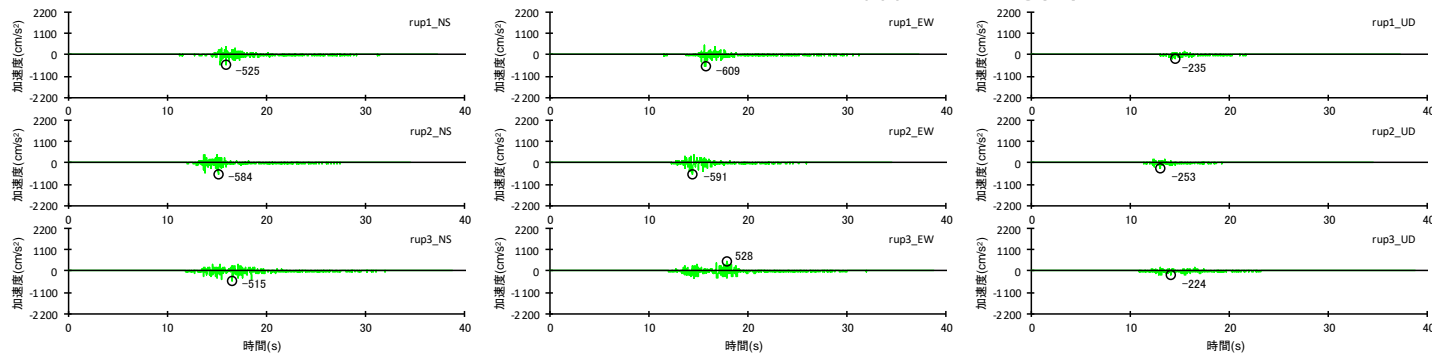
<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

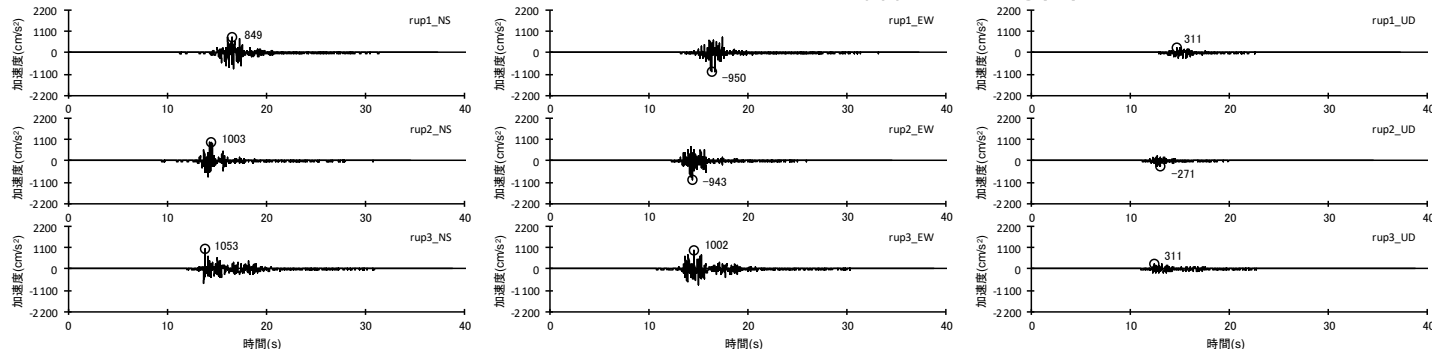
(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (断層モデルを用いた手法による地震動評価結果 (海洋プレート内地震)))



(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①))



(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース②))



(基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価))

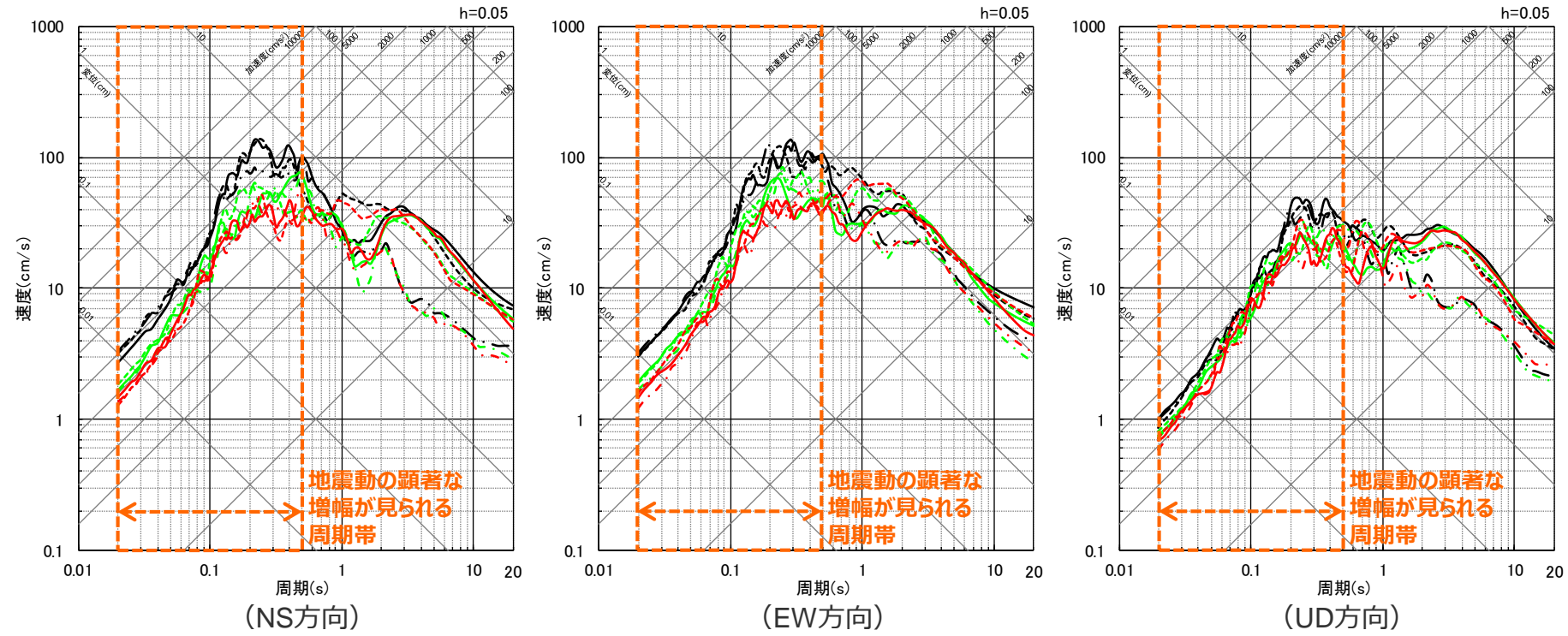
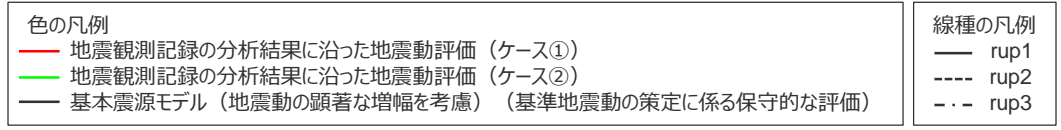
・統計的グリーン関数法による。 <断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (加速度時刻歴波形) (破壊開始点1~3)>

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (断層モデルを用いた手法による地震動評価結果 (海洋プレート内地震)))

○海洋プレート内地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定した基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の断層モデルを用いた手法による地震動評価結果は、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) よりも大きく保守的なものとなっている。



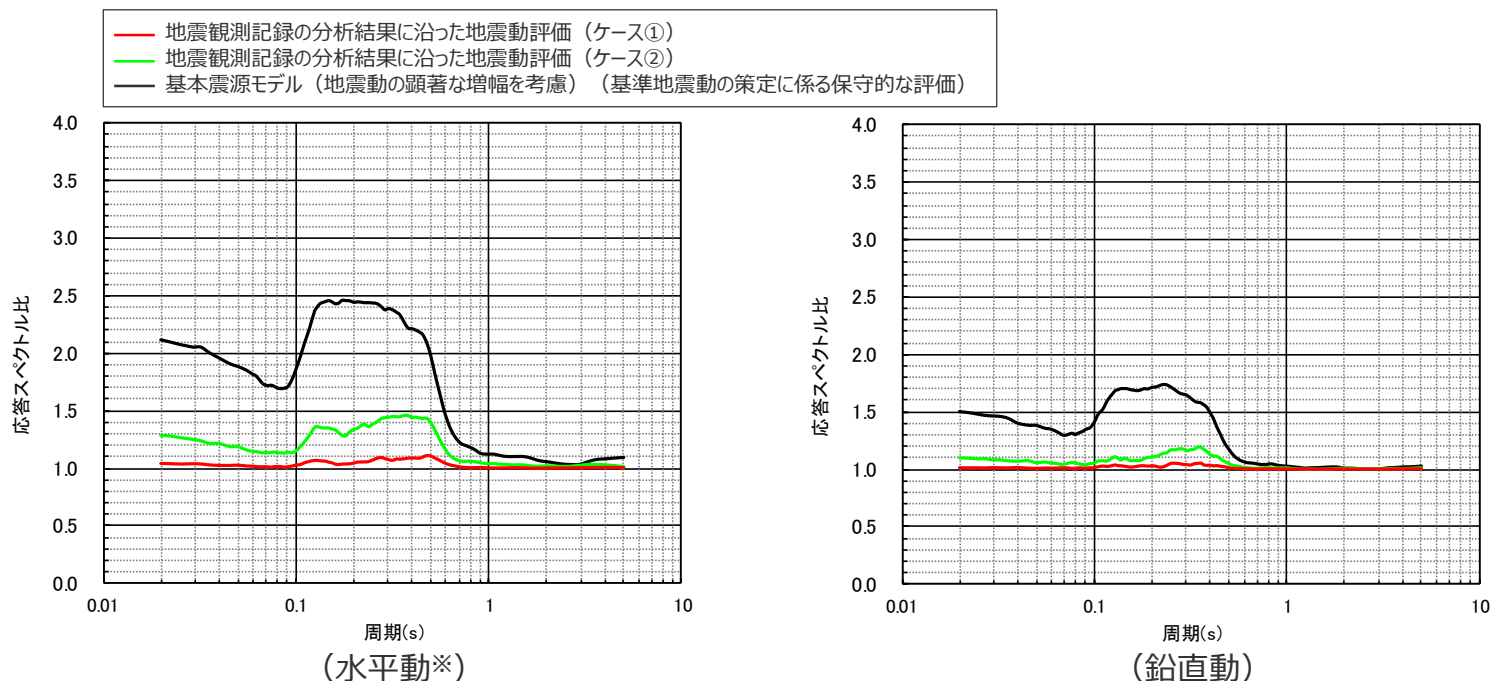
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (応答スペクトル) (破壊開始点1~3) >

・統計的グリーン関数法による。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (応答スペクトルに基づく地震動評価に用いる増幅係数 (応答スペクトル比) (海洋プレート内地震)))

○海洋プレート内地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定した基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の応答スペクトルに基づく地震動評価に用いる増幅係数 (応答スペクトル比) は、下図のとおり。



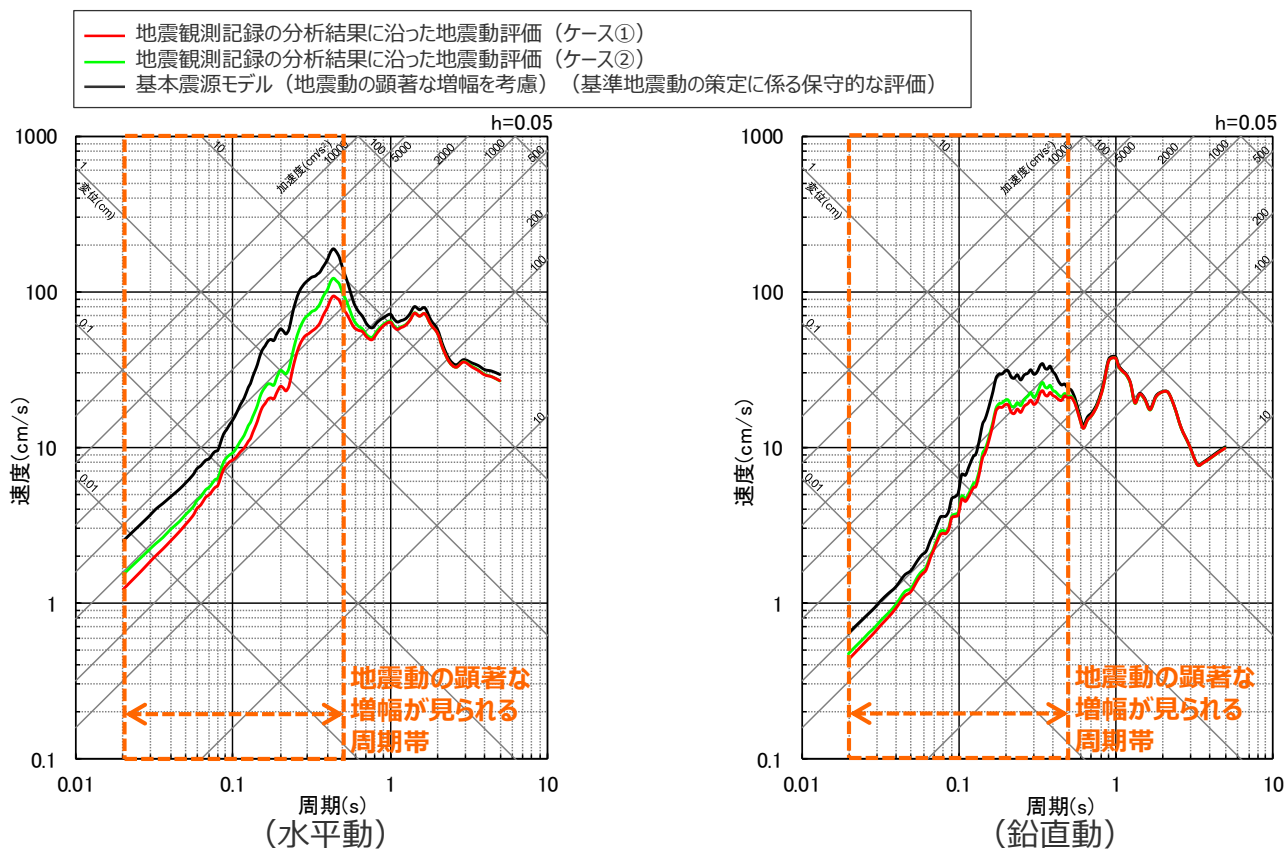
<応答スペクトルに基づく地震動評価への地震動の顕著な増幅の反映のために用いる増幅係数 (応答スペクトル比) の比較>

※ 水平動はNS方向とEW方向の平均。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (応答スペクトルに基づく地震動評価結果 (海洋プレート内地震)))

- 海洋プレート内地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定した基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の応答スペクトルに基づく地震動評価結果は、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) よりも大きく保守的なものとなっている。



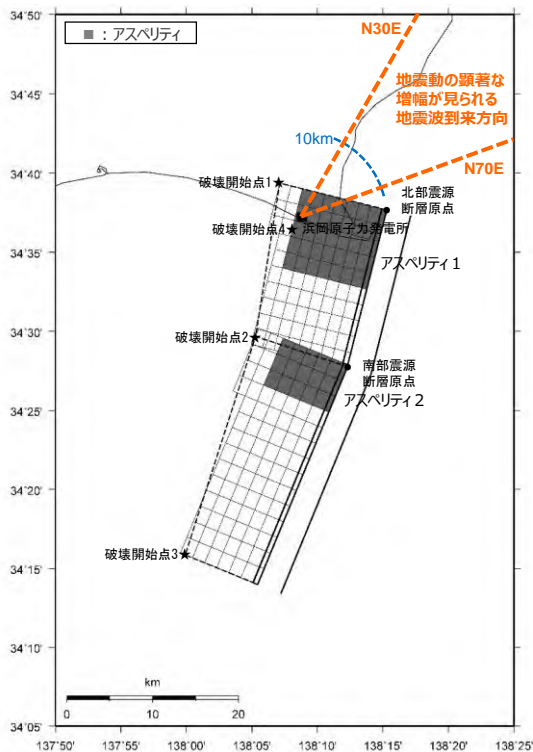
<応答スペクトルに基づく地震動評価結果の比較>

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

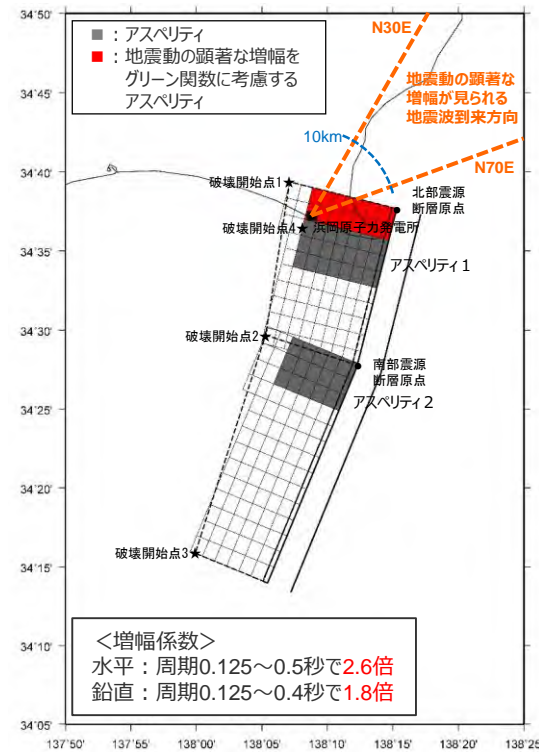
②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (内陸地殻内地震))

- 内陸地殻内地震について、基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) を代表に、地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価を行い、地震観測記録の分析結果に対し保守的に行った地震動評価の結果に考慮された保守性を確認する。
- なお、内陸地殻内地震 (御前崎海脚西部の断層帯による地震) の震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) では、地震動の顕著な増幅を考慮するアスペリティの小断層がすべて敷地近傍 (敷地から半径10km以内) に位置するため、地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価は、地震動の顕著な増幅を考慮しない地震動評価と同じとなる。



<地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) ※>



<基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価) >

※地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) は、地震動の顕著な増幅を考慮しない地震動評価と同じ。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (内陸地殻内地震))

<内陸地殻内地震の基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価) の震源断層パラメータ (御前崎海脚西部の断層帯による地震) >

震源断層パラメータ		設定方法	単位	設定値
震源断層原点 (北端)	北部	北緯(世界測地系)	-	34.62800°
		東経(世界測地系)	-	138.25486°
	南部	北緯(世界測地系)	-	34.46467°
		東経(世界測地系)	-	138.20581°
走向	北部	地質調査結果による	-	194.1°NE
	南部	同上	-	202.4°NE
断層傾斜角	GL-6km以浅	同上	°	60
	GL-6km以深	同上	°	35
ずれの種類	同上	-	-	逆断層
震源断層上端深さ	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層上端深さとの関係による	km	5.0	
震源断層下端深さ	北部	同上	km	13.5~14.6
	南部	同上	km	12.0~13.5
活断層長さ	北部	$L_{0.1}$:地質調査結果による	km	19.1
	南部	$L_{0.2}$:同上	km	27.8
震源断層長さ	北部	$L_{S.1}$:地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層上端深さとの関係による	km	18.9
	南部	$L_{S.2}$:同上	km	27.6
震源断層幅	北部(GL-6km以浅)	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層上端深さとの関係による	km	1.2
	北部(GL-6km以深)	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層下端深さとの関係による	km	13.1~15.0
	南部(GL-6km以浅)	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層上端深さとの関係による	km	1.2
	南部(GL-6km以深)	地質調査結果、断層傾斜角及び地震発生層下端深さとの関係による	km	10.5~13.1
震源断層面積	北部	S_1 :震源断層長さ及び震源断層幅による	km ²	281.51
	南部	S_2 :同上	km ²	353.63
震源断層面積	$S=S_1+S_2$	km ²	635.14	
等価半径	$R=(S/\pi)^{0.5}$	km	14.22	
地震モーメント	$M_0=(S/(4.24 \times 10^{-11}))^{2.0} / 10^7$ (入倉・三宅(2001))	Nm	2.24E+19	

震源断層パラメータ		設定方法	単位	設定値
気象庁マグニチュード		$M_j=(\log(L_{0.1}+L_{0.2})+2.9)/0.6$ (松田(1975))	-	7.6
		$M_j=(\log M_0-10.72)/1.17$ (武村(1990))	-	7.4
モーメントマグニチュード		$M_w=(\log M_0-9.1)/1.5$ (Kanamori(1977))	-	6.8
剛性率		$\mu=\rho\beta^2$ ($\beta:3.54\text{km/s}$, $\rho:2.76\text{g/cm}^3$ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	N/m ²	3.46E+10
平均すべり量		$D=M_0/(\mu S)$	m	1.02
平均応力降下量		$\Delta\sigma=(7/16)(M_0/R^3)$	MPa	3.42
短周期レベル		$A=2.46 \times 10^{10} \times (M_0 \times 10^7)^{1/3}$ (壇・他(2001))	Nm/s ²	1.49E+19
破壊伝播速度		$Vr=0.72\beta$ (Geller(1976))	km/s	2.55
f_{max}		中央防災会議(2004)による	Hz	6.0
アスベリティ全体	等価半径	$r_a=(7\pi M_0 \beta^2)/(4AR)$	km	7.27
	面積	$S_a=\pi r_a^2$	km ²	166.20
	平均すべり量	$D_a=2D$	m	2.043
	地震モーメント	$M_{0a}=\mu S_a D_a$	Nm	1.17E+19
	応力降下量	$\Delta\sigma_a=(7/16)M_0/(r_a^2 R)$	MPa	13.05
アスベリティ1	面積	$S_{a1}=(2/3) \times S_a$	km ²	110.80
	地震モーメント	$M_{0a1}=M_{0a} \times S_{a1}^{1.5}/(S_{a1}^{1.5}+S_{a2}^{1.5})$	Nm	8.68E+18
	平均すべり量	$D_{a1}=M_{0a1}/(\mu S_{a1})$	m	2.264
	応力降下量	$\Delta\sigma_{a1}=\Delta\sigma_a$	MPa	13.05
アスベリティ2	面積	$S_{a2}=(1/3) \times S_a$	km ²	55.40
	地震モーメント	$M_{0a2}=M_{0a} \times S_{a2}^{1.5}/(S_{a1}^{1.5}+S_{a2}^{1.5})$	Nm	3.07E+18
	平均すべり量	$D_{a2}=M_{0a2}/(\mu S_{a2})$	m	1.601
	応力降下量	$\Delta\sigma_{a2}=\Delta\sigma_a$	MPa	13.05
背景領域	面積	$S_b=S-S_a$	km ²	468.94
	地震モーメント	$M_{0b}=M_0-M_{0a}$	Nm	1.07E+19
	平均すべり量	$D_b=M_{0b}/(\mu S_b)$	m	0.659
	実効応力	$\sigma_b=0.2\Delta\sigma_a$	MPa	2.61

・ケース①及びケース②※の震源断層パラメータは、基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) と同じである。

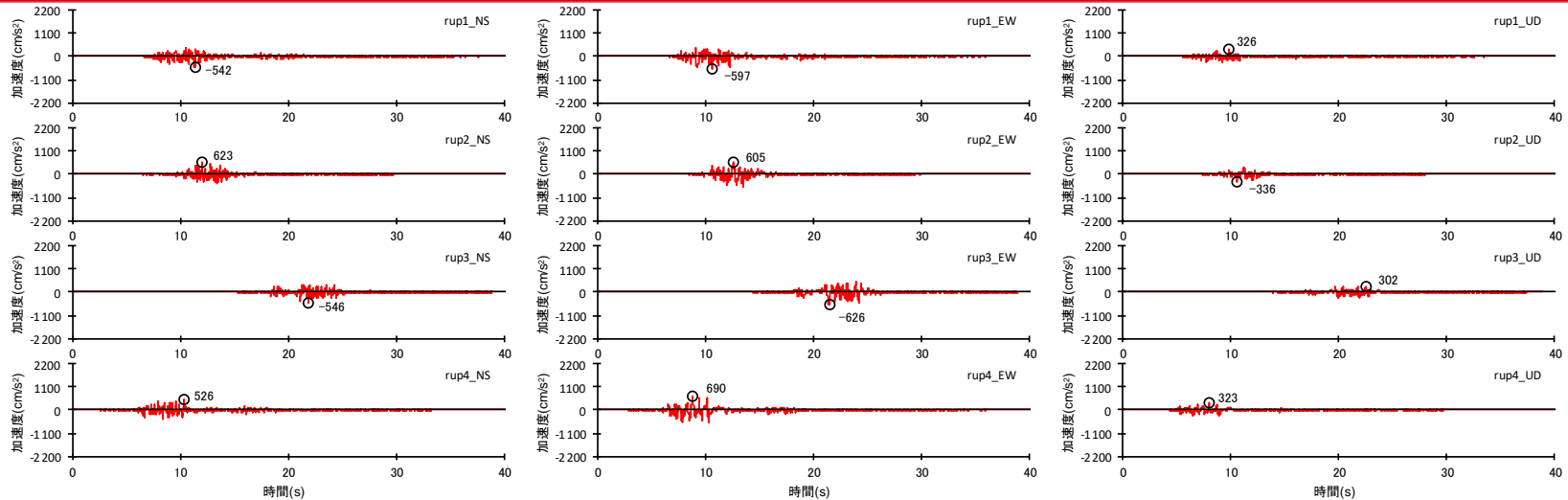
※地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) は、地震動の顕著な増幅を考慮しない地震動評価と同じ。

・アスベリティの短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A=4\pi r_a \Delta\sigma_a \beta^2$) に基づく。

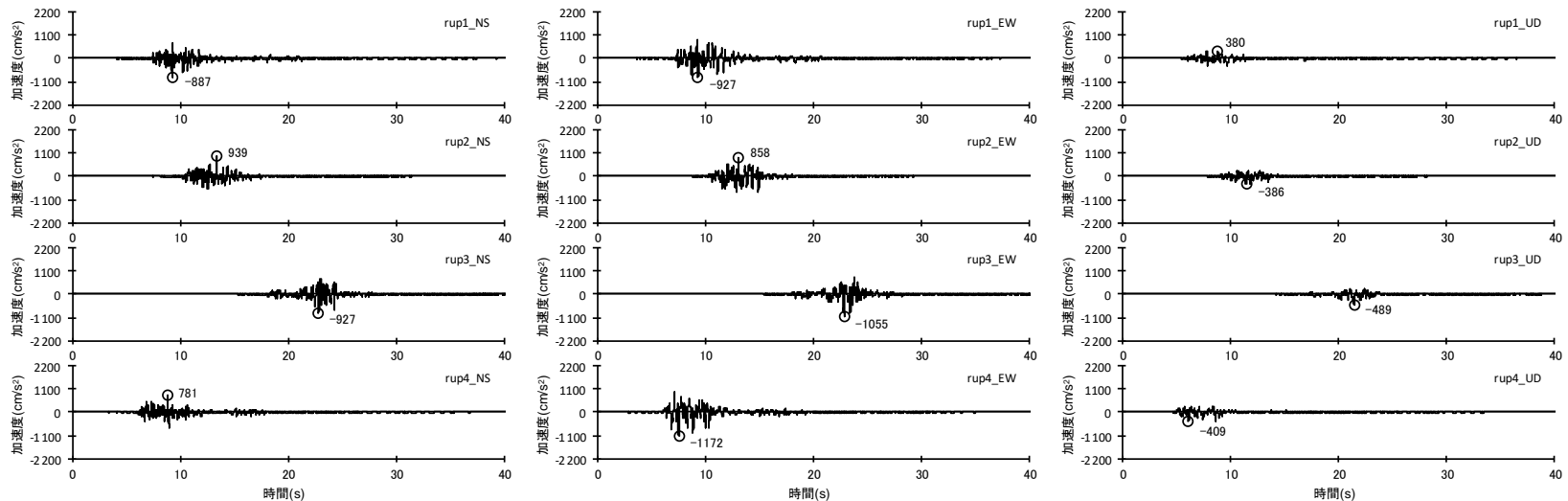
<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (断層モデルを用いた手法による地震動評価結果 (内陸地殻内地震)))



(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) ※)



(基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (基準地震動の策定に係る保守的な評価))

・統計的グリーン関数法による。 <断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (加速度時刻歴波形) (破壊開始点1~4)>

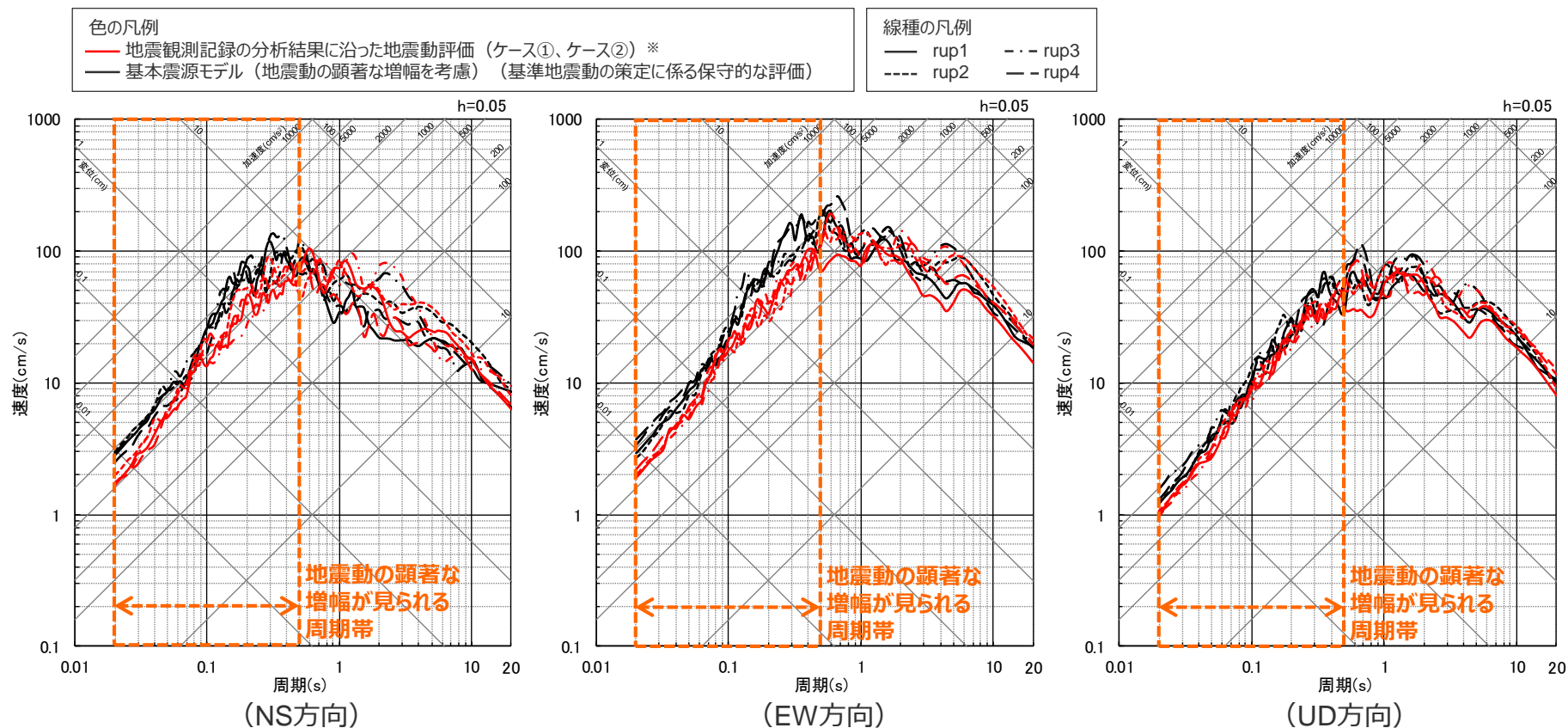
※地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) は、地震動の顕著な増幅を考慮しない地震動評価と同じ。

<補足説明資料③-41 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価の結果の妥当性の確認>

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (断層モデルを用いた手法による地震動評価結果 (内陸地殻内地震)))

○内陸地殻内地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定した基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の断層モデルを用いた手法による地震動評価結果は、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) ※よりも大きく保守的なものとなっている。



<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (応答スペクトル) (破壊開始点1~4)>

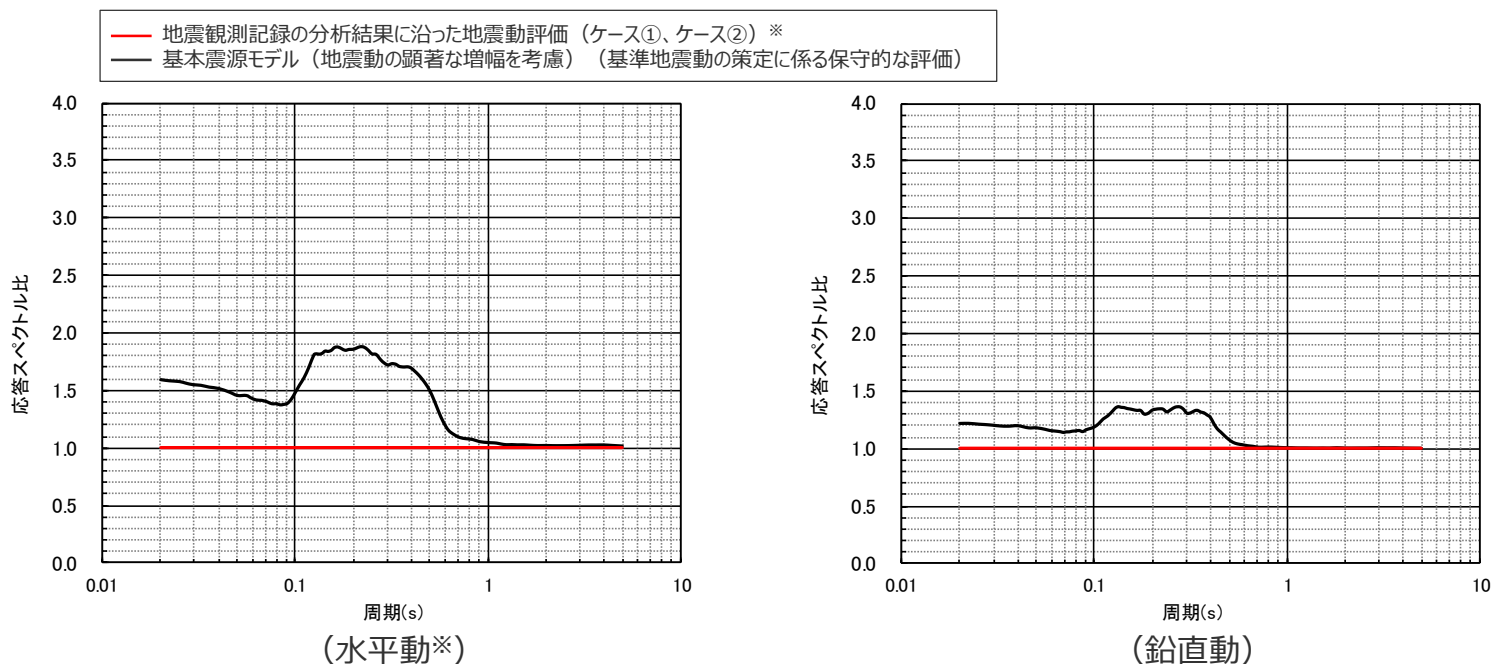
・統計的グリーン関数法による。

※地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) は、地震動の顕著な増幅を考慮しない地震動評価と同じ。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (応答スペクトルに基づく地震動評価に用いる増幅係数 (応答スペクトル比) (内陸地殻内地震)))

○内陸地殻内地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定した基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の応答スペクトルに基づく地震動評価に用いる増幅係数 (応答スペクトル比) は、下図のとおり。



<応答スペクトルに基づく地震動評価への地震動の顕著な増幅の反映のために用いる増幅係数 (応答スペクトル比) の比較>

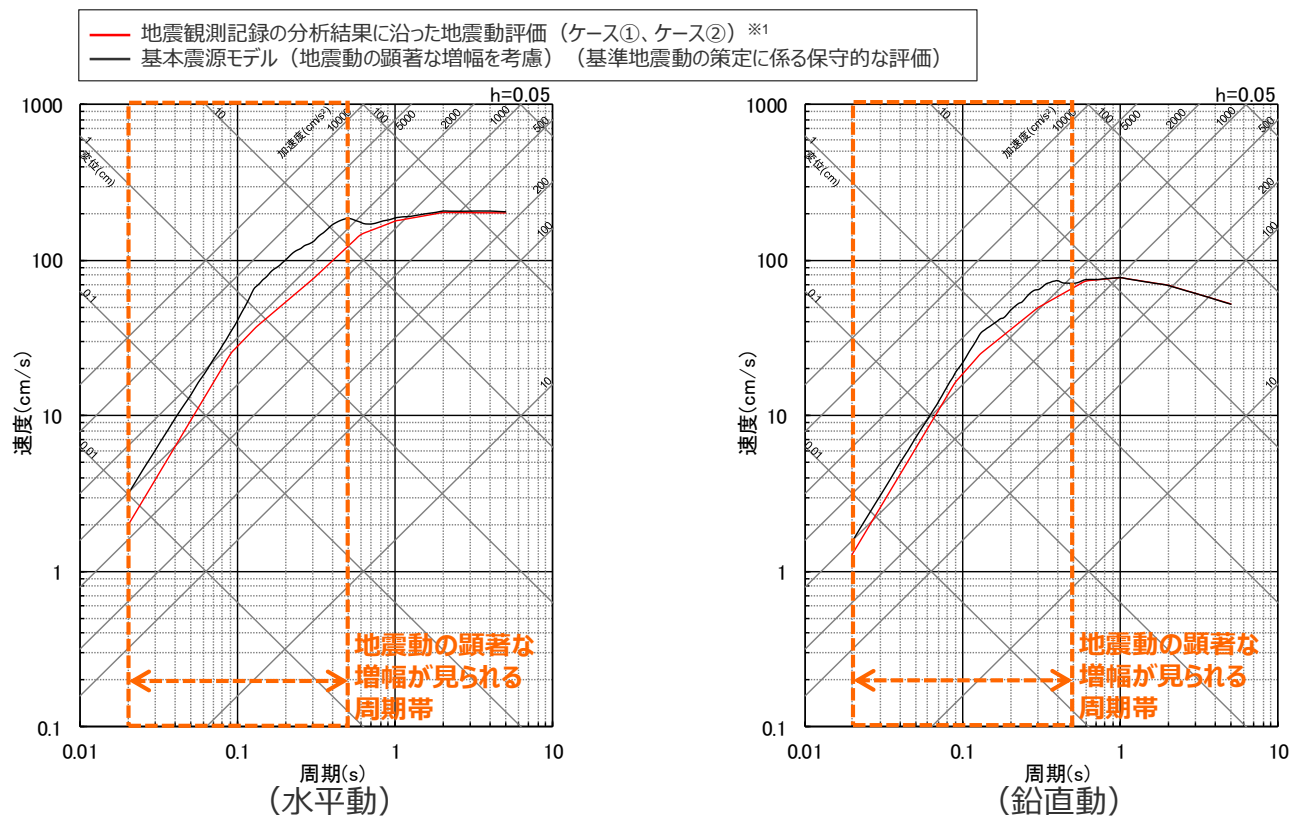
※ 水平動はNS方向とEW方向の平均。

※地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) は、地震動の顕著な増幅を考慮しない地震動評価と同じ。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価結果との比較 (応答スペクトルに基づく地震動評価結果 (内陸地殻内地震)))

- 内陸地殻内地震について、増幅の範囲及び増幅の程度を地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定した基本震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) の応答スペクトルに基づく地震動評価結果は、地震動の顕著な増幅が見られる周期帯 (周期0.5秒以下) において、地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) ※1よりも大きく、保守的なものとなっている。



<応答スペクトルに基づく地震動評価結果の比較※2>

- ※1 地震観測記録の分析結果に沿った地震動評価 (ケース①、ケース②) は、地震動の顕著な増幅を考慮しない地震動評価と同じ。
- ※2 武村(1990)により地震規模を算出した場合の評価結果を例示。

- 以上より、いずれの検討用地震 (地震動の顕著な増幅を考慮) も、保守的に行った検討用地震 (地震動の顕著な増幅を考慮) の地震動評価結果は、地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価結果より大きくなっており、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域 (アスぺリティ) の小断層の範囲・増幅の程度を保守的に設定することにより、地震観測記録の分析結果に対し保守的な地震動評価結果となっていることを確認した。

②地震動評価結果に考慮された保守性の確認

(まとめ)

【検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価】

○ 各検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価は、断層モデルを用いた手法において、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲・増幅の程度を**地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定**することにより、**保守的な地震動評価**を行う。応答スペクトルに基づく手法は、断層モデルを用いた手法による保守的な地震動評価結果を反映することにより、保守的な地震動評価を行う。

【② 地震動評価結果に考慮された保守性の確認】

○ 各地震タイプ（内陸地殻内地震、プレート間地震、海洋プレート内地震）の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価及び応答スペクトルに基づく地震動評価について、敷地近傍は地震動の顕著な増幅が見られないなどの地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価を行い、地震観測記録の分析結果に対し保守的に行った地震動評価の結果に考慮された保守性を分析する。

⇒ その結果、いずれの検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）も、保守的に行った検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価結果は、地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価結果より大きくなっており、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲・増幅の程度を保守的に設定することにより、地震観測記録の分析結果に対し保守的な地震動評価結果となっていることを確認した。

項目	地震観測記録の分析結果等	地震観測記録の分析結果に沿った評価（ケース①）	地震観測記録の分析結果に沿った評価（ケース②）	比較	基準地震動の策定に係る保守的な評価
地震動の顕著な増幅の範囲（震源位置）	<ul style="list-style-type: none"> 特定の到来方向（N30E～N70E、「増幅方向」）の地震波のみ顕著な増幅が見られる。 「増幅方向」でも地震波の入射角が鉛直に近づく敷地近傍は顕著な増幅が見られない。 	<ul style="list-style-type: none"> 強震動生成域（アスペリティ）を「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲を、地震観測記録の分析結果における「増幅方向と同程度とし、敷地近傍を含めずに設定（地震観測記録の分析結果に沿った評価） 	<ul style="list-style-type: none"> 強震動生成域（アスペリティ）を「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲を、地震観測記録の分析結果における「増幅方向と同程度とし、敷地近傍を含めずに設定（地震観測記録の分析結果に沿った評価） 		
地震動の顕著な増幅の程度（特性）	<ul style="list-style-type: none"> 特定の短周期の周期帯（フーリエスペクトルの周期0.2～0.5秒）で地震動の顕著な増幅が見られる。 「増幅方向」でも増幅の程度は一樣でなく、2009年駿河湾の地震（本震）は最も大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> 強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法を採用（背景領域に増幅係数は考慮せず） 増幅係数は、増幅の程度を「増幅方向」の地震の観測記録の平均値にして地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに適用（地震観測記録の分析結果に沿った評価） 	<ul style="list-style-type: none"> 強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法を採用（背景領域に増幅係数は考慮せず） 増幅係数は、増幅の程度が最も大きい2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現性を確認したものを地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに適用（保守的な評価） 		<ul style="list-style-type: none"> 強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法を採用（背景領域に増幅係数は考慮せず） 増幅係数は、増幅の程度が最も大きい2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現性を確認したものを地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに適用（保守的な評価）

まとめ

【地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価】

- 地震観測記録の分析結果で確認された地震動の顕著な増幅の特性を的確に反映するため、この敷地固有の地盤増幅特性を詳細に考慮できる**断層モデルを用いた手法を重視し、2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討により検証した方法**（「増幅方向」に位置する強震動生成域の各小断層からの地震動（グリーン関数）に増幅係数を乗じる方法）を用いて、地震動の顕著な増幅を反映する。応答ベクトルに基づく手法は、断層モデルを用いた手法による地震動評価結果を用いて応答スペクトルに与える影響を求めて反映する。
- 各検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価は、断層モデルを用いた手法において、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲・増幅の程度を**地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定**することにより、**保守的な地震動評価**を行う。応答スペクトルに基づく手法は、断層モデルを用いた手法による保守的な地震動評価結果を反映することにより、保守的な地震動評価を行う。

項目	地震観測記録の分析結果等	2009年駿河湾の地震（本震）の再現検討	基準地震動の策定に係る保守的な評価
地震動の顕著な増幅の範囲（震源位置）	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の到来方向（N30E～N70E、「増幅方向」）の地震波のみ顕著な増幅が見られる。 ・「増幅方向」でも地震波の入射角が鉛直に近づく敷地近傍は顕著な増幅が見られない。 	<p>—</p> <p>（震源断層面が「増幅方向」の範囲内に位置するため強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数の全てに増幅係数を考慮）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）を「増幅方向」の敷地近傍に配置したうえで、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲を、地震観測記録の分析結果における「増幅方向」より広くし、敷地近傍も含めて設定（保守的な評価）
地震動の顕著な増幅の程度（特性）	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の短周期の周期帯（フーリエスペクトルの周期0.2～0.5秒）で地震動の顕著な増幅が見られる。 ・「増幅方向」でも増幅の程度は一様でなく、2009年駿河湾の地震（本震）は最も大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に周期0.2～0.5秒のみ増幅させる増幅係数を乗じる方法を採用 ・増幅係数における増幅の程度は、その程度が最も大きい2009年駿河湾の地震（本震）を対象に、増幅を考慮するグリーン関数の波形合成結果の5号炉観測記録の再現性を確認して設定 	<ul style="list-style-type: none"> ・左記と同じ強震動生成域（アスペリティ）の小断層のグリーン関数に増幅係数を乗じる方法（背景領域に増幅係数は考慮せず）を採用 ・増幅係数は、左記と同じ増幅の程度が最も大きい2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現性を確認したものを地震動の顕著な増幅を考慮する小断層の全てに一律適用（保守的な評価）

【地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価結果の妥当性の確認】

【① 地震動評価結果に反映された地震動の顕著な増幅の分析】

- 検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価の結果について、まず、「2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討と同じ増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の小断層のみによる地震動（波形合成結果）」の影響を確認する。また、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層の影響を確認する。⇒地震動の顕著な増幅が見られる周期帯（周期0.5秒程度以下）の地震動評価結果について、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層の影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域による影響が支配的であることを確認した。
- その上で、上記の「増幅係数を乗じる強震動生成域（アスペリティ）の小断層のみによる地震動（波形合成結果）」について、2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討で確認した地震動の顕著な増幅と同じ特性が反映されていることを確認する。⇒2009年駿河湾の地震（本震）の観測記録の再現検討で確認した地震動の顕著な増幅と同じ特性が反映されていることを確認した。

【② 地震動評価結果に考慮された保守性の確認】

- 各検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価及び応答スペクトルに基づく地震動評価について、敷地近傍は地震動の顕著な増幅が見られないなどの地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価結果との比較を行い、地震観測記録の分析結果に対し地震動の顕著な増幅が保守的に考慮された地震動評価結果となっていることを確認する。⇒地震観測記録の分析結果に対し保守的な地震動評価結果となっていることを確認した。

補足説明資料③-42

「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価

方針・概要

【検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価（補足説明資料①-12参照）】

- 各検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価は、**地震動の顕著な増幅が見られた短周期の地震動への影響が支配的な強震動生成域（アスペリティ）に着目し**、断層モデルを用いた手法において、敷地近傍に強震動生成域（アスペリティ）を配置したうえで、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲・増幅の程度を**地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定することにより、保守的な地震動評価**を行う。応答スペクトルに基づく手法は、断層モデルを用いた手法による保守的な地震動評価結果を反映することにより、保守的な地震動評価を行う。

【地震動評価結果に考慮された保守性の確認（補足説明資料③-41参照）】

- 各地震タイプ（内陸地殻内地震、プレート間地震、海洋プレート内地震）の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価及び応答スペクトルに基づく地震動評価について、**敷地近傍は地震動の顕著な増幅が見られないなどの地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価を行い、地震観測記録の分析結果に対し保守的な地震動評価結果となっていることを確認した。**

【「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認（補足説明資料③-41参照）】

- 「増幅方向」に背景領域の小断層が位置するプレート間地震及び海洋プレート内地震の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）を対象に、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層のグリーン関数にも増幅係数を乗じた場合の影響確認を行い、**「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域による影響が支配的であることを確認した。**

【第940・992回審査会合におけるコメントを踏まえた対応（次ページ参照）】

- 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価では、上記のとおり、地震動の顕著な増幅が見られた短周期の地震動への影響が支配的な強震動生成域（アスペリティ）に着目した保守的な設定を行っており、検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価結果は、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層に増幅係数を乗じる乗じないにかかわらず、十分保守的な評価結果と考えられる。
- しかしながら、第940・992回審査会合におけるコメントを踏まえ、**海洋プレート内地震の地震動評価結果については、より慎重に保守的な評価を行い、全ての震源モデルに対して、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価結果を採用することとする。**

<補足説明資料③-42「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>

第940・992回審査会合におけるコメントを踏まえた対応（概要）

【第940回審査会合におけるコメント】

- 基準地震動に選定されるものは少し慎重に判断したいと考えている。海洋プレート内地震の地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価については、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合の影響がフーリエスペクトル比で若干ではあるが見られる。そこで、海洋プレート内地震について、プレート間地震などの他の地震動評価結果に包絡されるのであれば必要ないが、基準地震動に選定される地震動であれば、より安全側に「増幅方向」に位置する背景領域にも増幅係数を乗じたものを採用していただきたい。

【第992回審査会合におけるコメント】

- 第992回審査会合資料1-1のp.62を見ると、海洋プレート内地震の地震動評価結果は他のタイプの地震動評価結果を一部周期帯で上回るものがあるので、海洋プレート内地震の全ての震源モデルに対して「増幅方向」に位置する背景領域にも増幅係数を乗じる地震動評価結果を採用していただきたい。



【第940・992回審査会合におけるコメントを踏まえた対応】

- 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価では、前述のとおり、地震動の顕著な増幅が見られた短周期の地震動への影響が支配的な強震動生成域（アスペリティ）に着目した保守的な設定を行っており、検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価結果は、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層に増幅係数を乗じる乗じないにかかわらず、十分保守的な評価結果と考えられる。
- しかしながら、第940・992回審査会合におけるコメントを踏まえ、**海洋プレート内地震の地震動評価結果については、より慎重に保守的な評価を行い、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価結果を採用することとする。**

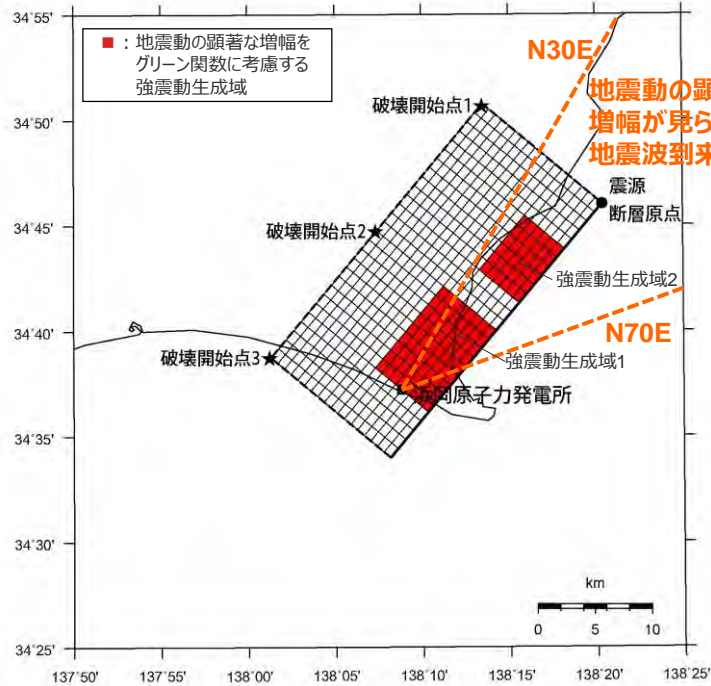


【第940・992回審査会合におけるコメントを踏まえた地震動評価】

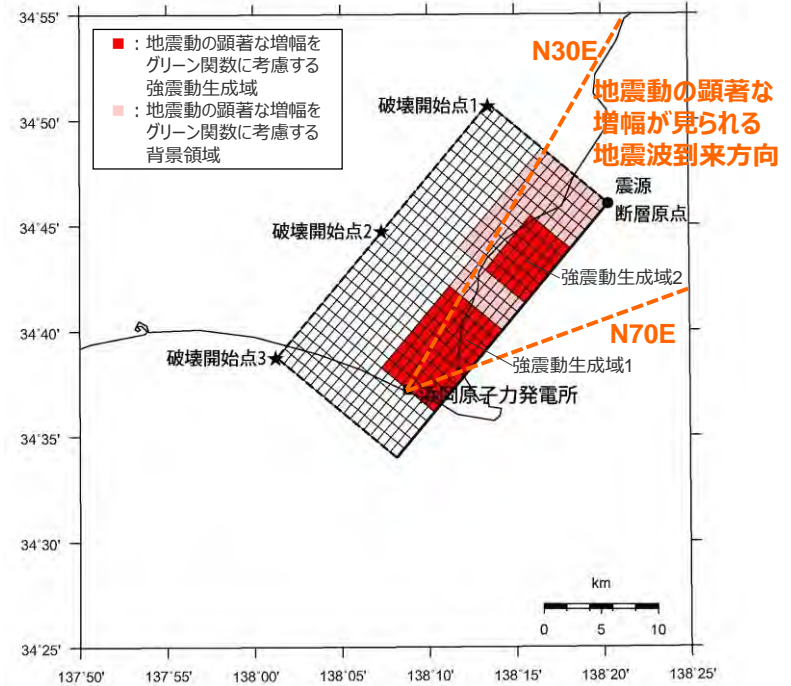
- 以降では、海洋プレート内地震は、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層のグリーン関数にも増幅係数を乗じた場合の影響が応答スペクトル比ではほぼ見られないものの、フーリエスペクトル比では詳細に見るとごくわずかに見られることを踏まえ、海洋プレート内地震の全ての震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）について、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる断層モデルを用いた手法による地震動評価を行う。

基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）

（震源モデル）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

<基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）>

基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）

（震源断層パラメータ）

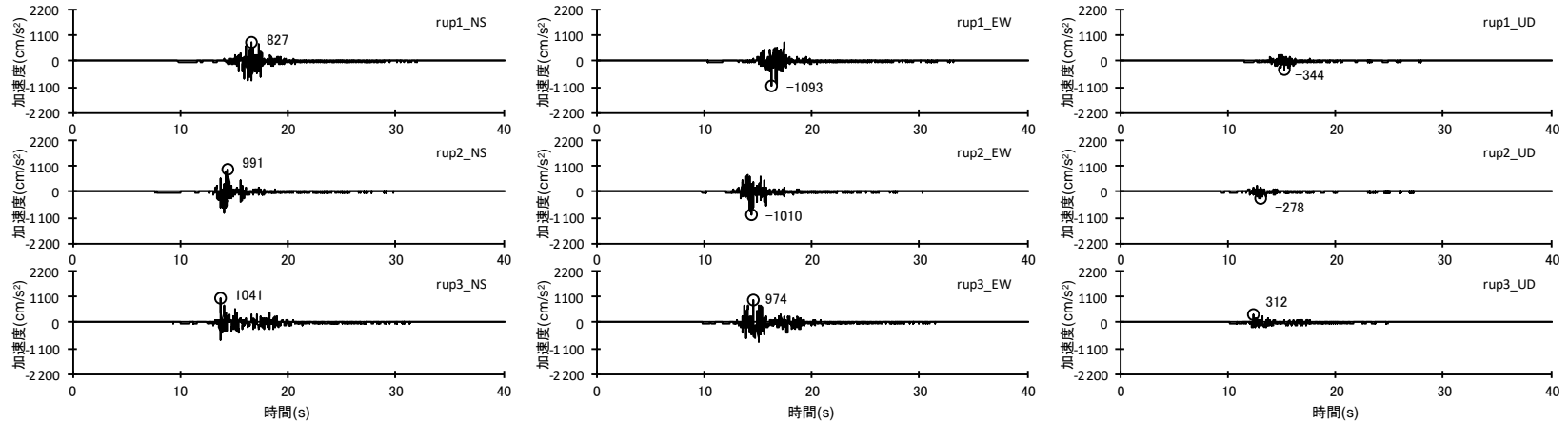
<基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）の震源断層パラメータ>

震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.766785度 東経138.339557度	強震動生成域	地震モーメント	2009年駿河湾の地震の M_0 - M_{0SMGA} 関係及びスケーリング則による	1.06E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	2009年駿河湾の地震の M_0 - S_{SMGA} 関係及びスケーリング則による	114.3 km ²
傾斜角	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	45 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = M_{0SMGA} / (\mu S_{SMGA})$	2.05 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi r_{SMGA} \beta^2)$, $r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	30.71 MPa
震源断層長さ	$L = (S/6)^{0.5} \times 3$	29.0 km	強震動生成域1	面積	$S_{SMGA1} = S_{SMGA} \times (2/3)$	76.2 km ²
震源断層幅	$W = (S/6)^{0.5} \times 2$	19.3 km		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA1}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	7.85E+18 Nm
震源断層面積	$S = M_0 / (\mu D)$	559.8 km ²		平均すべり量	$D_{SMGA1} = M_{0SMGA1} / (\mu \cdot S_{SMGA1})$	2.27 m
震源断層上端深さ	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	23 km	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA1} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa	
地震モーメント	2009年駿河湾の地震（鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{18}$ Nm)の32 ^{0.5} 倍	2.60E+19 Nm	強震動生成域2	面積	$S_{SMGA2} = S_{SMGA} \times (1/3)$	38.1 km ²
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	6.9		地震モーメント	$M_{0SMGA2} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA2}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	2.78E+18 Nm
気象庁マグニチュード	M_j : フィリピン海プレート(領域1)におけるスラブ内地震の最大規模等を踏まえ設定	7.0		平均すべり量	$D_{SMGA2} = M_{0SMGA2} / (\mu \cdot S_{SMGA2})$	1.61 m
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99 km/s, ρ : 2.85 g/cm ³ (地下構造調査結果等)に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA2} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa	
平均すべり量	$D = D_{SMGA} / \gamma_D$, $\gamma_D = 2.0$	1.02 m	背景領域	地震モーメント	$M_{0back} = M_0 - M_{0SMGA}$	1.54E+19 Nm
平均応力降下量	$\Delta\sigma = (7/16) \cdot M_0 / (S/m)^{1.5}$	4.79 MPa		面積	$S_{back} = S - S_{SMGA}$	445.5 km ²
破壊伝播速度	V_r : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	0.76 m
短周期レベル	2009年駿河湾の地震の M_0 - A 関係及びスケーリング則による	3.71E+19 Nm/s ²		実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA}$ $W_{SMGA} = (\pi)^{0.5} r_{SMGA} \Sigma \gamma_i^3$, $W_{back} = W$, $\gamma_i = r_{SMGA} / r_{SMGA}$, $r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	4.66 MPa
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz	<ul style="list-style-type: none"> ・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$) に基づく。 			

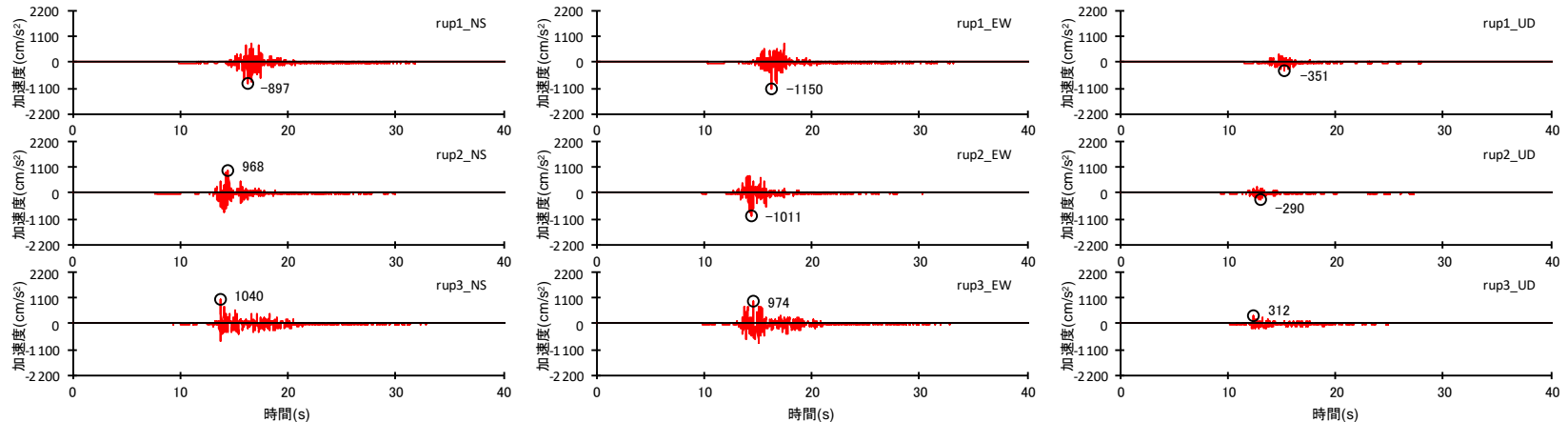
・「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合で震源断層パラメータは同じ。

基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）

（地震動評価結果）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）



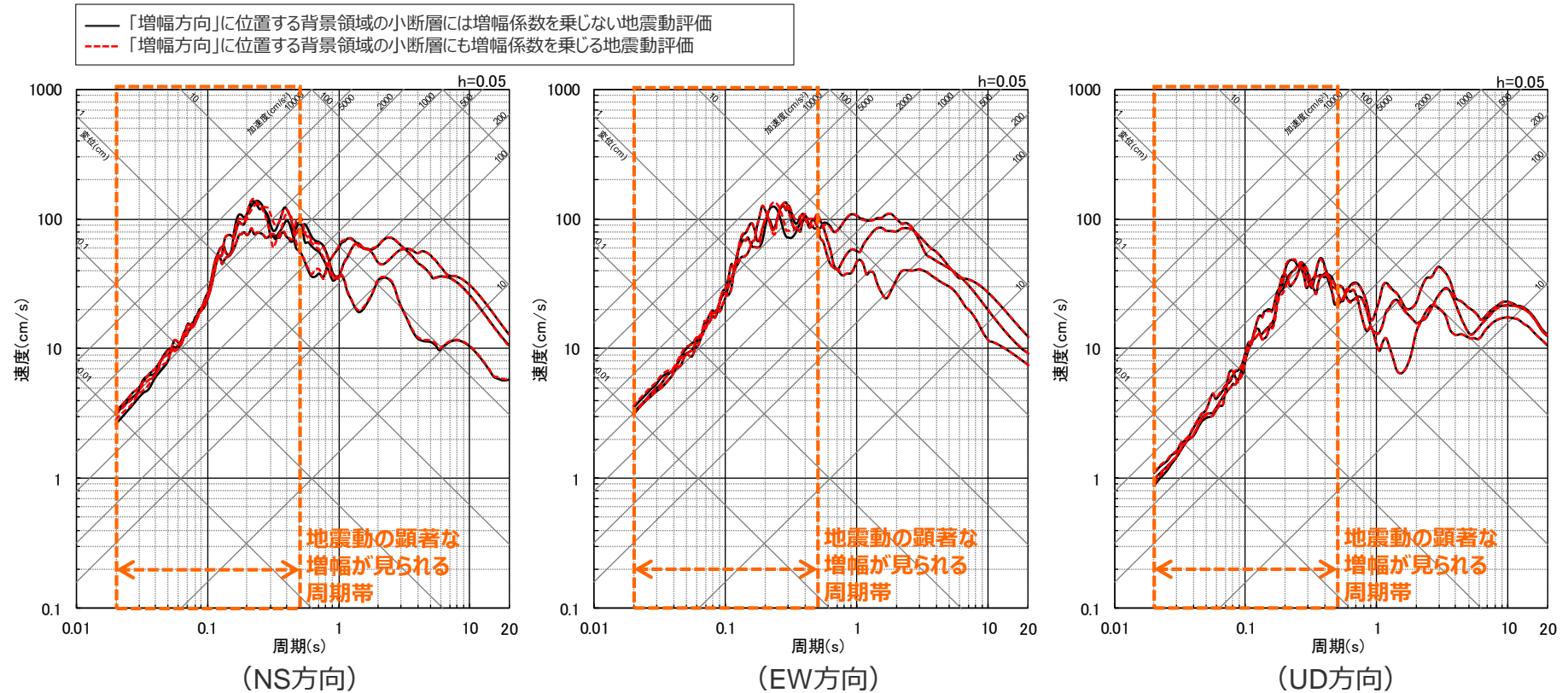
（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

＜断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（加速度時刻歴波形）（破壊開始点1～3）＞
（基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震））

・統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）

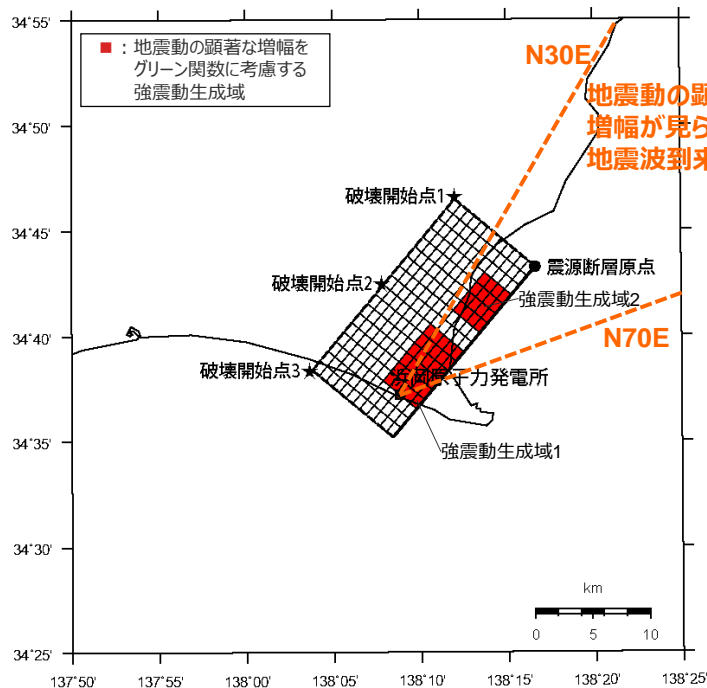
（地震動評価結果）



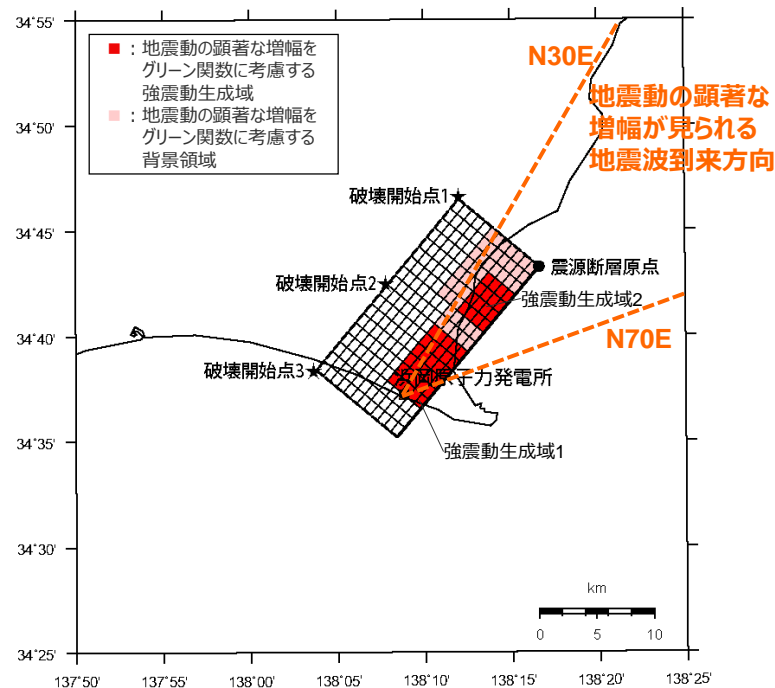
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（擬似速度応答スペクトル）（破壊開始点1〜3）>
（基本震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震））

・ 統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
短周期レベルの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
 （震源モデル）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

<短周期レベルの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）>

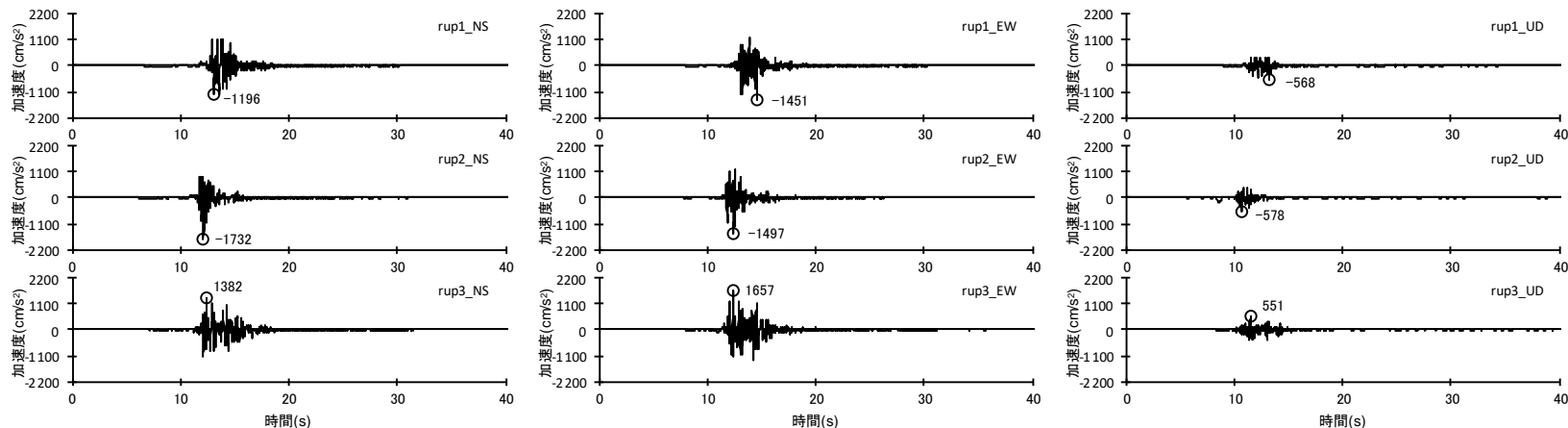
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
短周期レベルの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
 （震源断層パラメータ）

<短周期レベルの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）の震源断層パラメータ>
 （笹谷・他(2006)に基づく）

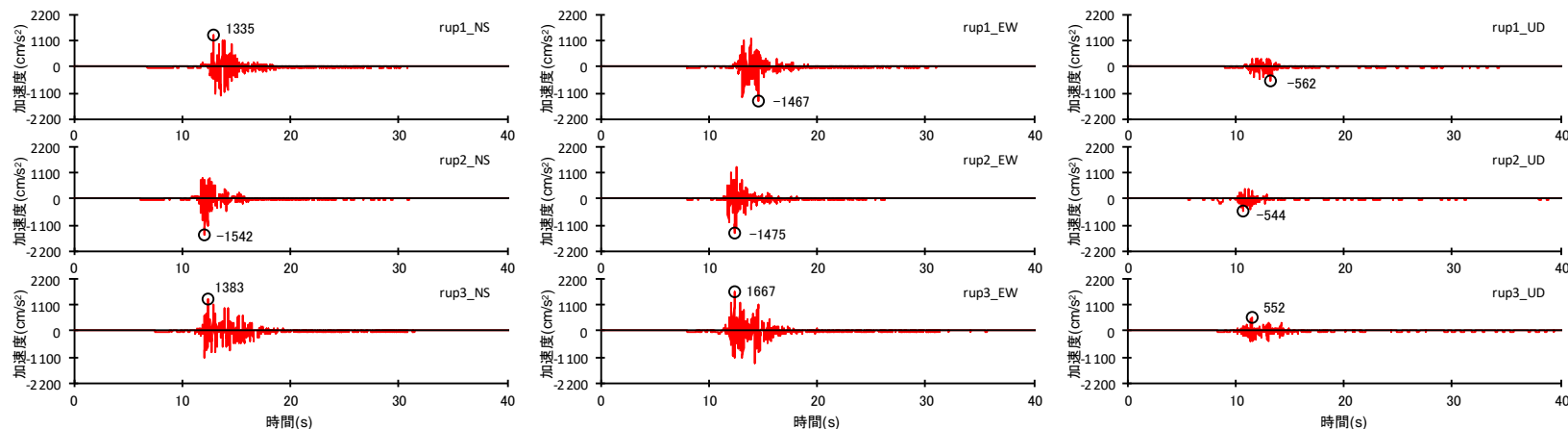
震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.721057度 東経138.276965度	強震動生成域	地震モーメント	$M_{0SMGA} = \mu S_{SMGA} D_{SMGA}$	1.04E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	$S_{SMGA} = 1.25 \times 10^{-16} \times M_0^{2/3} [\text{dyne-cm}]$ (笹谷・他(2006)の M_0 - S_{SMGA} 関係)	50.9 km ²
傾斜角	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	45 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = \gamma_D D$, $\gamma_D = 2.0$	4.50 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi\beta^2) / (S_{SMGA}/\pi)^{0.5}$	77.98 MPa
震源断層長さ	$L = (S/6)^{0.5} \times 3$	19.5 km	強震動生成域1	面積	$S_{SMGA1} = S_{SMGA} \times (2/3)$	33.97 km ²
震源断層幅	$W = (S/6)^{0.5} \times 2$	13.0 km		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA1}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	7.69E+18 Nm
震源断層面積	$S = (49/16) M_0^2 \beta^4 \pi^4 / (S_{SMGA} A^2)$	254.6 km ²		平均すべり量	$D_{SMGA1} = M_{0SMGA1} / (\mu \cdot S_{SMGA1})$	4.99 m
震源断層上端深さ	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	23 km	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA1} = \Delta\sigma_{SMGA}$	77.98 MPa	
地震モーメント	2009年駿河湾の地震(鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{18}$ Nm) の32 ^{0.5} 倍	2.60E+19 Nm	強震動生成域2	面積	$S_{SMGA2} = S_{SMGA} \times (1/3)$	16.98 km ²
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	6.9		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA2}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	2.72E+18 Nm
気象庁マグニチュード	M_j : フィリピン海プレート(領域1)におけるスラブ内地震の最大規模等を踏まえ設定	7.0		平均すべり量	$D_{SMGA2} = M_{0SMGA2} / (\mu \cdot S_{SMGA2})$	3.53 m
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99km/s, ρ : 2.85g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA2} = \Delta\sigma_{SMGA}$	77.98 MPa
平均すべり量	$D = M_0 / \mu S$	2.25 m	背景領域	地震モーメント	$M_{0back} = M_0 \cdot M_{0SMGA}$	1.56E+19 Nm
平均応力降下量	$\Delta\sigma = S_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} / S$	15.6 MPa		面積	$S_{back} = S - S_{SMGA}$	203.7 km ²
破壊伝播速度	V_r : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	1.69 m
短周期レベル	$A = 9.84 \times 10^{17} \times M_0^{1/3} [\text{dyne-cm}]$ (笹谷・他(2006)の M_0 - A 関係)	6.28E+19 Nm/s ²		実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA1}$ $W_{SMGA} = (\pi)^{0.5} r_{SMGA}^3 \Sigma \gamma_i^3$, $W_{back} = W$, $\gamma_i = r_{SMGA} / r_{SMGA1}$, $r_{SMGA1} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	11.80 MPa
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz	・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$) に基づく。			

・「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合で震源断層パラメータは同じ。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
短周期レベルの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
（地震動評価結果）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）

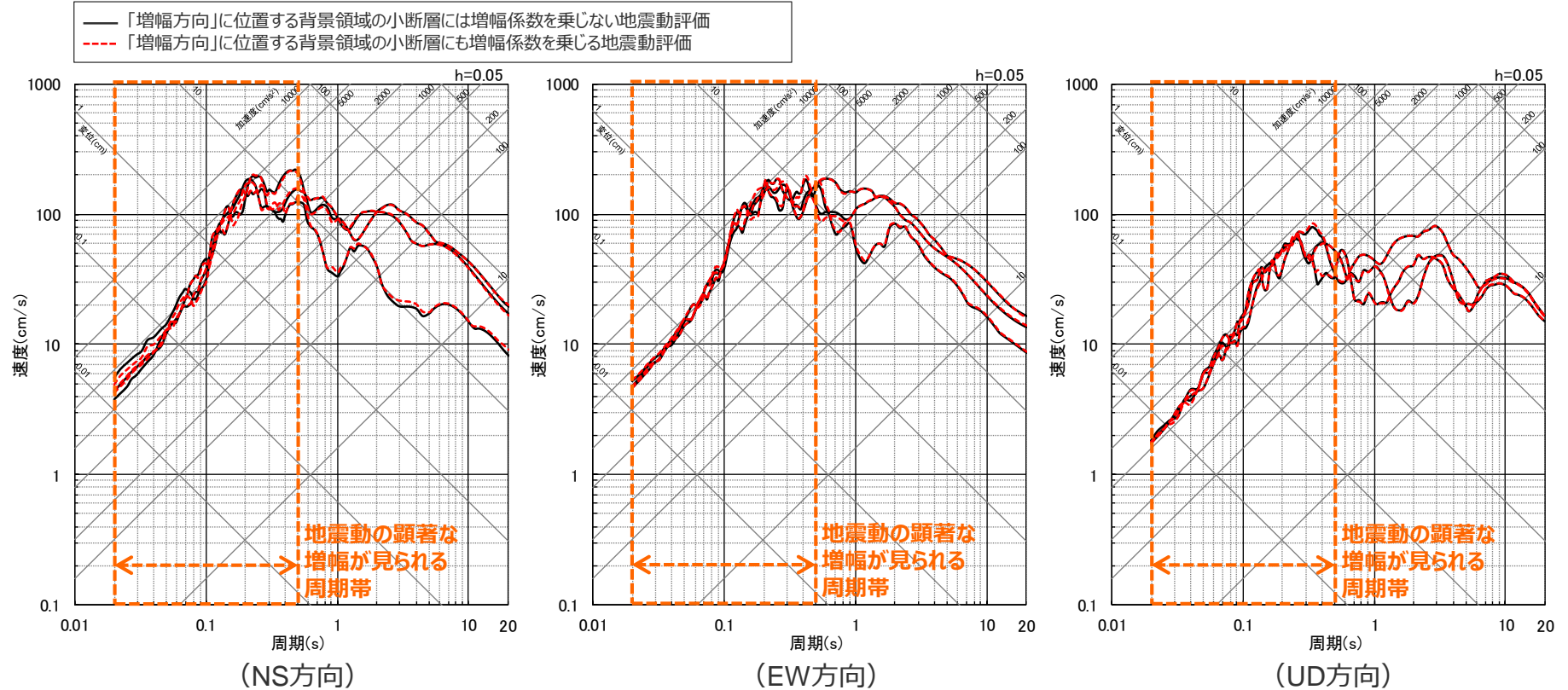


（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（加速度時刻歴波形）（破壊開始点1～3）>
 （短周期レベルの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震））

・統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

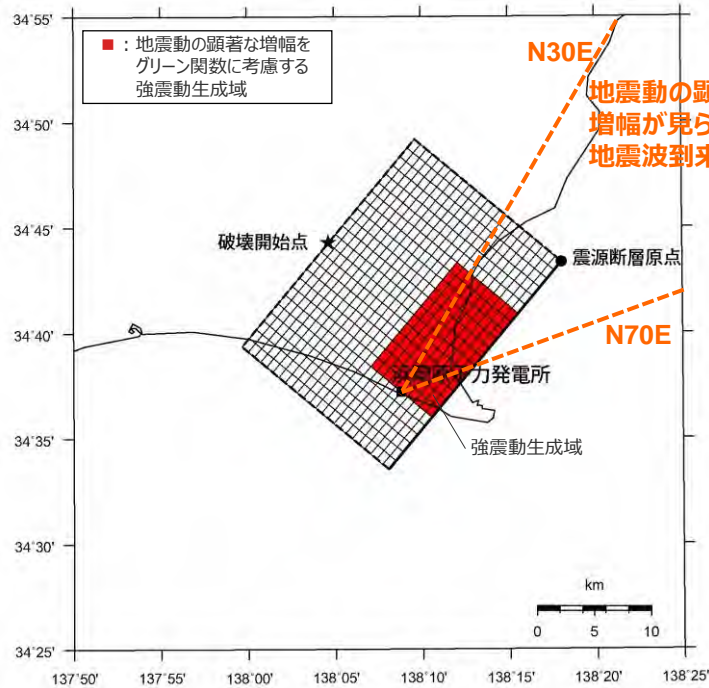
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
短周期レベルの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
 （地震動評価結果）



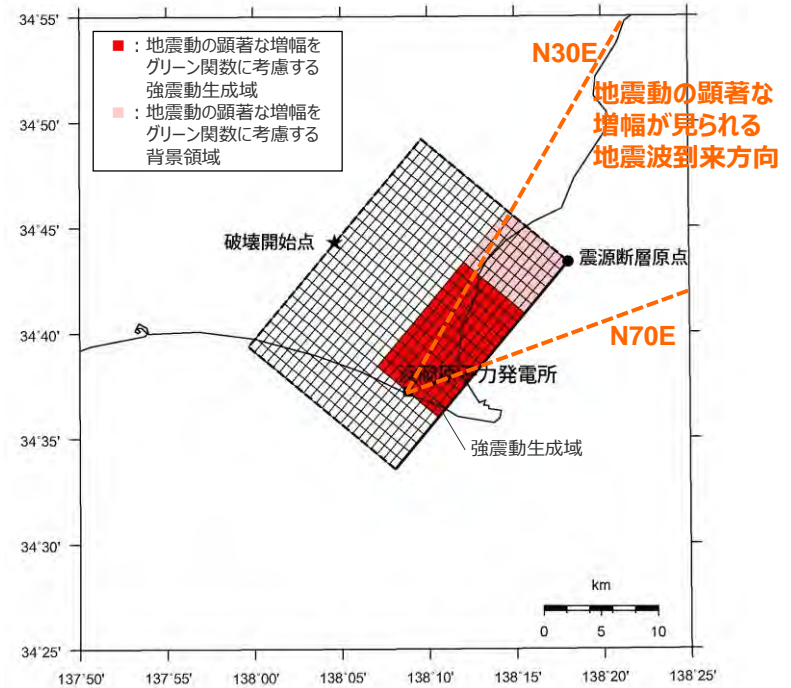
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（擬似速度応答スペクトル）（破壊開始点1~3）>
 （短周期レベルの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震））

・統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
強震動生成域の数の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
 （震源モデル）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

<強震動生成域の数の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）>

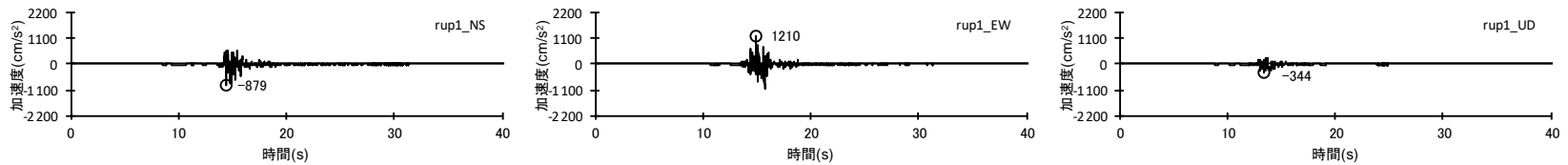
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
強震動生成域の数の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
（震源断層パラメータ）

<強震動生成域の数の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）の震源断層パラメータ>

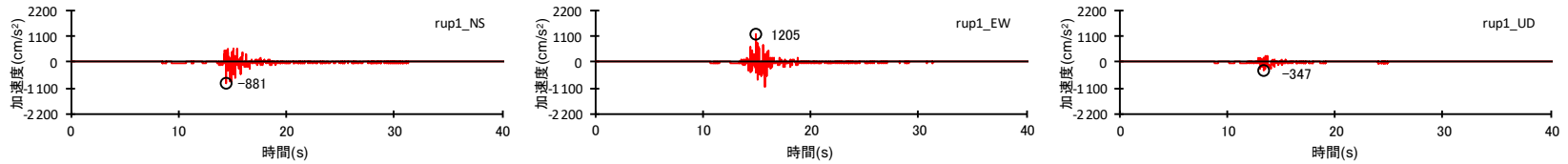
震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.722426度 東経138.300854度	強震動生成域	地震モーメント	2009年駿河湾の地震の M_0 - M_{0SMGA} 関係及びスケーリング則による	1.06E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	2009年駿河湾の地震の M_0 - S_{SMGA} 関係及びスケーリング則による	114.3 km ²
傾斜角	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	45 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = M_{0SMGA} / (\mu S_{SMGA})$	2.05 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi r_{SMGA} \beta^2)$, $r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	30.71 MPa
震源断層長さ	$L = S^{0.5}$	23.7 km	背景領域	地震モーメント	$M_{0back} = M_0 \cdot M_{0SMGA}$	1.54E+19 Nm
震源断層幅	$W = S^{0.5}$	23.7 km		面積	$S_{back} = S \cdot S_{SMGA}$	445.5 km ²
震源断層面積	$S = M_0 / (\mu D)$	559.8 km ²		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	0.76 m
震源断層上端深さ	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	23 km		実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA}$, $W_{SMGA} = 0.9875 \times 10$, $W_{back} = W$	4.76 MPa
地震モーメント	2009年駿河湾の地震（鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{19}$ Nm)の32 ^{0.5} 倍	2.60E+19 Nm	<ul style="list-style-type: none"> ・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式（$A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$）に基づく。 			
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	6.9				
気象庁マグニチュード	M_j : フィリピン海プレート(領域1)におけるスラブ内地震の最大規模等を踏まえ設定	7.0				
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99 km/s, ρ : 2.85 g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²				
平均すべり量	$D = D_{SMGA} / Y_D$, $Y_D = 2.0$	1.02 m				
平均応力降下量	$\Delta\sigma = (7/16) \cdot M_0 / (S/m)^{1.5}$	4.79 MPa				
破壊伝播速度	V_r : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s				
短周期レベル	2009年駿河湾の地震の M_0 - A 関係及びスケーリング則による	3.71E+19 Nm/s ²				
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz				

・「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合で震源断層パラメータは同じ。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
強震動生成域の数の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
（地震動評価結果）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）

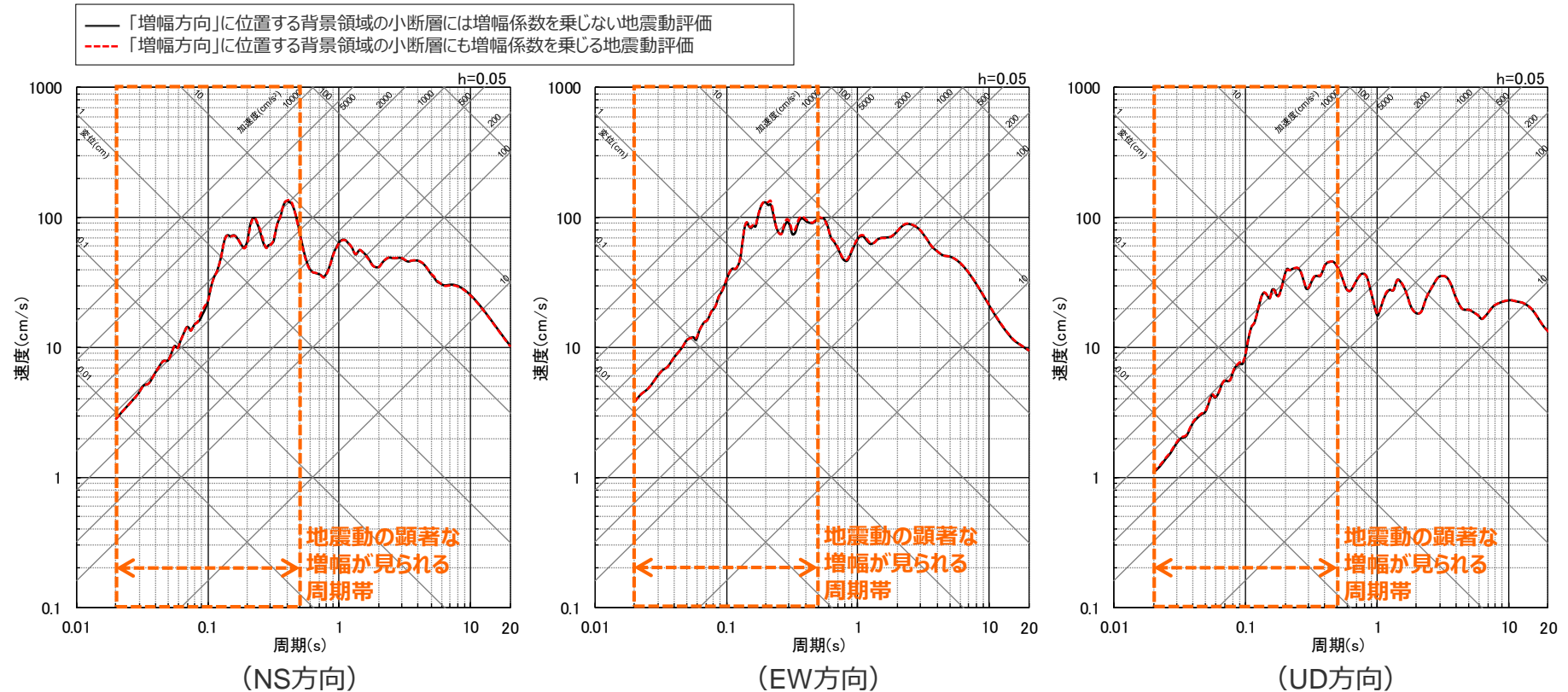


（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（加速度時刻歴波形）（破壊開始点1）>
（強震動生成域の数の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震））

・ 統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

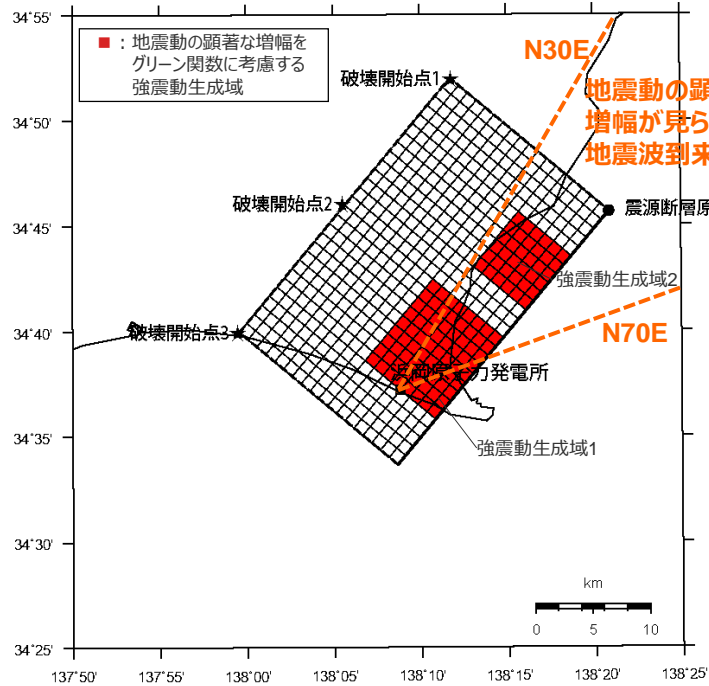
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
強震動生成域の数の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
（地震動評価結果）



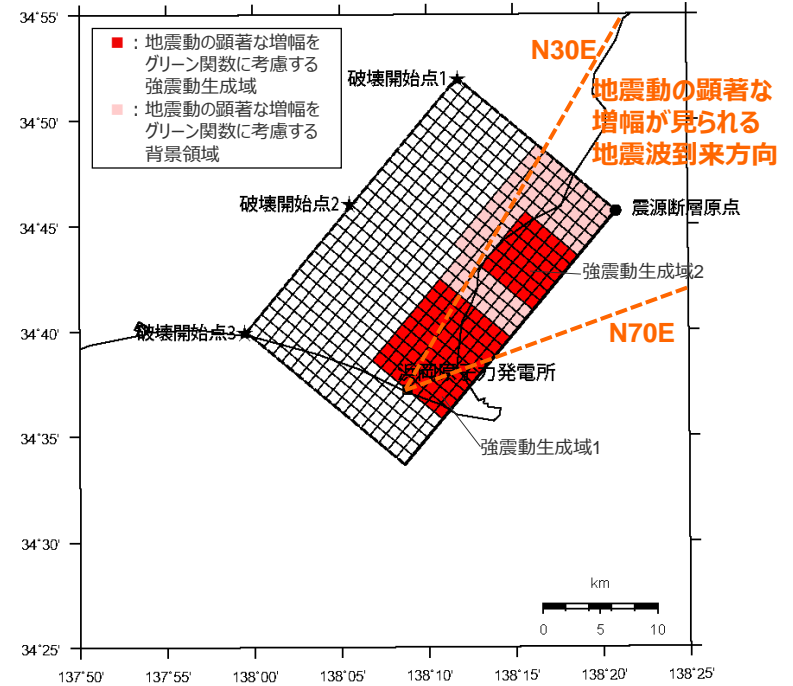
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（擬似速度応答スペクトル）（破壊開始点1）>
 （強震動生成域の数の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震））

・ 統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
 断層傾斜角の不確かさ (20°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
 (震源モデル)



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価)



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価)

<断層傾斜角の不確かさ (20°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震) >

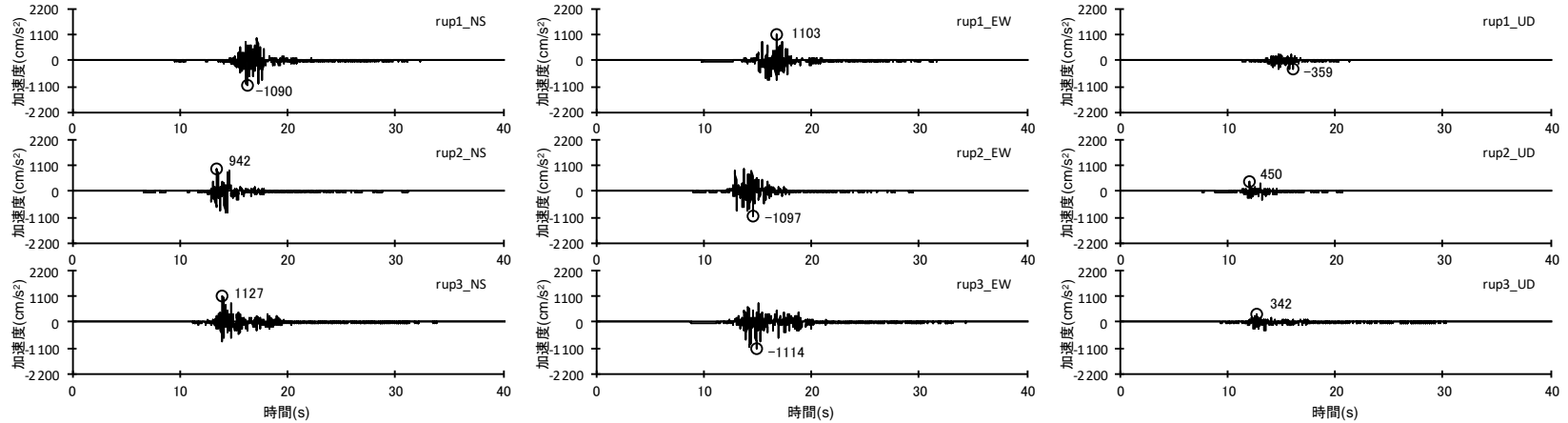
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
断層傾斜角の不確かさ (20°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
(震源断層パラメータ)

<断層傾斜角の不確かさ (20°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震) の震源断層パラメータ>

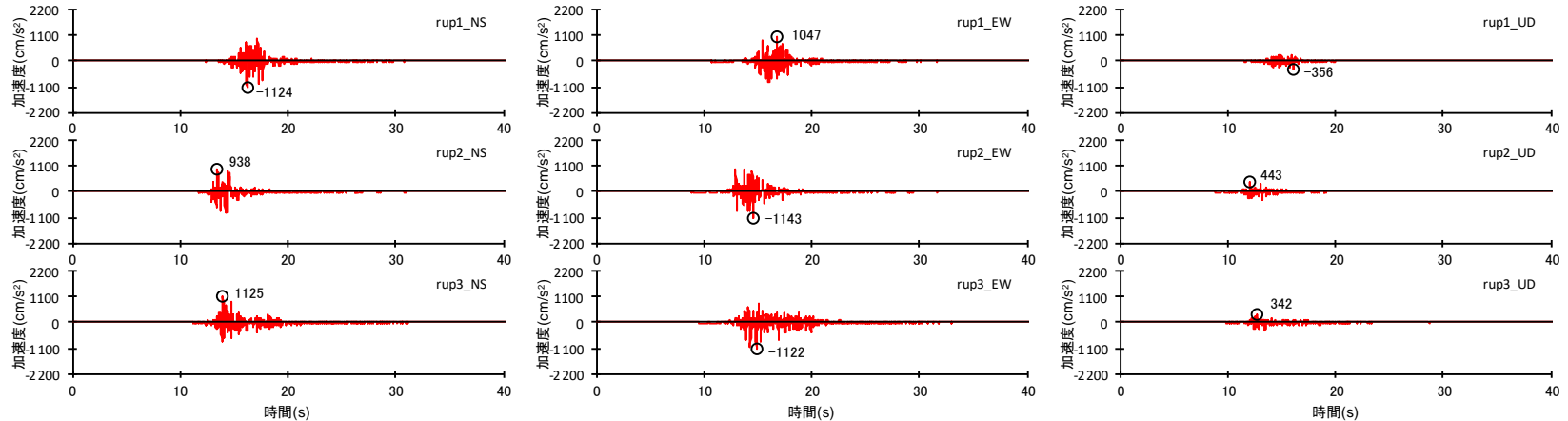
震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.760991度 東経138.347891度	強震動生成域	地震モーメント	2009年駿河湾の地震の M_0 - M_{0SMGA} 関係及びスケーリング則による	1.06E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	2009年駿河湾の地震の M_0 - S_{SMGA} 関係及びスケーリング則による	114.3 km ²
傾斜角	敷地周辺の地震等を参考に設定	20 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = M_{0SMGA} / (\mu S_{SMGA})$	2.05 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi r_{SMGA} \beta^2), r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	30.71 MPa
震源断層長さ	$L = (S/6)^{0.5} \times 3$	29.0 km	強震動生成域1	面積	$S_{SMGA1} = S_{SMGA} \times (2/3)$	76.2 km ²
震源断層幅	$W = (S/6)^{0.5} \times 2$	19.3 km		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA1}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	7.85E+18 Nm
震源断層面積	$S = M_0 / (\mu D)$	559.8 km ²		平均すべり量	$D_{SMGA1} = M_{0SMGA1} / (\mu \cdot S_{SMGA1})$	2.27 m
震源断層上端深さ	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	23 km	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA1} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa	
地震モーメント	2009年駿河湾の地震(鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{18}$ Nm)の32 ^{0.5} 倍	2.60E+19 Nm	強震動生成域2	面積	$S_{SMGA2} = S_{SMGA} \times (1/3)$	38.1 km ²
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	6.9		地震モーメント	$M_{0SMGA2} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA2}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	2.78E+18 Nm
気象庁マグニチュード	M_j : フィリピン海プレート(領域1)におけるスラブ内地震の最大規模等を踏まえ設定	7.0		平均すべり量	$D_{SMGA2} = M_{0SMGA2} / (\mu \cdot S_{SMGA2})$	1.61 m
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99 km/s, ρ : 2.85 g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA2} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa
平均すべり量	$D = D_{SMGA} / \gamma_D, \gamma_D = 2.0$	1.02 m	背景領域	地震モーメント	$M_{0back} = M_0 \cdot M_{0SMGA}$	1.54E+19 Nm
平均応力降下量	$\Delta\sigma = (7/16) \cdot M_0 / (S/\pi)^{1.5}$	4.79 MPa		面積	$S_{back} = S - S_{SMGA}$	445.5 km ²
破壊伝播速度	V_r : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	0.76 m
短周期レベル	2009年駿河湾の地震の M_0 - A 関係及びスケーリング則による	3.71E+19 Nm/s ²		実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA1}$ $W_{SMGA} = (\pi)^{0.5} r_{SMGA}^3 \Sigma \gamma_i^3, W_{back} = W, \gamma_i = r_{SMGA} / r_{SMGA1}, r_{SMGA1} = (S_{SMGA1} / \pi)^{0.5}$	4.66 MPa
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz	<ul style="list-style-type: none"> ・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$) に基づく。 			

・「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合で震源断層パラメータは同じ。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
 断層傾斜角の不確かさ (20°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
 (地震動評価結果)



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価)



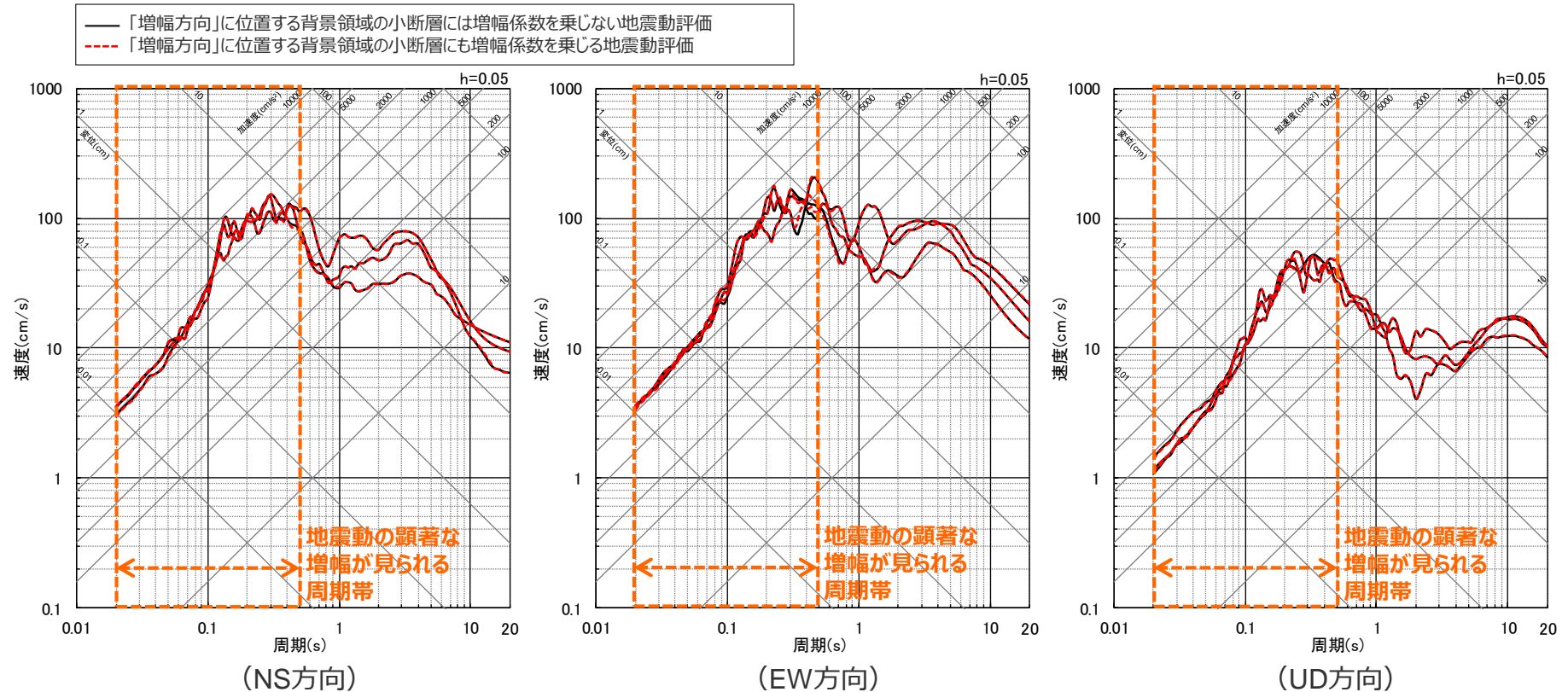
(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価)

<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (加速度時刻歴波形) (破壊開始点1~3) >

(断層傾斜角の不確かさ (20°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震))

・統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

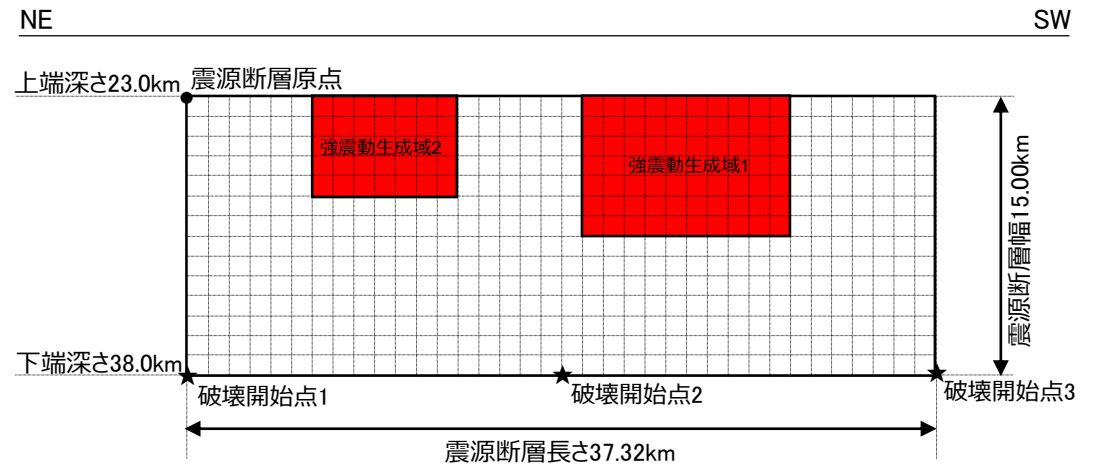
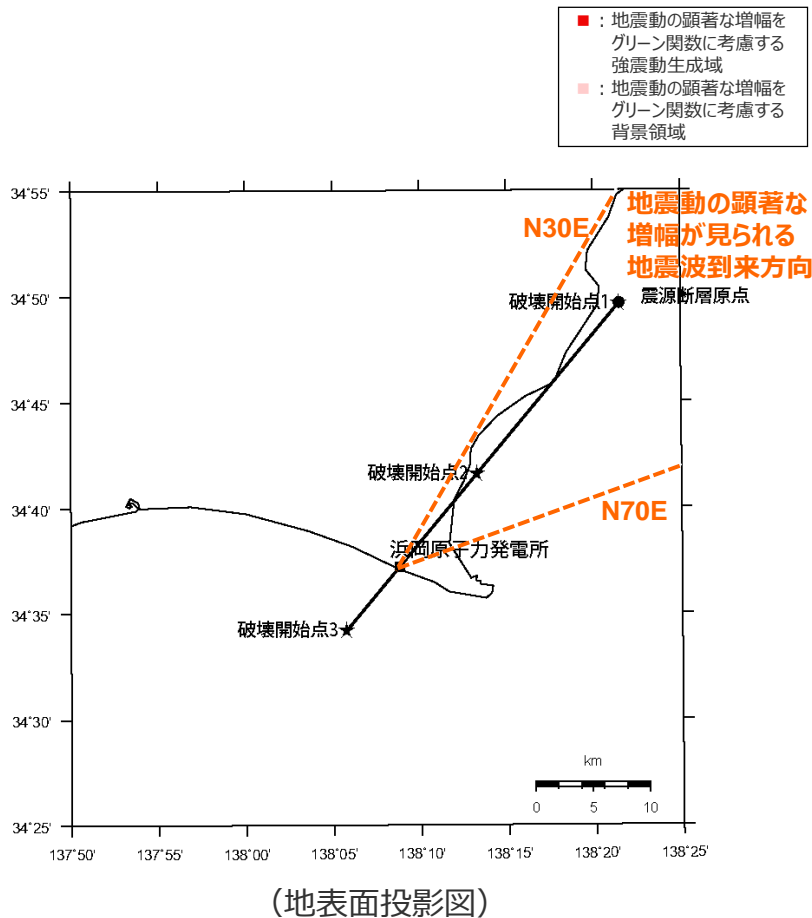
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
 断層傾斜角の不確かさ (20°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
 (地震動評価結果)



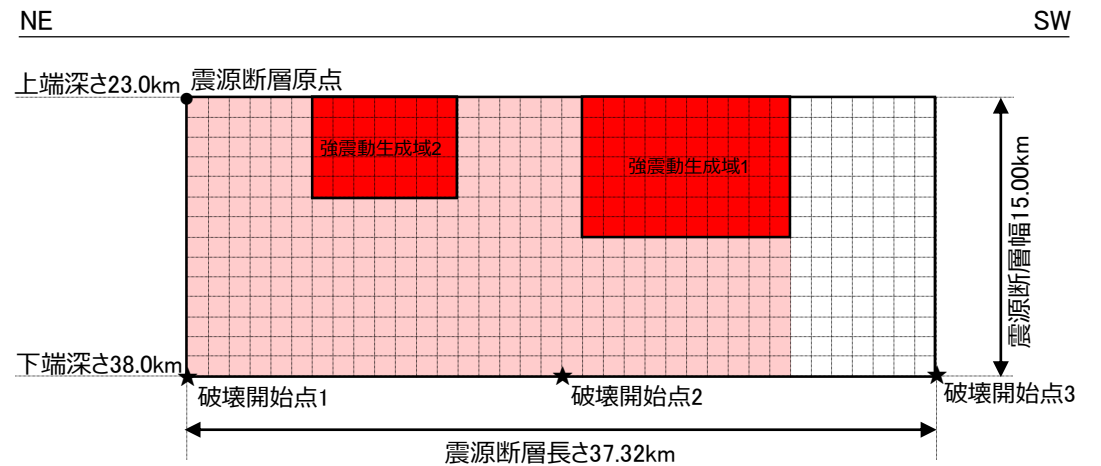
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (擬似速度応答スペクトル) (破壊開始点1~3) >
 (断層傾斜角の不確かさ (20°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震))

・ 統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
 断層傾斜角の不確かさ (90°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
 (震源モデル)



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価)



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価)
 (展開図)

<断層傾斜角の不確かさ (90°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震) >

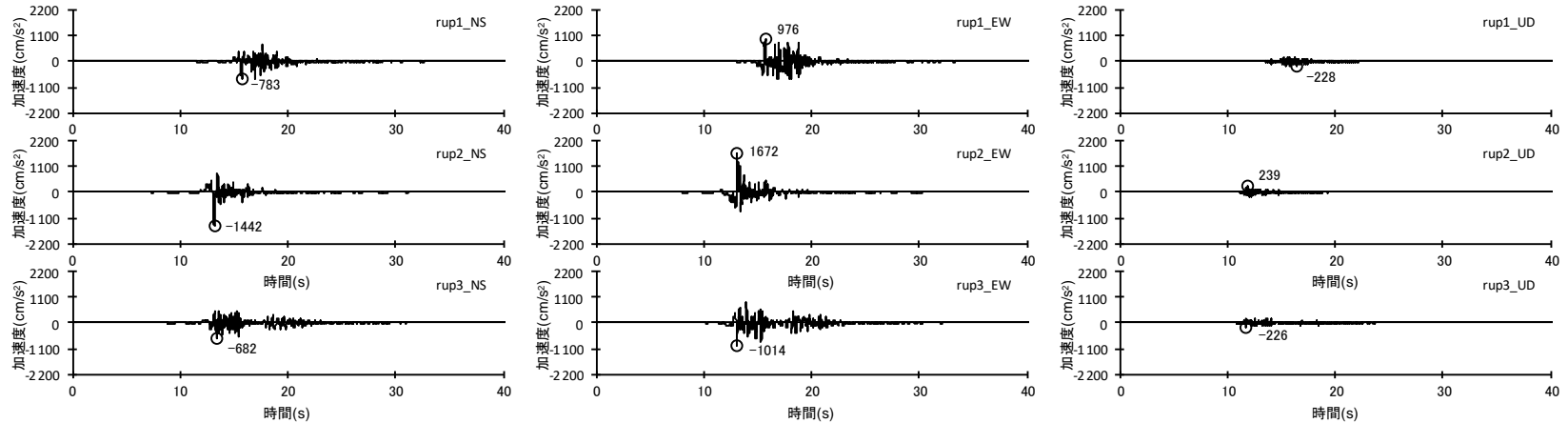
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
断層傾斜角の不確かさ (90°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
(震源断層パラメータ)

<断層傾斜角の不確かさ (90°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震) の震源断層パラメータ>

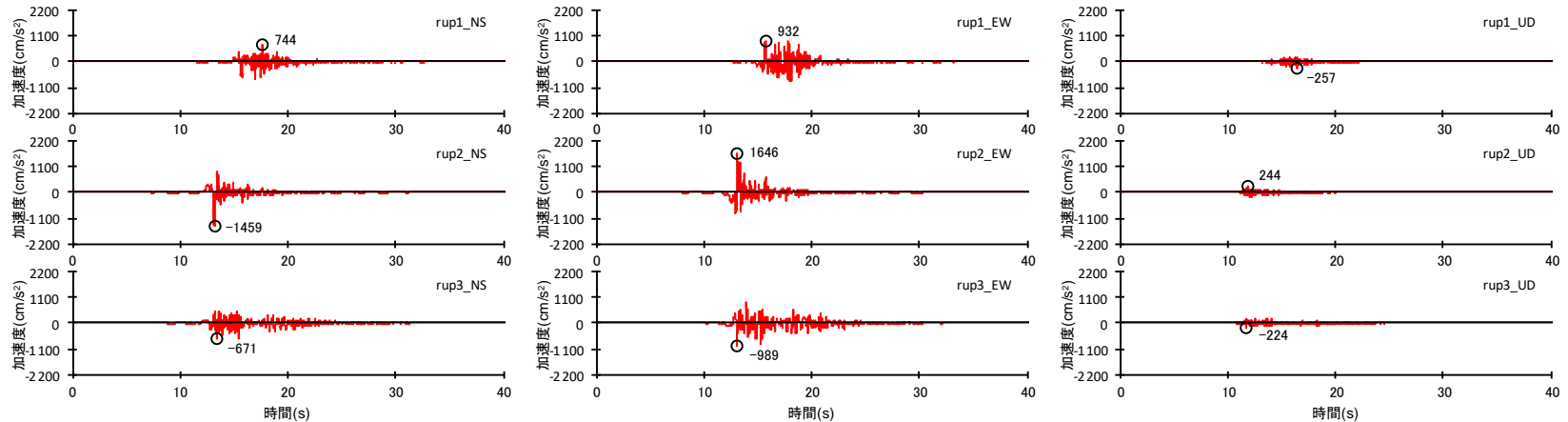
震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.827434度 東経138.358163度	強震動生成域	地震モーメント	2009年駿河湾の地震の M_0 - M_{0SMGA} 関係及びスケーリング則による	1.06E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	2009年駿河湾の地震の M_0 - S_{SMGA} 関係及びスケーリング則による	114.3 km ²
傾斜角	ディレクティブティ効果を検討して設定	90 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = M_{0SMGA} / (\mu S_{SMGA})$	2.05 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi r_{SMGA} \beta^2), r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	30.71 MPa
震源断層長さ	$L = S/W$	37.3 km	強震動生成域1	面積	$S_{SMGA1} = S_{SMGA} \times (2/3)$	76.2 km ²
震源断層幅	敷地周辺の地震発生層の幅を踏まえて設定	15.0 km		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA1}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	7.85E+18 Nm
震源断層面積	$S = M_0 / (\mu D)$	559.8 km ²		平均すべり量	$D_{SMGA1} = M_{0SMGA1} / (\mu \cdot S_{SMGA1})$	2.27 m
震源断層上端深さ	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	23 km	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA1} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa	
地震モーメント	2009年駿河湾の地震(鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{19}$ Nm)の32 ^{0.5} 倍	2.60E+19 Nm	強震動生成域2	面積	$S_{SMGA2} = S_{SMGA} \times (1/3)$	38.1 km ²
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	6.9		地震モーメント	$M_{0SMGA2} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA2}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	2.78E+18 Nm
気象庁マグニチュード	M_j : フィリピン海プレート(領域1)におけるスラブ内地震の最大規模等を踏まえ設定	7.0		平均すべり量	$D_{SMGA2} = M_{0SMGA2} / (\mu \cdot S_{SMGA2})$	1.61 m
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99 km/s, ρ : 2.85 g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA2} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa
平均すべり量	$D = D_{SMGA} / \gamma_D, \gamma_D = 2.0$	1.02 m	背景領域	地震モーメント	$M_{0back} = M_0 \cdot M_{0SMGA}$	1.54E+19 Nm
平均応力降下量	$\Delta\sigma = (7/16) \cdot M_0 / (S/m)^{1.5}$	4.79 MPa		面積	$S_{back} = S - S_{SMGA}$	445.5 km ²
破壊伝播速度	V_r : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	0.76 m
短周期レベル	2009年駿河湾の地震の M_0 - A 関係及びスケーリング則による	3.71E+19 Nm/s ²		実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA1}$ $W_{SMGA} = (\pi)^{0.5} r_{SMGA}^3 \Sigma \gamma_i^3, W_{back} = W, \gamma_i = r_{SMGA} / r_{SMGA1}, r_{SMGA1} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	4.66 MPa
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz	<ul style="list-style-type: none"> ・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$) に基づく。 			

「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合で震源断層パラメータは同じ。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
 断層傾斜角の不確かさ (90°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
 (地震動評価結果)



(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価)



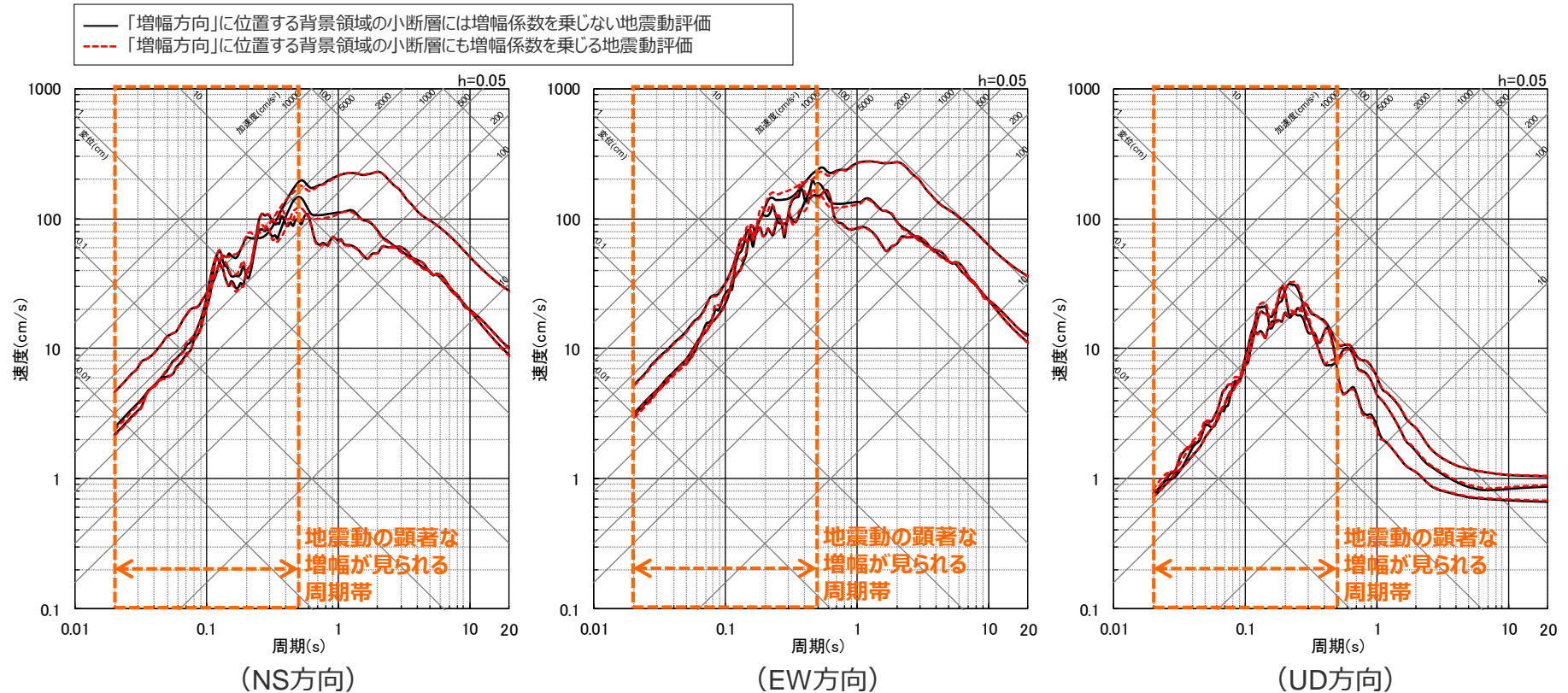
(「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価)

<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (加速度時刻歴波形) (破壊開始点1~3) >

(断層傾斜角の不確かさ (90°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震))

・統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

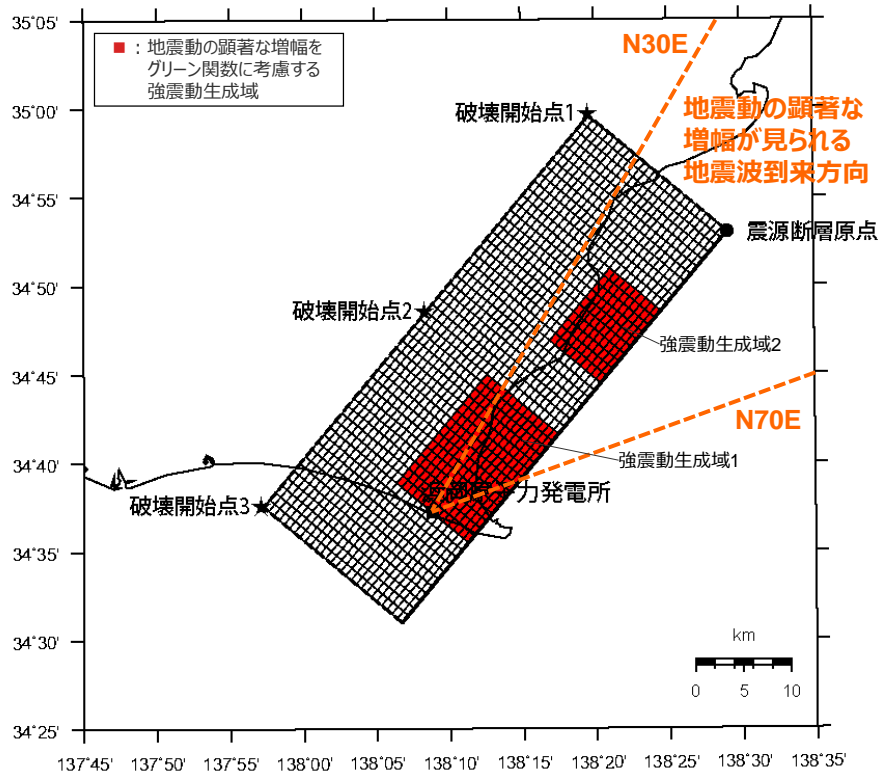
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
 断層傾斜角の不確かさ (90°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
 (地震動評価結果)



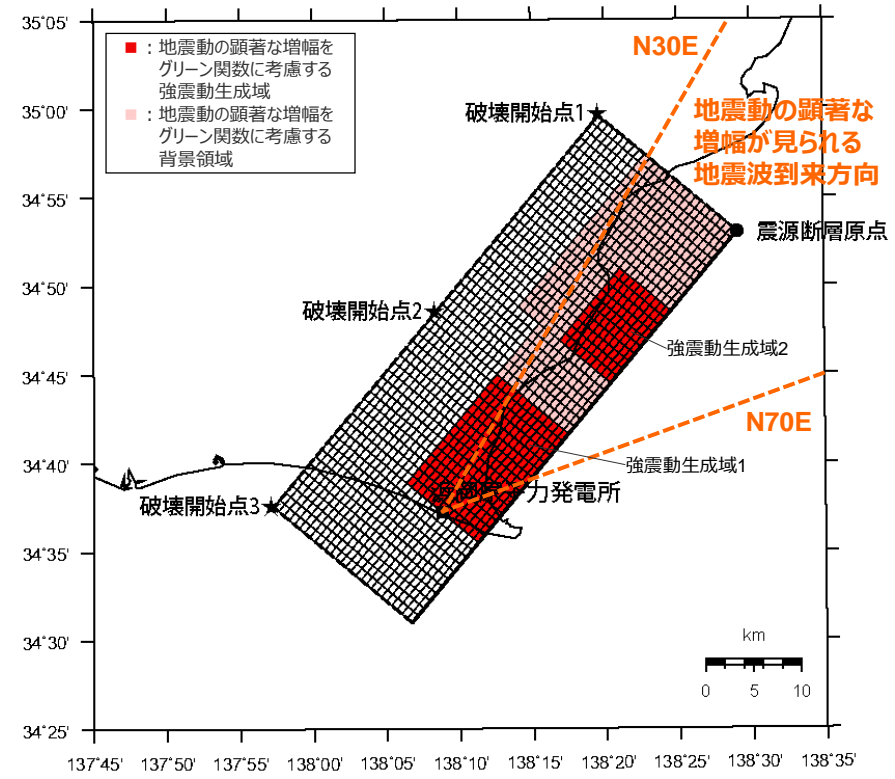
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較 (擬似速度応答スペクトル) (破壊開始点1~3) >
 (断層傾斜角の不確かさ (90°) を考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震))

・統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
地震規模の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
 （震源モデル）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

<地震規模の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）>

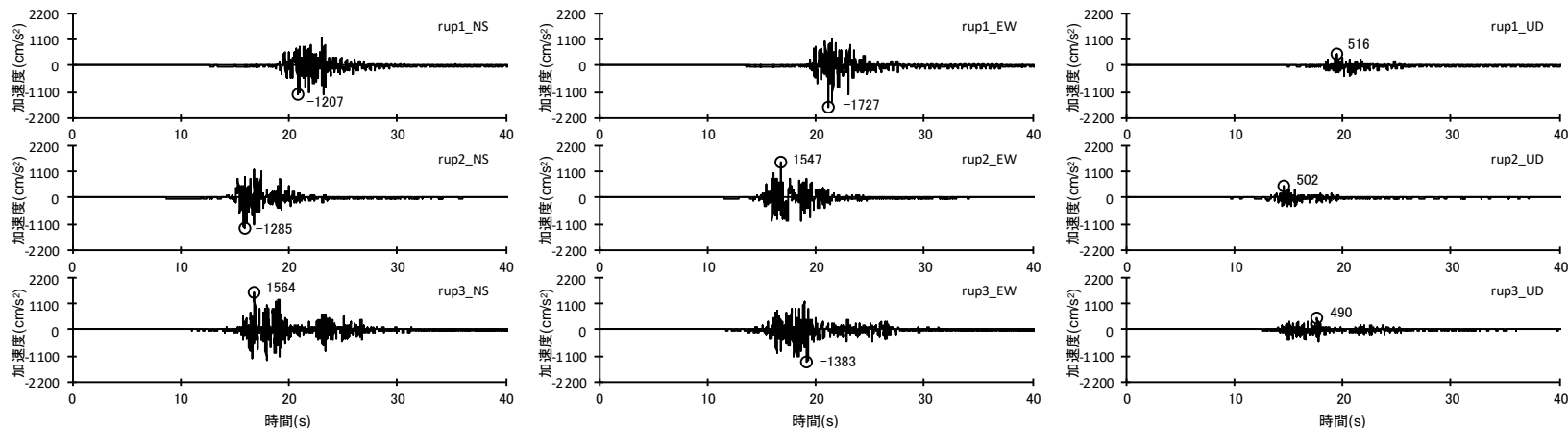
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
地震規模の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮)
(震源断層パラメータ)

<地震規模の不確かさを考慮した震源モデル (地震動の顕著な増幅を考慮) (敷地下方の想定スラブ内地震) の震源断層パラメータ>

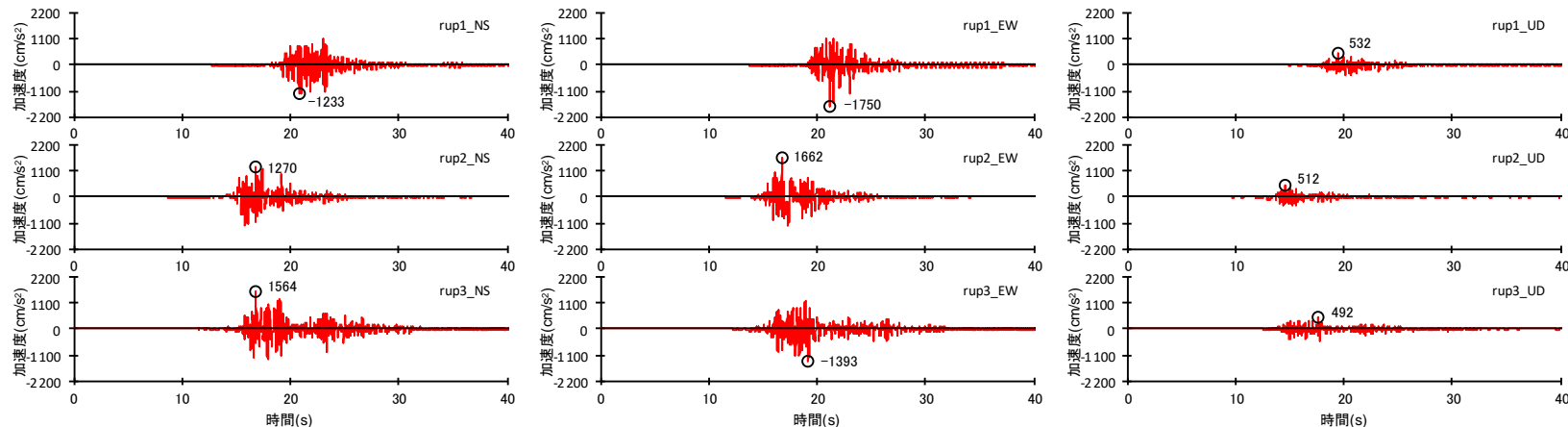
震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.883279度 東経138.485104度	強震動生成域	地震モーメント	2009年駿河湾の地震の M_0 - M_{0SMGA} 関係及びスケーリング則による	4.25E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	2009年駿河湾の地震の M_0 - S_{SMGA} 関係及びスケーリング則による	288.0 km ²
傾斜角	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	45 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = M_{0SMGA} / (\mu S_{SMGA})$	3.25 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi r_{SMGA} \beta^2)$, $r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	30.71 MPa
震源断層長さ	$L = (S/2)^{0.5} \times 2$	53.1 km	強震動生成域1	面積	$S_{SMGA1} = S_{SMGA} \times (2/3)$	192.0 km ²
震源断層幅	$W = (S/2)^{0.5}$	26.6 km		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA1}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	3.14E+19 Nm
震源断層面積	$S = M_0 / (\mu D)$	1410.6 km ²		平均すべり量	$D_{SMGA1} = M_{0SMGA1} / (\mu \cdot S_{SMGA1})$	3.60 m
震源断層上端深さ	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	23 km	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA1} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa	
地震モーメント	2009年駿河湾の地震(鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{19}$ Nm)の512 ^{0.5} 倍	1.04E+20 Nm	強震動生成域2	面積	$S_{SMGA2} = S_{SMGA} \times (1/3)$	96.0 km ²
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	7.3		地震モーメント	$M_{0SMGA2} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA2}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	1.11E+19 Nm
気象庁マグニチュード	M_j : 地震規模の不確かさを踏まえ設定	7.4		平均すべり量	$D_{SMGA2} = M_{0SMGA2} / (\mu \cdot S_{SMGA2})$	2.55 m
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99 km/s, ρ : 2.85 g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA2} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa	
平均すべり量	$D = D_{SMGA} / \gamma_D$, $\gamma_D = 2.0$	1.63 m	背景領域	地震モーメント	$M_{0back} = M_0 \cdot M_{0SMGA}$	6.16E+19 Nm
平均応力降下量	$\Delta\sigma = (7/16) \cdot M_0 / (S/m)^{1.5}$	4.79 MPa		面積	$S_{back} = S - S_{SMGA}$	1122.6 km ²
破壊伝播速度	V_r : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	1.21 m
短周期レベル	2009年駿河湾の地震の M_0 - A 関係及びスケーリング則による	5.88E+19 Nm/s ²		実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA1}$ $W_{SMGA} = (\pi)^{0.5} r_{SMGA}^3 \Sigma \gamma_i^3$, $W_{back} = W$, $\gamma_i = r_{SMGA} / r_{SMGA1}$, $r_{SMGA1} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	5.37 MPa
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz	・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$) に基づく。			

・「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合で震源断層パラメータは同じ。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
地震規模の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
（地震動評価結果）



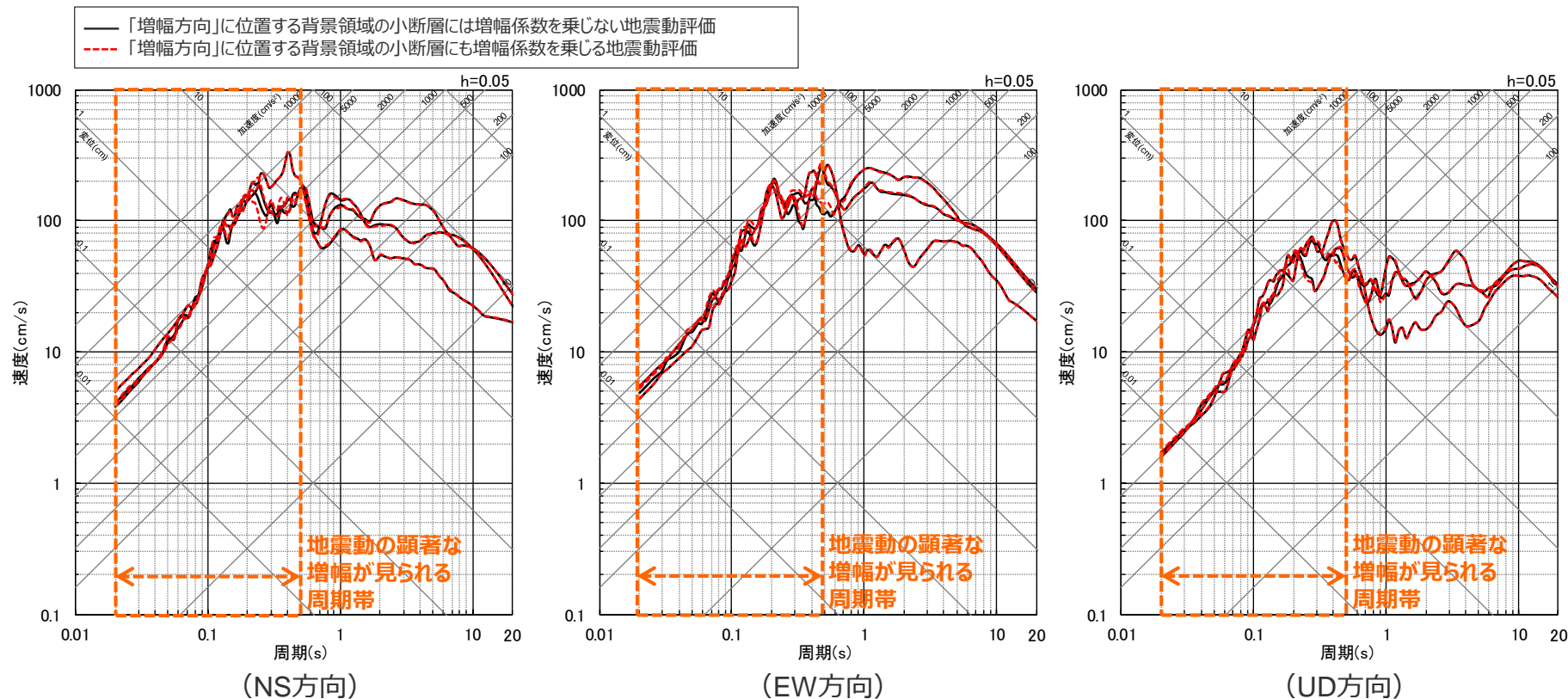
（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

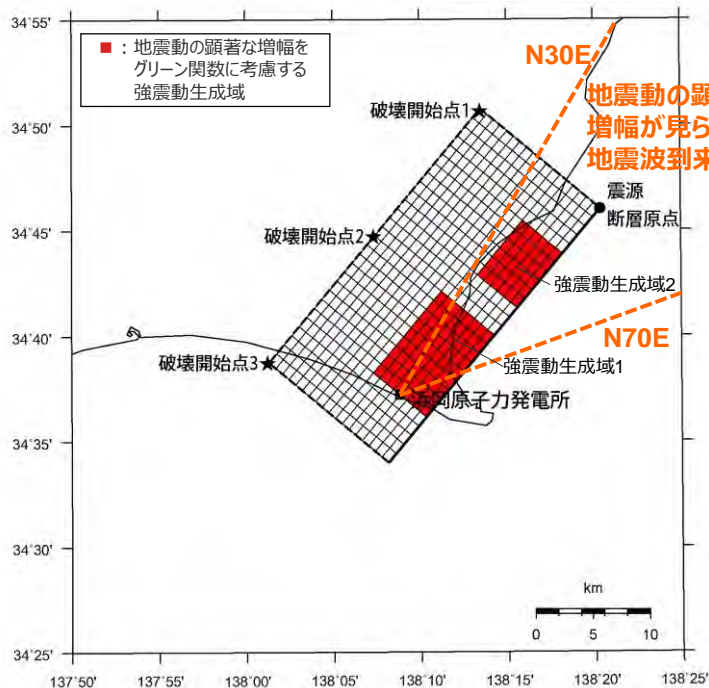
<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（加速度時刻歴波形）（破壊開始点1～3）>
 （地震規模不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震））

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
地震規模の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
（地震動評価結果）

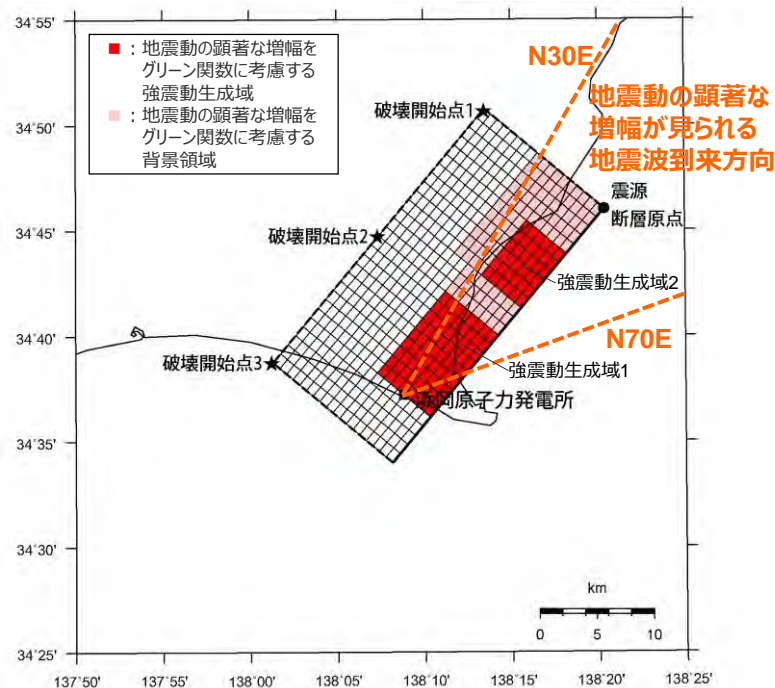


<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（擬似速度応答スペクトル）（破壊開始点1~3）>
 （地震規模の不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）...敷地下方の想定スラブ内地震）

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
震源深さの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
 （震源モデル）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

<震源深さの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）>

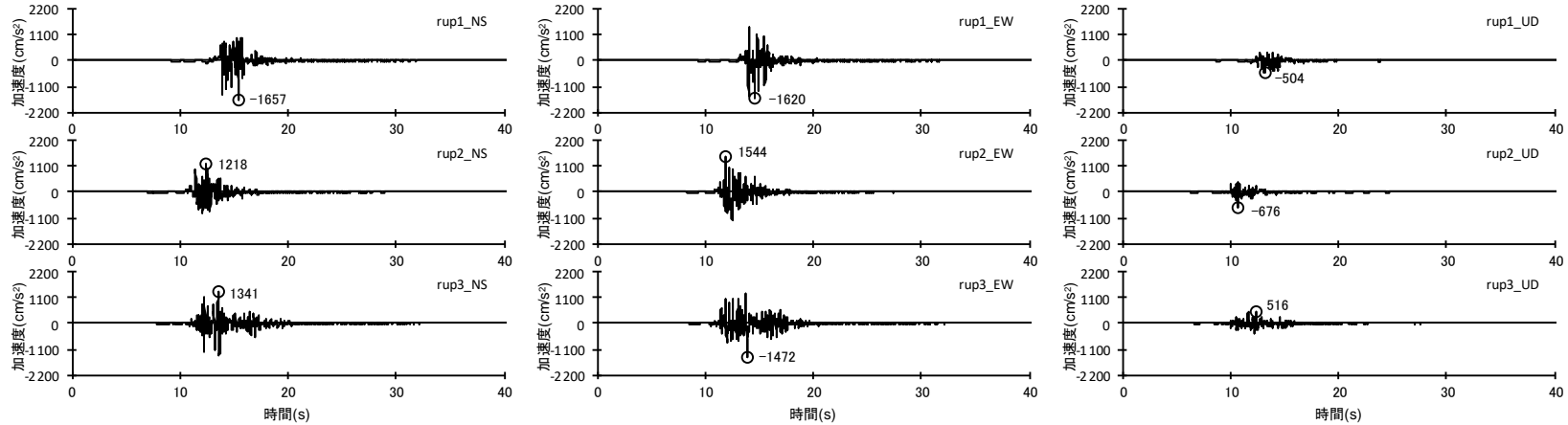
<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
震源深さの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
 （震源断層パラメータ）

<震源深さの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震）の震源断層パラメータ>

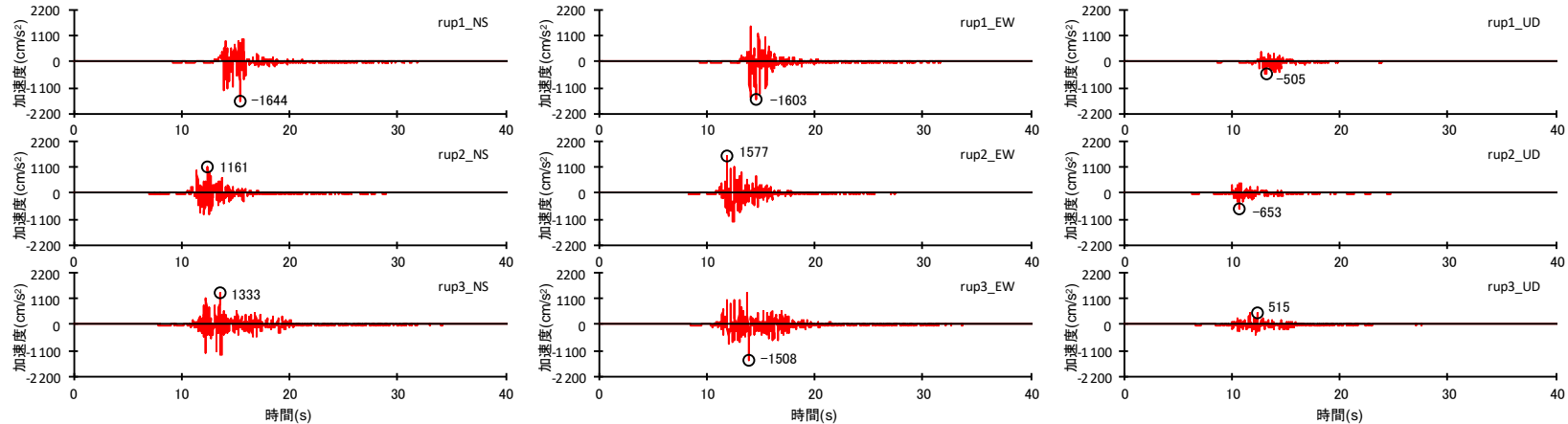
震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	震源断層パラメータ	設定方法	設定結果	
震源断層原点	敷地下方に設定	北緯34.766785度 東経138.339557度	強震動生成域	地震モーメント	2009年駿河湾の地震の M_0 - M_{0SMGA} 関係及びスケーリング則による	1.06E+19 Nm
走向	プレートの沈み込み方向に直交	220 °		面積	2009年駿河湾の地震の M_0 - S_{SMGA} 関係及びスケーリング則による	114.3 km ²
傾斜角	2009年駿河湾の地震の知見に基づき設定	45 °		平均すべり量	$D_{SMGA} = M_{0SMGA} / (\mu S_{SMGA})$	2.05 m
すべり角	DC型	90 °		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA} = A / (4\pi r_{SMGA} \beta^2), r_{SMGA} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	30.71 MPa
震源断層長さ	$L = (S/6)^{0.5} \times 3$	29.0 km	強震動生成域1	面積	$S_{SMGA1} = S_{SMGA} \times (2/3)$	76.2 km ²
震源断層幅	$W = (S/6)^{0.5} \times 2$	19.3 km		地震モーメント	$M_{0SMGA1} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA1}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	7.85E+18 Nm
震源断層面積	$S = M_0 / (\mu D)$	559.8 km ²		平均すべり量	$D_{SMGA1} = M_{0SMGA1} / (\mu \cdot S_{SMGA1})$	2.27 m
震源断層上端深さ	敷地直下のフィリピン海プレートの構造を踏まえて設定	13.8 km	応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA1} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa	
地震モーメント	2009年駿河湾の地震（鈴木・他(2009)の $M_0 = 4.6 \times 10^{19}$ Nm)の32 ^{0.5} 倍	2.60E+19 Nm	強震動生成域2	面積	$S_{SMGA2} = S_{SMGA} \times (1/3)$	38.1 km ²
モーメントマグニチュード	$M_w = (\log M_0 - 9.1) / 1.5$	6.9		地震モーメント	$M_{0SMGA2} = M_{0SMGA} \times S_{SMGA2}^{1.5} / (S_{SMGA1}^{1.5} + S_{SMGA2}^{1.5})$	2.78E+18 Nm
気象庁マグニチュード	M_j : フィリピン海プレート(領域1)におけるスラブ内地震の最大規模等を踏まえ設定	7.0		平均すべり量	$D_{SMGA2} = M_{0SMGA2} / (\mu \cdot S_{SMGA2})$	1.61 m
剛性率	$\mu = \rho \beta^2$ (β : 3.99 km/s, ρ : 2.85 g/cm ³ (地下構造調査結果等に基づく一次元地下構造モデルによる))	4.54E+10 N/m ²		応力降下量	$\Delta\sigma_{SMGA2} = \Delta\sigma_{SMGA}$	30.71 MPa
平均すべり量	$D = D_{SMGA} / \gamma_D, \gamma_D = 2.0$	1.02 m	背景領域	地震モーメント	$M_{0back} = M_0 \cdot M_{0SMGA}$	1.54E+19 Nm
平均応力降下量	$\Delta\sigma = (7/16) \cdot M_0 / (S/m)^{1.5}$	4.79 MPa		面積	$S_{back} = S - S_{SMGA}$	445.5 km ²
破壊伝播速度	V_r : 2009年駿河湾の地震の特性化震源モデルによる	3.4 km/s		平均すべり量	$D_{back} = M_{0back} / (\mu S_{back})$	0.76 m
短周期レベル	2009年駿河湾の地震の M_0 - A 関係及びスケーリング則による	3.71E+19 Nm/s ²		実効応力	$\sigma_{back} = (D_{back} / W_{back}) / (D_{SMGA} / W_{SMGA}) \Delta\sigma_{SMGA1}$ $W_{SMGA} = (\pi)^{0.5} r_{SMGA}^3 \Sigma \gamma_i^3, W_{back} = W, \gamma_i = r_{SMGA} / r_{SMGA1}, r_{SMGA1} = (S_{SMGA} / \pi)^{0.5}$	4.66 MPa
f_{max}	中央防災会議(2004)による	6.0 Hz	・震源断層パラメータ表中の2009年駿河湾の地震は本震。 ・強震動生成域の短周期レベルは、壇・他(2001)による関係式 ($A = 4\pi r_{SMGA} \Delta\sigma_{SMGA} \beta^2$) に基づく。			

・「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない場合と「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる場合で震源断層パラメータは同じ。

＜補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価＞
 震源深さの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
 （地震動評価結果）



（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層には増幅係数を乗じない地震動評価）

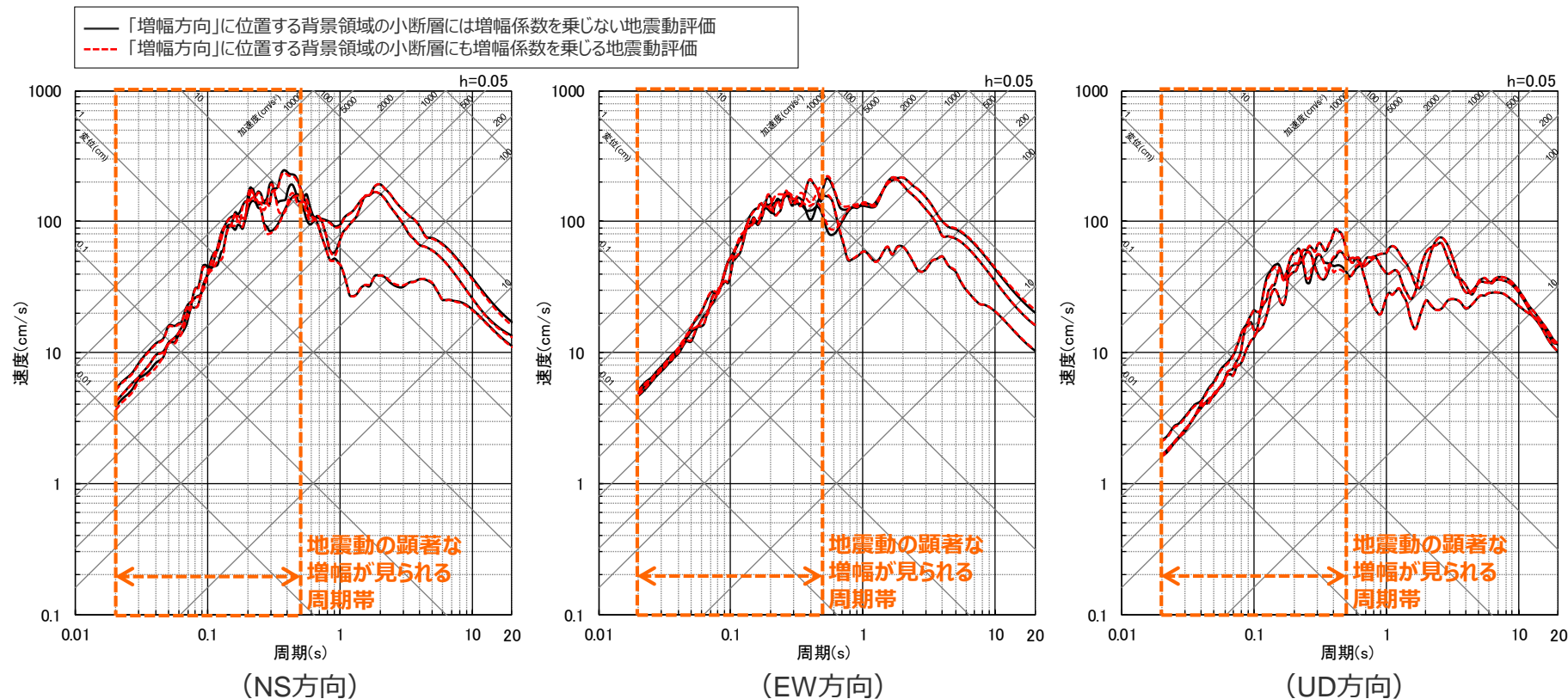


（「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価）

＜断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（加速度時刻歴波形）（破壊開始点1～3）＞
 （震源深さの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）（敷地下方の想定スラブ内地震））

・統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

<補足説明資料③-42 「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる海洋プレート内地震の地震動評価>
震源深さの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）
（地震動評価結果）



<断層モデルを用いた手法による地震動評価結果の比較（擬似速度応答スペクトル）（破壊開始点1~3）>
（震源深さの不確かさを考慮した震源モデル（地震動の顕著な増幅を考慮）...（敷地下方の想定スラブ内地震））

・統計的グリーン関数法と波数積分法のハイブリッド合成法による。

まとめ

【検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価】

- 各検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価は、**地震動の顕著な増幅が見られた短周期の地震動への影響が支配的な強震動生成域（アスペリティ）に着目し**、断層モデルを用いた手法において、敷地近傍に強震動生成域（アスペリティ）を配置したうえで、地震動の顕著な増幅を考慮する強震動生成域（アスペリティ）の小断層の範囲・増幅の程度を**地震観測記録の分析結果に対し保守的に設定することにより、保守的な地震動評価**を行う。応答スペクトルに基づく手法は、断層モデルを用いた手法による保守的な地震動評価結果を反映することにより、保守的な地震動評価を行う。



【地震動評価結果に考慮された保守性の確認】

- 各地震タイプ（内陸地殻内地震、プレート間地震、海洋プレート内地震）の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の断層モデルを用いた手法による地震動評価及び応答スペクトルに基づく地震動評価について、**敷地近傍は地震動の顕著な増幅が見られないなどの地震観測記録の分析結果に沿った場合の地震動評価を行い、地震観測記録の分析結果に対し保守的な地震動評価結果となっていることを確認した。**

【「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響の確認】

- 「増幅方向」に背景領域の小断層が位置するプレート間地震及び海洋プレート内地震の検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）を対象に、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層のグリーン関数にも増幅係数を乗じた場合の影響確認を行い、**「増幅方向」に位置する背景領域の小断層による影響は小さく、「増幅方向」の敷地近傍に配置した強震動生成域による影響が支配的であることを確認した。**



【第940・992回審査会合におけるコメントを踏まえた対応】

- 地震動の顕著な増幅を考慮する地震動評価では、上記のとおり、地震動の顕著な増幅が見られた短周期の地震動への影響が支配的な強震動生成域（アスペリティ）に着目した保守的な設定を行っており、検討用地震（地震動の顕著な増幅を考慮）の地震動評価結果は、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層に増幅係数を乗じる乗じないにかかわらず、十分保守的な評価結果と考えられる。
- しかしながら、第940・992回審査会合におけるコメントを踏まえ、**海洋プレート内地震の地震動評価結果については、より慎重に保守的な評価を行い、全ての震源モデルに対して、「増幅方向」に位置する背景領域の小断層にも増幅係数を乗じる地震動評価結果を採用することとする。**

参考文献

- ・参考文献は、本資料参照。



中部電力